

道頓堀特輯

# 南 産 顔 男 世 跡



昭和四年十二月一日發行





十二月一日より

吉例歳暮

大安賣市開催

値下断行  
大賣出し中



近頃ゑらく評判の安い

◎へは皆様気軽るに

お出かけ下さいます

夜分も九時まで

營業致して

居ります

皆様の百店  
**物産館**

前驛都京



御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を

昭和四年拾貳月拾六日  
觀劇

凡味及下等川魚は忌む  
大分山形料理  
味田本料理  
川村觀月  
水心息美  
同伴

# 喜久屋食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドングリ橋



道頓堀 昭和四年十二月號

第四年 第三十九輯

◇表紙(近江源氏先陣館・盛綱陣屋)……………大塚克三 畫

□  
 ◇南座竣工記念顔見世興行◇新築南座の正面と玄關◇同場内の壯觀◇同座内の各室◇「近江源氏先陣館」鷹治郎の盛綱◇鷹治郎の盛綱と錦繪の和田兵衛◇中車の和田兵衛と錦繪の盛綱◇「彩月」魁車の立花屋八五郎、福助の和泉屋與兵衛◇「お夏狂亂」梅幸の狂女お夏と舞臺面◇「暫」幸四郎の鎌倉權五郎景政◇魁車の照葉、扇雀の息女桂の前◇宗十郎の鹿島入道震齋◇錦繪の「暫」とその舞臺全景◇「賀の祝」中車の白太夫◇「大森彦七」幸四郎の大森彦七◇宗十郎の息女千早姫◇「船辨慶」梅幸の知盛の靈◇梅幸の愛妾靜、彦三郎の武藏坊辨慶◇「心中紙屋治兵衛」河庄の場、鷹治郎の紙屋治兵衛、梅幸の河内屋お庄◇河庄表の場で鷹治郎の治兵衛◇魁車の組の國屋小春、中車の粉屋孫右衛門◇「壽靱猿」宗十郎の猿曳の太夫◇幸四郎の女大名三好野、長三郎の奴蝶平

◇扉(顔見世手打ちの式)……………南木萍水所藏

御 挨拶……………白井松次郎(二)

初開場の際して……………白井信太郎(二)

◇顔見世興行の縁起……………飯塚友一郎(四)

◇柿葺落に際して……………成瀬無極(七)

◇顔見世の心理……………島華水(九)

◇團十郎と菊五郎……………伊原青々園(五四)

◇顔見世雜俎……………渥美清太郎(三二)

◇「船辨慶」のこと……………河竹繁俊(三七)

◇梅幸のお夏狂亂……………中内蝶二(四二)

◇昔の顔見世資料……………南木萍水

▽暫の遊戯的分子……………高安吸江(一六)







▽緊縮時代と暫と……………吉本寛汀(四六)  
 ▼暫の内容と形式美……………倉田啓明(四四)  
 ▼南座の顔見世……………新村出(五八)

◇歳晚「紙治」小話……………木谷蓬吟(四八)  
 ◇賀の祝の舞臺……………高谷伸(五〇)  
 ◇芝居と能の船辨慶……………森ほのほ(五六)

◆歌舞伎傳統の精華……………林久男(一八)  
 ◆川柳顔見世……………渡邊虹衣(二二)  
 ◆「歌舞伎國」と泥靴……………富田泰彦(三四)

△私の役々は……………澤村宗十郎(五三)

# 南座沿革史……………堂本寒星(別一)

△新東鑑……………(新作脚本)……………(六四)

狂言解説・また見・石むふあ・本脚

近江源氏先陣館……………(一)	彩……………(一五)	越……………(一五)	お……………(五五)	暫……………(五五)	賀……………(二四)	大……………(二七)	森……………(三〇)	船……………(三〇)	大……………(六〇)	船……………(六〇)	心……………(三八)
月……………(一)	子……………(一五)	亂……………(一五)	狂……………(五五)	の……………(五五)	彦……………(二四)	彦……………(二七)	彦……………(三〇)	彦……………(三〇)	彦……………(六〇)	彦……………(六〇)	彦……………(三八)

◇南座顔見世興行便覽(狂言と役配)……………(六二)  
 ◇師走の大阪劇壇……………(六〇)

△挿畫カット……………田中滿彦(七六)  
 △編輯後記……………松本泰三(七六)



好評

# 御化粧用

好評

目立って賣れ出すた

# スキナ

# あふら取紙

散歩にいやなあふら汚  
お忘れあるな

各地の化粧品店石  
店に於て販賣いたし  
て居ります。  
尙道頓堀の各座の賣  
店にても常備いたし  
て居ります。

お買求めの  
際はスキナ  
と御指定を  
乞ふ。

大阪 スキナ屋  
謹製





# 淡口醬油の親玉

## 景品付大賣出し

### 賣出方法

九升樽詰一樽毎に

萬歳味淋(六五〇、〇〇入)一本宛漏ナク進呈

外ニ特別景品(三萬樽ニ對シ)抽籤券一枚進呈

二立入ビン詰壹本毎ニ九天印入布巾二枚宛

- 一等 大丸商品券五十圓 六本
- 二等 純毛ラクダ二枚續毛布 三十本
- 三等 唐木特製 巻煙草入 三百本
- 四等 特製黒タン底ナシ十露盤 六百本

播州龍野

製造元

日本丸天醬油株式會社

大阪市東區高麗橋詰町

發賣元

柿浦佐一郎

電話本(二五六一)番  
(四八三二)







式時 五分 欠

一時二十分 前

あけて出るよいま心強ま  
大理石其他一般石工事

# 道下房吉

仕方なく  
京都市東中筋北小路上ル  
電話 下二三九二番

牡丹内へんちにて

見

かな

見 ようか

梅田から 円丸く して 天 橋 までゆく

立看板廣告 一時 人の請負 其他廣告ニ

浴線廣告 優勝旗調製 關スル一般

諸看板製作 優勝旗 樂隊廣告 ノ事業

臨時用 小看板、販物看板 看板塗替修繕特ニ廉價ニ可致候

は中電 車 ね せ 思 います

大阪市南區御藏跡町九

松竹 專屬 廣 告 社

齊部徳太郎商店

電 戎 三 七 五 六 番

待

午 三 時 一 時

あな

お芝居の

あいまには

高尚で趣味深い

寫眞のお道樂が

いッちよろしい!

寫眞機は

リリーカメラ

パールカメラ

アイデアカメラ

パーレットカメラ

(カタログ進呈)



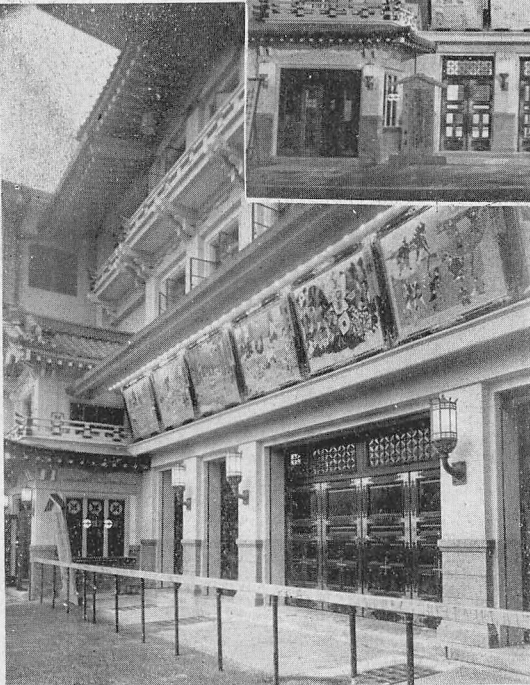
大阪市南區長堀橋筋一丁目

小西六大阪支店

本店

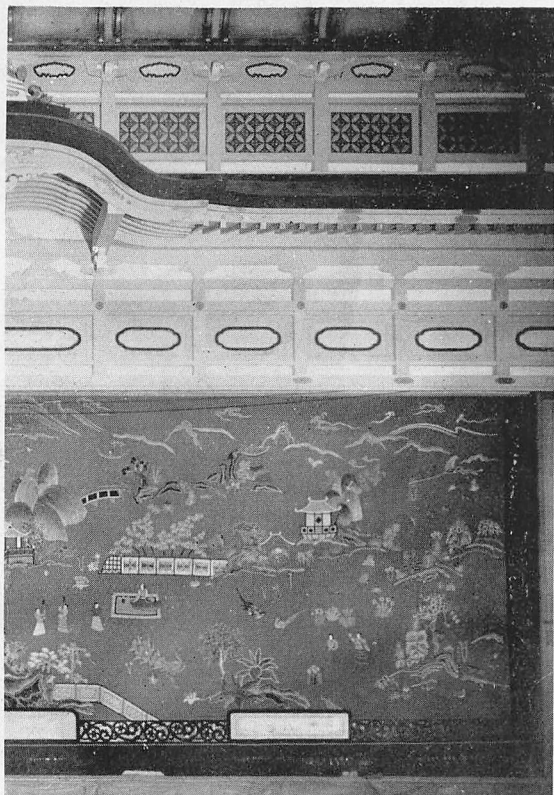
電話 南 (三九六) 三番  
東京 本町二丁目



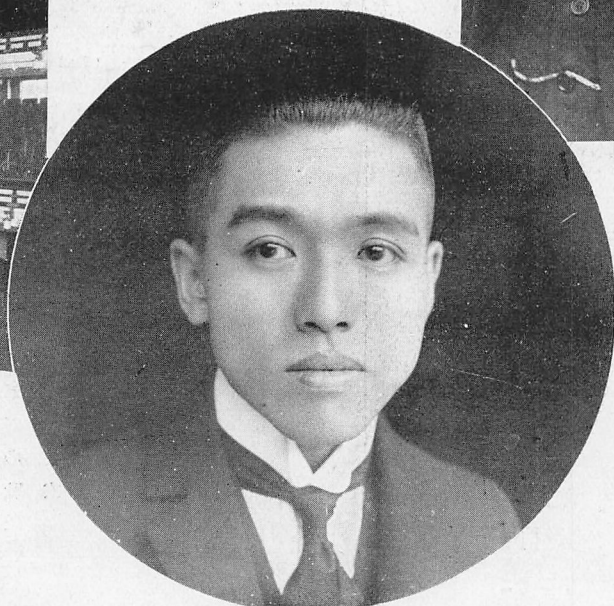


豪華雄大を極むる新装南座

- (上) 堂々たる正面の壯觀  
 (下) 繪看板をあげた玄關



郎次松井白 長社竹松



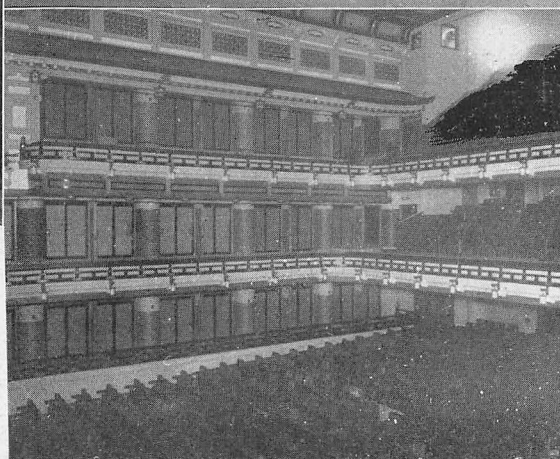
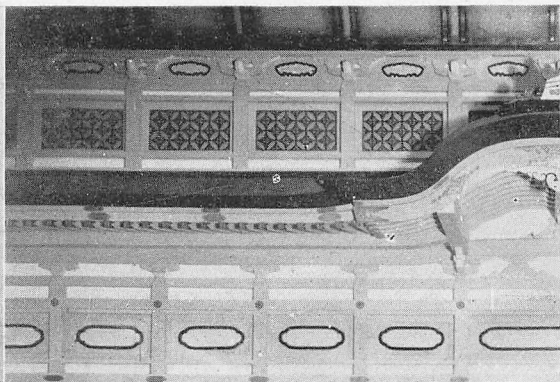
郎太信井白 務專竹松

顔  
 記  
 念  
 工  
 壯 (上)  
 新 (下)

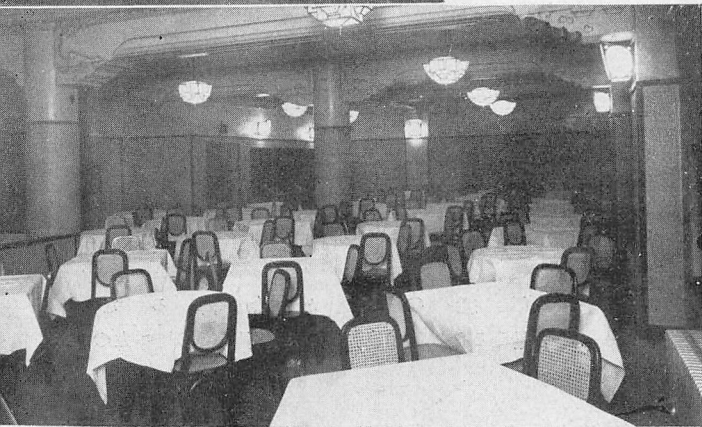




松竹副社長 大谷竹次郎



見世興行を開演せし新装南座  
麗な舞臺と緞帳の景全るな大雄の席覽觀るた如躍目面の場劇大の代時



竣成せる南座場内の壯觀

(下)(中)(上)  
 大 廊 大  
 食 休 憩  
 堂 下 室



# 南座の ちもど食堂

改訂の第一回 顔見合のこと

御手 輕 な

返神楽 返りて 歌舞 徒 熱の

## 觀幕間の御食事

東館 二階  
同階  
同階

なること  
以て

この月の四日には 西田久尚さんが 晝の部のみ 見えて 来られる

おなまじく六日には

一西久注  
額見世芝居は四條南のやぐら

かき旦一夜みてる

料理の粹と

芝居の至寶

八日に小川つるの氏が行く

小椋貞運氏は

こゝは皆様の御承知どふり  
うまい料理はちもとにかざる

五日は行かぬて 油口見して入場 でき、お高屋様へ行く

拾日には 山本注月くん かゆく 本店 京、西石垣、千茂登

拾四日 再い小椋氏 行く 拾五日 夕金鐘 鳴玉 花本氏 行く

拾六日には 苗鏡 月 齋 美天

たのびに望んで月入た彼の女

# コンベス床施工

木造念と

エレベーター製作の女

こころから

# 視 東洋コンベス商社

赤心 女 大阪東區淡路町三丁目六番地

船場ビルディング二百二號室

そんな日十 電話本局(自二七五〇番至二七五五番)

赤心の生れる

言大はと 言ふ心は

妙に 気象にかかり出さ

# 内外エレベーター株式會社

本社 神戸市下澤通二丁目五番地ノ一 電話 國 湊川 ①一七七一・三七〇七番

東京營業所 東京市麹町區丸之内仲通十四號館ノ十二號 電話 國 丸之内 一八二七番

なみの けいこ

田かくも のん

信が



暖房冷房裝置  
遠藤式淨化裝置  
給水衛生工事一式  
施工

遠藤商會

店主 遠藤茂雄

嶄新建築材商料  
防水工事請負

澤田久商店

京都市大宮通五條上ル  
電話 下三二六八番

東西名優方の御推奨

百貨店薬店化粧品店に有り

好評噴々！

最新科学化粧料 手打ちムウ原料

專賣特許

愛王水白粉

六十錢

一

圓

本舖

(内務省衛生試験所無鉛證明)

正 價

愛王固煉白粉	七十五錢
愛王粉白粉	六十錢
愛王化粧下	三十錢
愛王ベニシリング	三十五錢
愛王クリーム	六十五錢

送料二圓以上無料二圓以下十二錢

大阪大橋一〇七番地  
電話本局三二九番

愛王堂

大阪東區瓦町三丁目

南座竣工記念

當る吉例顔見世興行

畫の部  
幕 近江源氏先陣館  
盛綱陣屋の場



當代隨一の極め付け

中村鷹治郎の佐々木盛綱



南座竣工記念

當る吉例顔見世興行

中臺の部  
幕近江源氏先陣館  
盛綱陣屋の場

中村鷹治郎の佐々木盛綱



猶豫はいかに早や實檢と時以公に促されて  
盛綱が片手に觸キツト見入つて  
矢筈に面體射損じたれど弟佐々木高綱が  
首に相違ない聊か相違は御座なく……  
といふ満場呼吸をのんで緊張するところ。

市川中車の和田兵衛秀盛



中村歌右衛門

佐々木盛経

喜多画

長

ヤア、盛綱和田兵衛秀盛是にあり  
 ……と正面屏風が燃と開けて現  
 れ出でたる強者。

×××××

盛綱 諸事何事も此場切り。

秀盛 表は京方。

盛綱 鎌倉方。

「右大將賢朝が御座の白旗奪ひとりしは  
 の床も一匹騒り上げて

錦繪美大時代のふん開氣に

ひたるところ

とつぷりと暮れて島の内の夜は月の光も白々と。柳の枝垂れがゆく水に戯れてゐる。さあ、もう何ごいふてもかなわぬ事や、柴舟は晝米おれのものになつた話、さあ見いご入五郎の手元から長襦袢の片袖がはより出される。お……それは柴舟の籠袴の袖、お、柴舟の、ご興兵衛は拾ひ上げてや、ち、血、ご叫んだ。興兵衛の面は流石に青白い月の光りに訝えた。灯影をかすめて新内が冷たく流してゆく。



南座吉例顔見世興行

畫の部「彩 月」  
新作

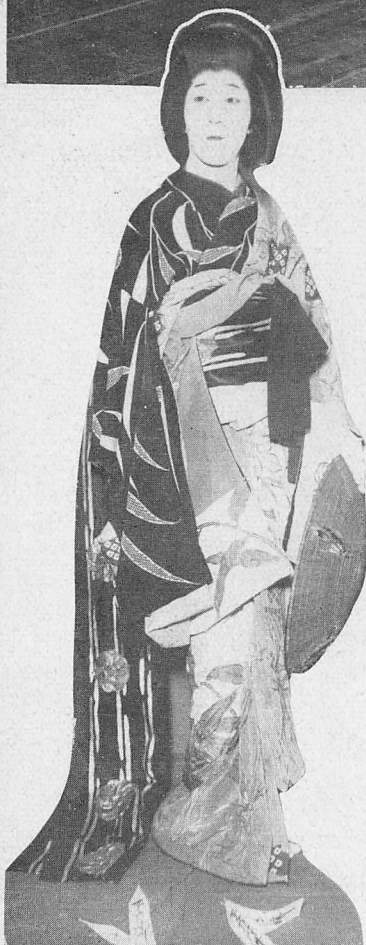
遊び人立花屋八五郎……中村魁車  
和泉屋與兵衛……中村福助



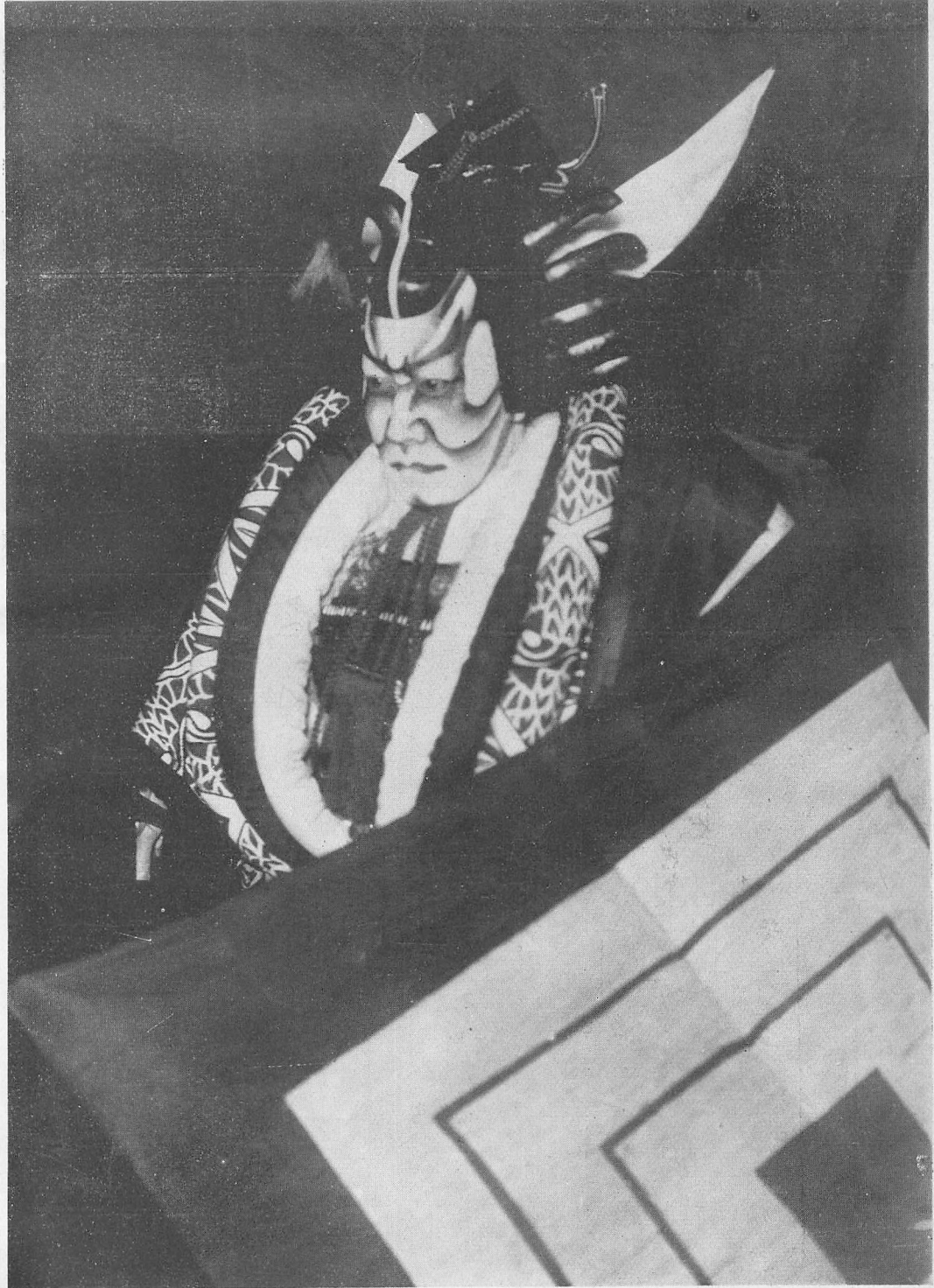


何と通るは清十郎ぢやないか  
 笠がよふ似た管笠がよう似た  
 笠がよう似た管笠が……。  
 ご常磐津の家元の訝えた咽喉につれて  
 元祿交の亂れもあやにお夏が揚幕から  
 ふらくと出て来て善舞善踊に遊場を  
 のうさつす。

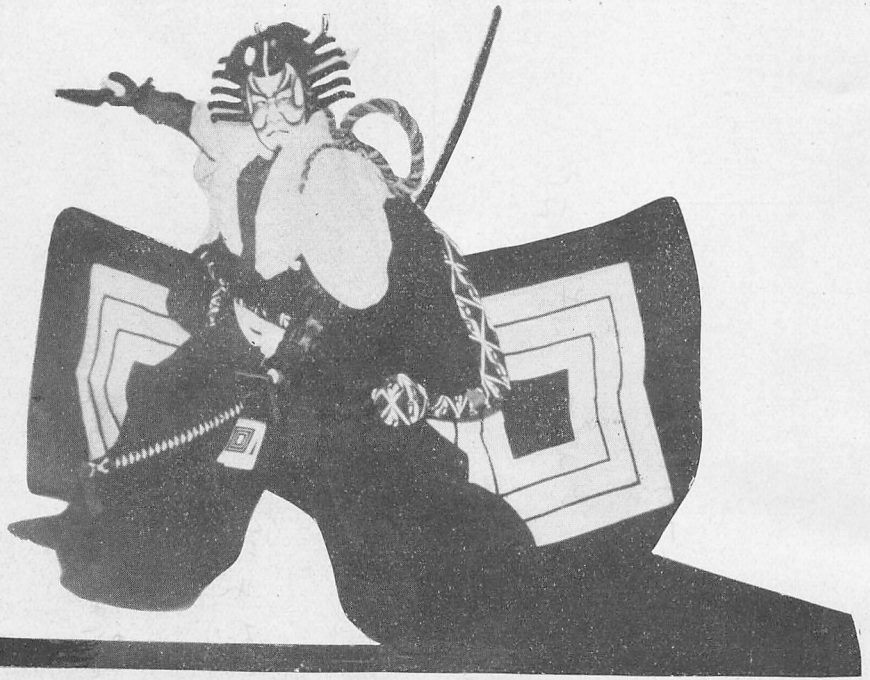
狂女お夏……………尾上梅幸



當世見畫の部内博士作「お夏狂亂」常磐津連中



當る吉例顔見世興行  
歌舞十八番内「暫」大薩摩連中  
鎌倉權五郎政景……………松本幸四郎



本朝古典劇の真隨歌舞伎  
 十八番の内より取り出し  
 たる市川宗家直流の江戸  
 生粹の荒事暫く、しほら  
 く、暫くと種五郎景政が  
 高くつらねる名ゼリフは

池南子に曰く水縁り有つて足らざるは天地にこつて  
 萬物に授け前後する所なしとかや、何ぞその公私こ  
 左右を問はん。問はんでも知るき敵は鶴玉川の上水  
 にからだ許りか肝たまで濺き上たる坂東武士盛り  
 三升の九代目ご人に呼はる、鎌倉種五郎景政當年こ  
 ・に十八番久し振りにて顔見世の昔忍ぶ筋隠は彩  
 色見する寒牡丹素袍の色の挿染も滋味は此の相傳骨  
 法機に乗じては蹠蹠に胸の示す荒事江戸一流の案  
 官は家の技藝と御座なせえは、かみ敬し白す

當る吉例顔見世  
 歌舞伎の内「暫」  
 十八番の内

女 鯨 照 葉 ..... 中 村 魁 車



息 女 桂 の 前 ..... 中 村 扇 雀

Handwritten Japanese text, likely a signature or calligraphy, in the bottom right corner of the page.



# 婦人の便秘に

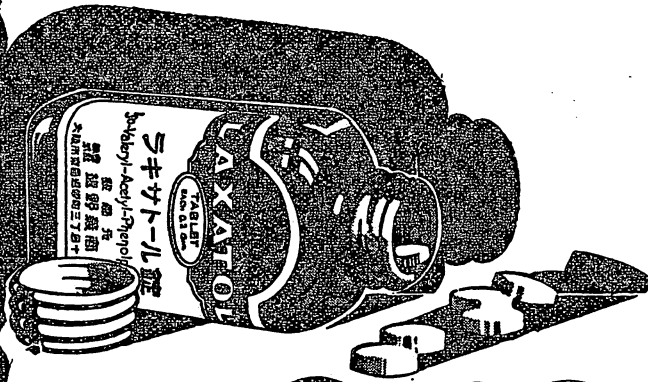
婦人は種々な原因の爲に便秘を起し易く便秘者は絶えず頭痛、眩暈、嘔心、腹部緊張、鼓腸等を起し不愉快なるは勿論身体に悪影響を與へるものなり、故に便秘ある婦人はラキサトールを用ひて便通を調節すべし。

# 下劑 ラキサトール

粉末錠劑、全國藥店にあり

大阪市東區道修町  
發賣元 株式会社 益野義商店  
東京市日本橋區岩附町

LO,116



あゝ夏

ふゆふりに思ふ

まらの堂に からかけ

なからうの 嫁入り

迷ひ

土木建築設計施工

狂心

なにか おち

倒れての 妻

悲心

すけ

見て



# 白波瀬工務店

運りすかの 巡

禮立の 立

あちり

京都市中京區仲町通竹屋町上末丸町

電話上(3)四二八八番

心に しめる 瀧のお

きて

曲り池

あゝ

三三(な)

六月

月

...

...

# 京都唯一の廣告機關

京都市電回数券廣告  
京都市内湯屋廣告

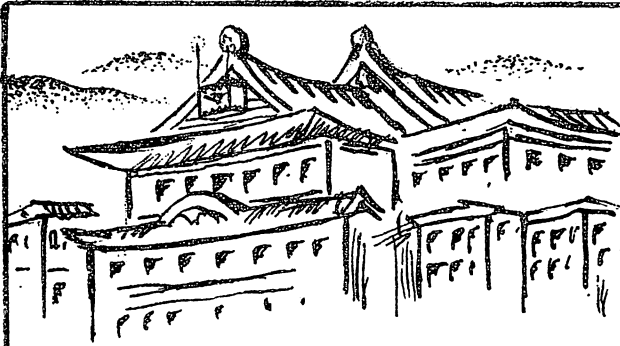
## 實業廣告へ

御申込に依り  
營業案内書進呈

京阪電車本線  
各線  
津石山坂本  
停車場  
車内  
廣告一手取扱

三條寺町角

電話本四三〇番



東館

三階々段口

ソーダファンテン

西館

二階 御定食  
三階 一品御料理  
地階 簡易食堂

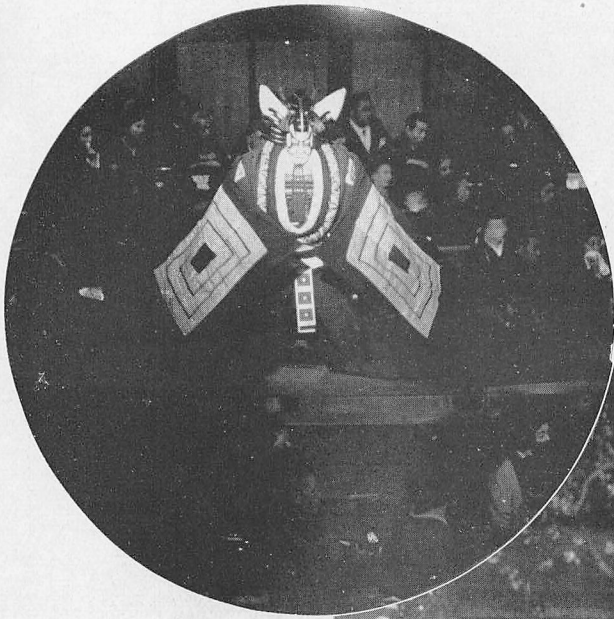
お合点事と  
昔希間のおくつろぎに  
上菊水食堂へ

館水菊座南

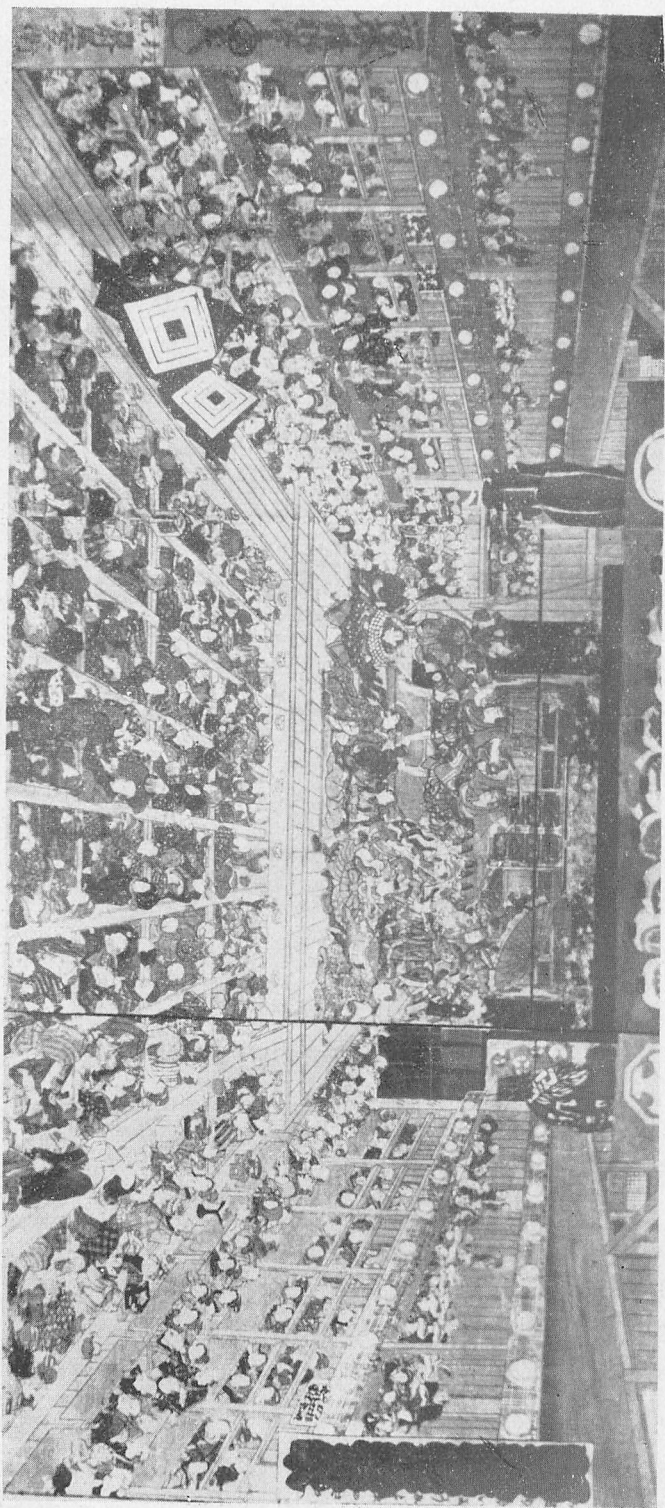




花道の  
鎌倉権五郎景政  
松本幸四郎



鹿島入道震齋……………澤村宗十郎



（鎌原氏邸 大芳木南） きいづ杖三繪錦附茶古の「誓」

歳暮の御贈答品は……

安く賣る店・買ひよき店

白木屋

大阪・堺筋

受けて重寶・贈るに便利

白木屋の商品券

本、支店、出張店共通

敷物・緞通・室内裝飾一式

伏見屋

和田 宇一郎

京都市寺町二條下ル

電話上二四三八番

京都市壬生車庫前通三條東入

大 藪 地 金 部

大 藪 セ メ ン ト 部

大 藪 硝 子 部

電話  
地金部(本局)四五六八番  
セメント部(本局)一七五一番  
硝子部(本局)四一二二番



鐵骨工事請負

合資  
會社

駒井喜商店

大阪市港區泉尾濱通二丁目一  
電話櫻川(長六五八番  
二八八六番)

瓦工事請負

加藤休松

愛知縣碧海郡新川町  
電話園四五番

妊娠のお方に警告

安産を望まれる方難産流産の癖

初産を恐れる方は

産婦人科専門諸大醫有効御證明

木津けなし丸

是非お服みなさい

昔から有名な産婦専門の家傳藥です

効能

悪疽が治る 浮腫が引く  
 流産もせぬ 体内を温める  
 胎毒も取れて お産が軽い

できた子達は丈夫で美しいご旦那様も大喜びです

各地藥店にあり

價 藥

圓拾 圓五 圓參 圓貳 圓壹 錢拾五

ンリタンサニ舗本ニクブント痛腹

目丁一橋麗高阪大

堂 在 自 野 西

番七五一阪大替振・番一九三東話電



場 の 村 太 佐「祝 の 賀」行 興 世 見 額 る 當 念 記 工 竣 座 南  
車 中 川 市……………夫 太 白



當る吉例顔見世興行夜の部狂言

新歌舞伎  
十八番の内  
「大森彦七」  
竹本連中  
常磐津連中

大森彦七……………松本幸四郎



行興世見顔例吉座南の工竣

「七彦森大」 伎舞歌新  
内の番八十

郎十宗村澤……………姫早千女息



當る顔見世・夜の部狂言

新歌舞伎「船 辨 慶」長唄囃子連中



知盛の靈……………尾上梅幸



愛  
妾  
靜  
尾  
上  
梅  
幸

顔見世夜の部狂言  
河竹默阿彌作  
新歌舞伎「船  
辨慶」  
十八番の内



武藏坊辨慶……………坂東彦三郎





近松役者 鷹治郎が傑作中の傑作

紙屋 治兵衛……………中村 鷹治郎

當る顔見世興行夜の部二番目狂言

玩辭樓「心中紙屋治兵衛」  
十二曲の内

河庄の場



河内屋お庄……………尾上梅幸



# 観劇の御土産は

## 祝 是非井澤屋で

いとついでにちやを御座やの 京の女性ならむふたり ありあはるま打照らむ

又は洋装の海老のホマ 御座のまをよむこ二十四を な

おつとりとしてはおよ ばすまの 京 南座 前 女性 子こ

成 貴金屬袋物 小間物一式 井 澤 屋 鏡

はらわし 井澤屋 出店

本宅のことになく あちうまある 女

成 盛 固 ちやを 御座やの 京の 女性 ならむ ふたり ありあはるま 打照らむ





師走の□□□

# 三越風景展望

三越の初冬への行進!

— 毛皮、シヨール、シャツ、外套、暖房具より

新時代に適した御贈答品!

— 商品券、文房具、各種雑貨、食料品の類

希望を描く迎春の御用意!

— クリスマス玩具、屠蘇器、軍箱の新美術品まで

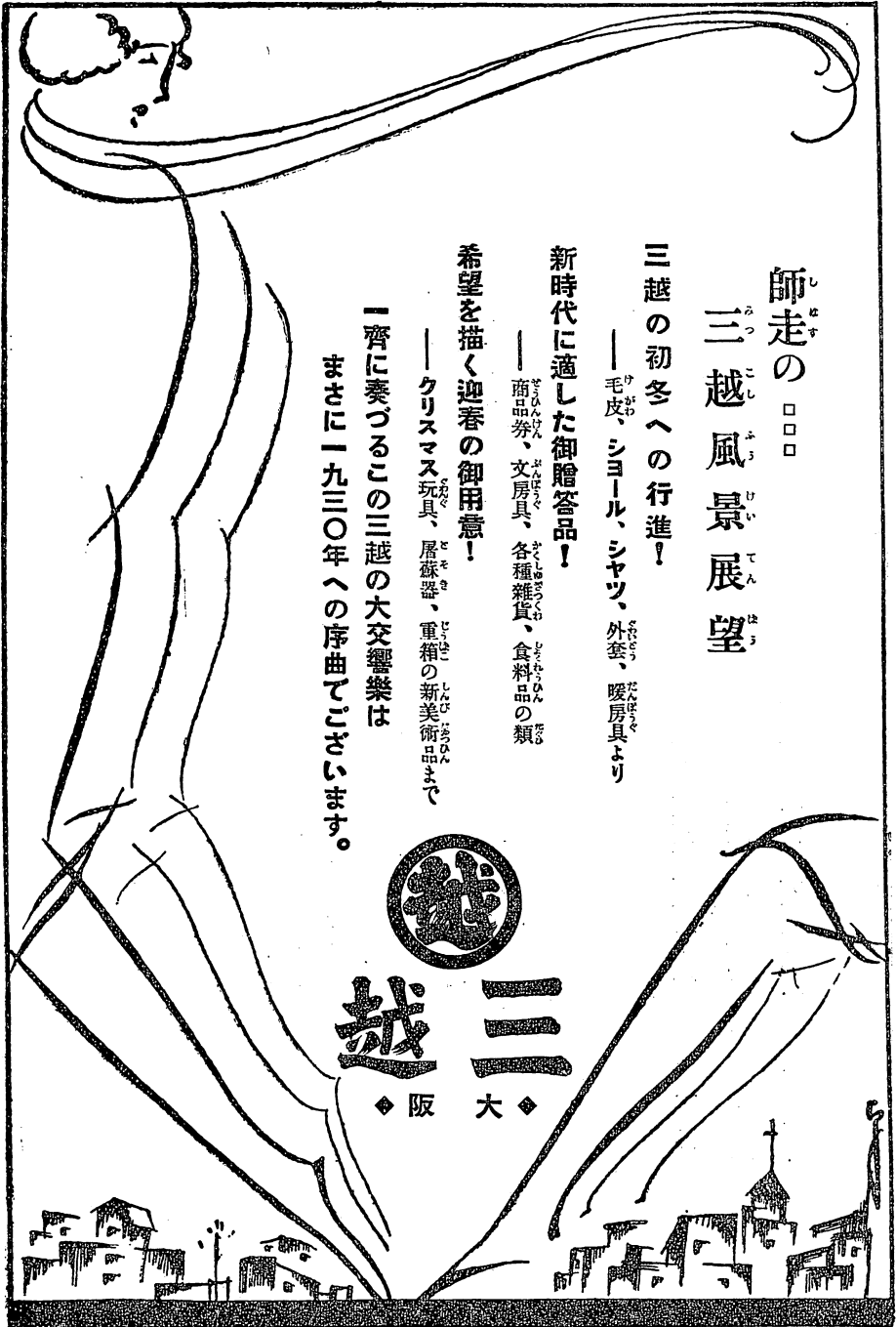
一齊に奏つるこの三越の大交響樂は

まさに一九三〇年への序曲でございます。



# 三越

◆ 阪 大 ◆





大成駒屋ツとしぼしは鳴もやまぬ美の陶醉境

—— 中村 鷹治郎の紙屋治兵衛 ——



天誅に年纏る千早振る神にはあらぬ紙神さ、世のわに日に飛るはかり、小春にふかく浮はねさのくさり合ふたるみしめ細、今は結ぶの神舞月せかれて浮はれぬ身のなれはて、あはれ連潮の首尾あらはそれを二人の最後日さ、名残の女の云かわし、毎夜くの死常態、魂ねりてごほうか、身をこがす

…と頰冠り懐手の治兵衛は鷹治郎ならではの絶對境、



當る吉例顔見世興行

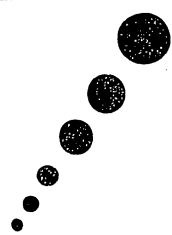
玩辭樓  
十二曲の内

「心中紙屋治兵衛」

河庄の場



紀の國屋小春……………中村魁車  
粉屋孫右衛門……………市川中車



たの音はねむたく  
つて  
かりきれま  
かつた

世間  
月とあまこ  
とま  
上願目入  
の甘鞠  
住むを見  
たい  
ま  
き  
つた

天  
橋  
向  
へ  
美  
々  
た  
が  
大  
阪  
市  
今  
橋  
五  
丁  
目  
か  
つ  
た  
野  
田  
路  
神  
前  
へ  
ま  
た  
が

拾

料  
時  
理



# つる家本店

四十分  
な  
つ  
た  
ち  
と  
つ  
と  
祝  
本  
木  
を  
あ  
け  
て  
う  
か  
す  
へ  
ま  
た  
が  
あ  
が  
つ  
た  
が

一  
時  
を  
つ  
た

そ  
木  
だ  
け  
に

考  
へ  
た  
か  
け  
か  
ぬ

近  
ま  
の  
た  
ら  
逸

そ  
あ

十一月廿七日ヨリ  
十二月十一日マデ

# 帝 展

京 都 岡 崎 公 園  
第 二 勸 業 館

京阪電車 神宮道下車最も御便利

十二月

一 日 (日曜)	二 日 (月曜)	三 日 (火曜)	(晴 論 雨)
六 日 (金曜)	七 日 (土曜)	八 日 (日曜)	

## 秋 季 淀 の 大 競 馬

- ◎ 勝馬投票券發賣
- ◎ 當日淀に急行臨時停車

ばりの  
都・京・三  
五・條・四  
條

### 京 阪 電 車

ばりの  
阪大  
橋満天





裂 小・具道小

# 貸衣裳

素人演藝會

宴會の催物

春秋溫習會

婚禮の衣裳

## 松竹衣裳部

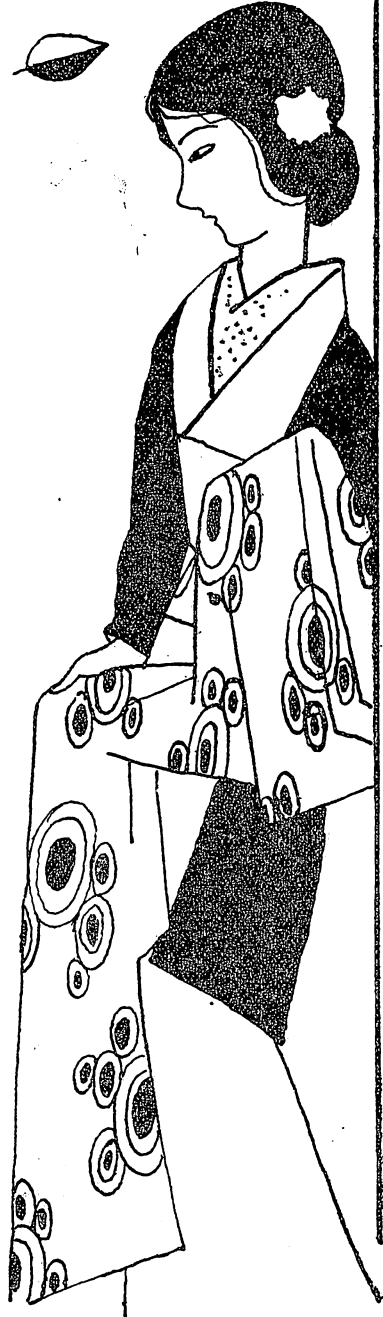
本店 大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四一七一八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五  
電話 淺草五五九九番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)  
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます



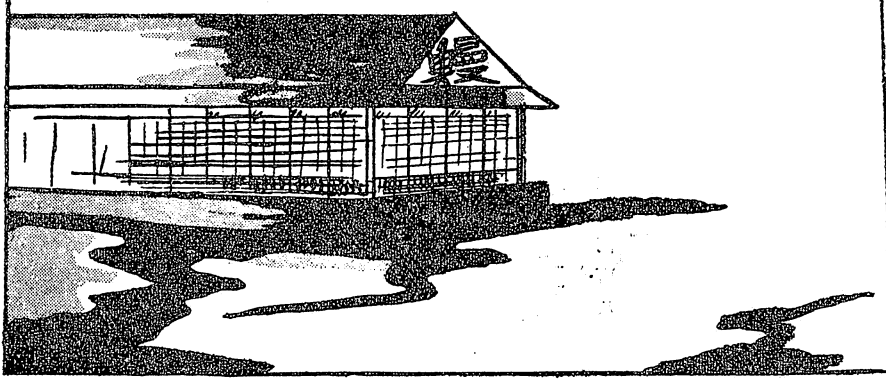
大阪名物

船生州



電話南

四八二〇  
九五一〇  
四八四四





行興世見顔例吉念記工竣座南  
中連津磐常「猿 鞠 壽」 利喜大部の夜  
郎十宗村澤……………夫太の曳猿



女大名三好野……………松本幸四郎

吉例顔見世夜の部狂言

大喜利「壽 鞆 猿」

常磐津連中



奴蝶平……………林長三郎



クリスマスプレゼントに  
年末年始の御贈答に  
御選擇には弊社へ

御進物に喜ばれる  
**大丸商品券**

月曜休業 ◇ 夜間営業



**大丸**

大阪心齋橋



# 新春映画

大阪朝日新聞連載

吉川英治原作・井上金太郎監督

「貝原一平」

月形龍之介 主演

星哲六原作脚色監督

「森蘭丸」

阪東壽之助 主演

小石栄一監督

「野狐三次」

沖博文監督 林長二郎 主演

「清水次郎長傳」

長谷川伸原作・城戸品郎監督 阪東妻三郎 主演

「命の灯」

市川右太衛門 主演

大阪毎日新聞連載  
佐藤紅綠原作

「麗人」

オールスターキヤスト

五所平之助原作監督

「情熱の一夜」

井上正夫・八雲恵美子  
渡邊篤 共演

北村小松原作脚色  
清水宏 監督

「戀愛第一課」

岡田時彦・及川道子  
渡邊篤 共演

如耕一原作・野村貞彦監督

「鐵拳制裁」

鈴木傳明・田中絹代主演

チャールズ・デツケンス原作  
島津保次郎監督

「最後の幸福」

井上正夫・岡田時彦・渡邊篤・及川道子  
錦城二郎・徳田靜枝・筑波雪子 共演

蒲田十週年記念映畫

「進軍」

鈴木傳明・田中絹代主演  
其他オールスターキヤスト

# 松竹キネマ

大木木、まろ七かすんでからの、白木中、明日にて  
日なが、かくて四月、百の、気温、温一、た、ゆっ、らん、に、見、て、お、と、  
汗、す、た

大阪市東區京橋三丁目七十五番地

株式會社

大 林 組

見、て、お、る、  
つ、ま、し、の、ハ、の、に、は、お、見、  
と、お、る、に、お、ん、  
支店 東京、横濱、名古屋、小倉  
営業所 京都、神戸、京城  
工作所 大阪、東京

こ、し、て、お、る、こ、と、を

# 純日本御料理

天王寺公園

名代 割烹 園南旅館

暖い冬の  
御料理に

忘年宴會は是非



誌雜・究研劇演・刊月

第三十九輯

# 演類編

第四年

號世見顔・座南



# 御挨拶

白井松次郎

多事多端の昭和四年の歳晩に當り茲に新裝南座の竣工を記念して由緒ある年中行事の顔見世興行を開演いたします。さて新裝南座は東洋趣味豊かな近代的大劇場でありますが、この南座が始めて劇場としての形式を完成しましたのは江戸時代の初期元和年間で今から三百十有餘年以前のことであります。其當時七つの櫓がありました。其後時勢の變遷に漸次廢絶してゆき明治の中期に至りこの南座が最後に只一つ残つて、三百十有餘年の長い歴史を昔の位置のまゝに



傳へて來た次第で御座ります。しかもその櫓は江戸大坂に比して遙かに以前に溯り、三都を通じて一番古く實に南座こそ日本最古の誇るべき由緒ある劇場で御座ります。以上の如く連綿として存立し多年皆様の御引立に依り京都名物の一に數へられて居りますから、改築に當りましてもよく其の主旨を體し興行上總ての點に一層の注意を加へあらゆる劇藝術の向上を計ると同時に、觀客諸賢に對しては至廉な料金を以て最大の歡樂と感興を提供するは勿論時々歐米より著名の藝術家を招聘し、尙演藝會、音樂會、其他の集會等には誠心誠意下利便を竭し、以て昭和新世の新劇場としての使命を全うするに十分努力する覺悟で御座りますから、皆様の劇場として此上とも御最負を以て絶大の御援助を賜はるやうお願い申上ります。



# 興業經濟・南座・顔見世縦横

## 顔見世興行の縁起

飯塚友一郎

昔、角の芝居では、中人といふ言葉を忌んで三ツ目と言つた。それは、中の芝居へ客が入るといふ縁記をかついだのですが、何事につけても、この縁喜の善し悪しがつきまとふて來るのが我が舊芝居道の一特色であります。

今日では興行經濟も、だんぐと近代的企业の形式を採るやうになつて來ましたが、昔の芝居興行は、その經濟の組織を露骨に現さず、種々の儀式や藝能の華かな色彩をもつて、これを塗り飾つて居た。つまり、經濟と儀式と藝術との三つの作用が全く分化せず、渾然として一に融け合つて、あの芝居道と

いふ獨得の空氣を醸してゐたものであります。

顔見世興行といふ古風な名儀が残されてゐるのは、流石に芝居町として古い傳統をもつ道頓堀です。勿論、今日の顔見世はほんの名儀だけの事で、その縁起などを願ふ人々は極めて稀でせうが、見方によつては、其處に歌舞伎芝居としては極めて本質的な意義が含まれて居ます。即ち、歌舞伎芝居に於ける經濟と儀式と藝術との融合の最も端的な面目を、私は顔見世興行の縁起に見る事が出来る。

二

顔見世興行の始まりは、何と言つても興行經濟上の必要から来て居ます。賣物には花を飾れといふことがあるが、遊里に於ても古くから行はれた慣例で、新に抱えた遊女には盛裝させてお得意の茶屋その他に顔を見せて披露して歩かせた。これを顔見世と言つた。芝居道でも、新に抱えて顔なじみの薄い役者には、何か特別の披露方法を、興行師は考へる必要がありました。勿論、遊女とは異つて、舞臺の上でその顔見世披露の式が行はれた。

明暦、万治以前の頃までは各座元は、何れも座附の役者を抱えて興行を續けてゐた事は、恰も今日の遊里の藝妓の抱え制度と同様であつた。そこで、新參役者が新に抱えられた時は、正月二日の初芝居から五日間、諸見物へ御目見得をさせた。それを今年の村山座には顔見世が何人あると言つて人氣が立つて見物が押し寄せるやうになつたので、興行師としては出勤役者の顔觸れを時々目新らしくする事の得策を考へはじめました。そこで先づ最初は、京阪各座元はその座附の抱役者を時々入れ替えて興行することを始めたが、各座附役者は約束の期限だけを勤めれば、又もとの座へ歸つて行つた。それが、やがて万治の頃、松本名左衛門座で、役者は凡て一年抱といふ事をはじめてから、遂に、京大阪新抱の役者は一年契約が定りになつて後の顔見世興行盛況の縁起となつたのであると「古今役者大全」その他の書に説いてあります。

霜月十一月を以て役者抱の交替期とし、芝居道の正月とした

理由に就ては、周の正月が丁度我が國の十一月に當るといふ説などがありますが、これは恐らく、後からつけた縁喜で、實際は、やはり經濟的理由に據つたものと思はれる。霜月は畢竟、芝居見物には一番の好季節であり、書入れ月であります。夏場は勿論いけない。さりとて花の春、紅葉の秋は遊山の好期で、あまり芝居には足が向きそうもない。お正月は、今日とは趣を異にして、親類知己間の家庭的行事に随分と忙しい。興行經濟の上から、自然と十一月が芝居道の正月と定つたものでありませう。尤も、後には京阪の顔見世興行は十二月となり、時には正月に延引するやうな異例もありましたが、これも經濟上の理由に基いたのであります。

### 三

そこで此の芝居道の正月である顔見世興行を盛んにする爲めには、あらゆる縁喜が尊重され、あらゆる經濟的、事務的手續が儀式化された。座元と役者との雇傭契約、手附金の交附といふやうな經濟上の取引が、莊重な儀式として行はれた。新しい役者の乗込みが恰も祭禮の神輿の渡御のやうな騒ぎをもつて人氣が煽られました。劇場の表飾りから、看板、番附の萬端、吉例の格式に従つた。

狂言作者が一座の役者に狂言を書卸して、それを稽古して上演するまでの手續も、顔見世狂言に於ては單に事務として運ばれるのでなくして、一々嚴肅な儀式として行はれたのでありま

す。例へば狂言の世界を決定するにも作者の獨斷ではなく、重なる關係者列席の上で世界定めなる神秘的儀式が行はれる。それから寄り初め或は囃し初め、内讀み、本讀みと何れも神聖なる儀式であつた。

その前夜には芝居關係者の家々には御神燈が灯され、最辰からの贈物の積物、蒸籠、引幕などが見事に飾られ、殊に役者の家では役々の衣裳を座敷に飾つて、神酒、鏡餅が供へられます。

その當日には雜煮餅を祝ふことも一般のお正月と同様の縁起である。本來は大向の彌次馬であるべき手打連中も、顔見世興行には今日を晴れと格式通りの手打の儀式を舉行するのも興味深く眺められます。有名な笹瀬連、大手連、藤石連、花玉連など、いふ手打連中が、黒羽二重の揃の着附か何かで、花道際に陣取つて、種々の趣向をつくしての手打は、歌舞伎芝居の微妙な情調を作る一要素でありました。

かやうに顔見世興行の一切の手續が格式整然たる儀式化されそれがやがて藝術化されてゐた點に注目すべきであります。

#### 四

かくて、顔見世興行は役者側にも、見物側にも異常な緊張をもつて迎えられるから、其處に獨特な舞臺藝術が生れる。今日の芝居藝術は餘りに散文化して、役者側にも見物側にも感激が乏しくなつた。茶屋廢止、切符制度、時間短縮等の興行改良の理想は今日既に達せられた。それは劇場經濟史の當然の推移で

はあるけれども、歌舞伎芝居はそれだけ散文化し變質したと言はなければならぬ。顔見世興行といふやうな獨特の空氣によつて支持されて來た歌舞伎が、今日の如き興行法の下には、是が非でも變質せざるを得ない事を、今更ながら思はれます。

それどころか、今日ではキネマ、ラヂオ、トーキーなどの發明によつて演劇の器械化時代が到來しつゝあります。これは正に興行經濟史上の産業革命とも稱すべきです。近い將來には、我が興行經濟上の一大革命から、やがて我が演劇史上の一大變化が來ることは容易に想像されます。

顔見世といふ古風な名儀の遺存を思ふにつけても、近い將來の種々の急變が念頭に浮びます。

### 演劇雜誌

## 歌舞伎

毎月一日發行  
一部 三十錢

- ◇本誌と姉妹雜誌
- ◇東京演劇の鳥瞰圖
- ◇各地書店に發賣
- ◇是非一讀あらん事を

東京市京橋區木挽町三丁目(歌舞伎座内)

發行所

歌舞伎出版部

◇今見ます

# 柿茸落しに際して

それかのに 主たる的が 甘んじてこれをも  
成瀬 無極 なる

高は 京は 西は 東は 北は 南は

京都では殆ど唯一の歌舞伎劇場である南座が大部分洋式に改築せられて、この顔見世興行を機会に柿茸落しをするといふ、我々京都在住者にとつてこんな嬉しいことはない。何と云つても時代の趨勢には敵はない。観客の生活様式が變化してみると劇場もその姿を變へないわけにはいかない。回向院が國技館になつた。今に能樂堂も椅子席になる時機が来るだらう。(現に公會堂に能舞臺を設けてやつてゐるのだ。)見物席は現實の世界で幕の後ろに夢の國、假象の世界が在る。それで宜いのだ。歌舞伎劇の魅力は寧ろその對照と時代錯誤とに在るとも見られる。そして、一方にはまた、この舞臺の上に展開せられる夢幻界へ

まで時代の空氣は絶えず流れ込んでゐる。書割、照明、擬音、その他の演出手段が端的にそれを語つてゐる。否、俳優その人が結局時代の兒なのだ。然し、大體から云つて、歌舞伎劇の世界は過去の世界だ。歌舞伎劇の美は回顧の美だ。我々は「古い美しい時代」へ遊ぶことに依つて瞬間的に忘我の境へ入る。音と色と線の微妙な錯綜から少年の夢が蘇み返へつて來る、前世

の幻ろしが現はれる。それは遠い昔の生活の姿だ。しかもそれすら無數の眼に見えない糸筋が我々の生活へまで通つてゐる。いくら腕いても断ち切れない羈絆だ。

この意味で、我々が歌舞伎劇に對するとき兩つの矛盾した心の動きを感じる。その一つは、美しい過去を出來うる限り、そのまゝに保存して置きたいといふ願ひであり、もう一つは、これはどつちかと云へば潜在意識として作用するのだが、過去の形態を破つて現在のそれへ近づけようとする慾望である。これは、見物の方ばかりでなく俳優や演出者の方にも働いてゐる。そこで、歌舞伎劇の様式の問題が起つて來る。現に、色々の方面で様式の混亂が認められる。(日本人の生活様式一般の上に現はれてゐるやうに。)小屋の新装に直面して先づこの事が考へられる。歌舞伎劇の様式をどうしたら好いのか。この場合も、二つの方向が存立すべきだ。「保存」と「進化」とがそれである。保存すべきものは嚴格に純正に保存し、變化する可能性があるものはどん／＼改善して行くことだ。能樂のやうに、それ自身

か 意 外 意 外 意 外



の内で完成し、凝固した様式を持つてゐるものは、十分故實を調べ、古式に則り、傳統的の型を尊重して、ひたすら「過去」の再現に努めるのが上策だ。之に反して、弾力性を持つてゐるもの、様式がまだ定まらないもの、新しい形とリズムとが生れ出る餘地を存するものは、躊躇せず(手)を加へて改造するのが急務である。當興行の出し物を、「暫」、「船辨慶」、「賀の祝」、「先陣館」、「大森彦七」、「紙治」、「お夏狂亂」といふやうに並べてみると、そのまゝ保存すべきものと、新しい演出法を考案すべきものとの區別が自づから分かる筈だと思ふ。尤も、そのまゝ、といふのは、今日の形式を模範として、といふ意味ではなく、一層淳化せられた眞の典型的形式を指すので、それはまた専門的の調査と研究とを要することと思ふ。そしてまた一方には生きた俳優の藝である限り、そのまゝとは云つても、與へられた形と型との範圍内に於て、多少の創意を加へることは當然許さるべきことで、實際また、この法則の中の自由が認められなくては、過去の生命を新たに生かすことは出来ないで、徒らに故人の形骸を擁することとなるであらう。

保存にしても進化にしても、様式の統一といふことが何よりも大切である。此の場合様式といふのは廣い意味で、内面的及び外面的の形式を含む。即ち、俳優の藝と舞臺裝置及びその他の演出手段を總括したもので、それは當然脚本そのものの、様式と一致すべきものであるが、之を演出的様式と稱することが出来る。この意味に於ける様式の統一を缺く演劇は有機體的藝術

とは云はれない。(能樂には此の統一が可なりよくついでゐる。)つまり、歌舞伎劇にも權威ある演出者が是非必要だ、と云ひたいのだ。嘗に新作についてのみならず、大體型が極まつてゐるやうに見えるものにも、(即ち保存すべき物にも)演出者が無ければならない。醫者が自分自身の、或は自分の肉親の醫者にはなり難いやうに、いくら名優でも、演出者を兼ねることは當然避ける可き事柄だ。第一、その俳優自身の技藝のためにも好くない。自分で型を作つて、その中に閉ぢ籠り、一步も外へ踏み出せなくなる危険がある。また、俳優全體の演技の調和を缺く惧れもある。新作物に演出者を要する理由は一々擧げるにも及ばないだらう。

歌舞伎劇の保存又は改善に就いての意見及び希望はいくらもあるが、(例へば作家を優遇して傑れた新作の出る素地を作ることなど)今はたゞ新裝の南座に對して、出来るだけ門戸を開放するやうにと希望しておく。既に歌舞伎劇のための小屋としての様式を或る程度まで破つた以上、新劇の上演にも之を提供して、廣く關西演劇界の進歩發展に資するやうにして欲しいと思ふ。殊に、京都市には新劇の演出に適する小屋は殆ど皆無と云つて宜いやうな現状であるから、事情の許す限り、折り合ひのつくやうな條件で提供して貰ひたいとおもふ。然しこの點は既に當事者の方に成案があることであらう。

新裝の南座を眼前に見て、華々しい顔見世興行を旬日の内に迎へる喜びの餘り、いろ／＼の希望を並べた。醜を得てまた蜀を望む、これ人情の常である。

# 「顔見世」の心理

島 華 水

小夜千鳥の啼聲、せゝらぎの音は漸く絶えて來たが、潺々たる清流、昔を今に懐かしい鴨河のほとり、お國歌舞伎の源を偲ばせる四條礮に近く、櫓の佛さへ正面に残して堂々たる南座の大建築が今度竣功したことは、我が演劇史に特筆すべき重要な一頁と云はねばならぬ。

只に日本演劇の發祥地に建てられた計でない、神聖な史蹟を繼承したからのみでは無い。此の新舞臺の落成を祝するのは藝術の興隆を茲に豫想し得るからであつて、徒に過去を追懷して感慨に耽るのみで無く、遠く將來を展望して欣抃に耐へぬからである。

軌近心理學者の説く所に據ると、藝術品の出來上るには三段の階級を要すると云ふ、第一段では作家の直感が先づ動き、第二段ではこれを表現する、然しいくら天才が巧に其の詩想を表現し得た處で、單にそれだけでは何等の價值も認められねば、何等の價值もないと同様である。そこで第三段に昇つて公衆一般が其の作品を賞識し熱烈な同情心に打たれて仕舞ふと、茲に

始めて藝術の眞價が生じて來る。即ち作家の直感が廣く普ねく再現せらるゝに至つて創作の過程は完成するのだと云ふ。

數多い藝術分派の中でも、演劇は特に此の學說に當てはまつて居る。いくら人生の眞相を活寫した脚本があつたにしても、演じてくれる名優がなく、又幸にそれがあつたにしても、演ずべき檜舞臺がなく、又幸にそれもあつたにしても同情して見てくれる具昭の觀客がなかつたならば、到底不朽の名聲を博することは出來まい。實に演劇の目標は趣味の豊かな民衆であつて此點だけは他の藝術の何れものものに比して一層深く顧慮せねばならぬし又實際顧慮して來たのである。

裝飾は華麗と瀟洒とを兼ね、設備は衛生と便利とを合せ、而も舞臺や附隨せる諸機關が技藝の演出に適してこそ劇場建築の効果は生ずるのである。只に多數の座席を設けたり、張麗な粉飾を施したり、餘技の演奏に着想したりするだけでは民衆趣味の向上を促すことは出來ない。言ふ迄もなく舞臺の構造様式だけでも劇の動作に少からぬ影響を與へ、延いては戯曲の性質ま

で變更して仕舞ふのである。

劇場と云ふものが存在しなかつた古代の演劇が如何に慘じめであつたかは近代人の想像し得ぬ所であらう。車の上に板を敷き列べて舞臺とし此の車を曳廻して演舞したのが西洋演劇の抑もの始と傳へられて居るが、壯麗な今日の劇場との懸隔は如何にも如何にも甚しいではないか。然し現代でもジプシーの演藝團が自動車を列ねて演藝一切の道具を載せ、縁日祭日を追つて各地に巡業する有様からセスピスの舞臺車を想像し得ることも出来る。なほ西洋諸國で近代に劇の始まつた頃には寺院や公會堂を借りて演じたもので、其後漸く宗教の手を離れ、又暫らくしてから木造の野天小屋が出来た。それで作者も現れ役者も揃つて後に劇場が建設せられ、茲に劇の三位一體が圓滿具足した爲に一躍國民藝術の地位を獲得し、劇は完全な發展をなし得たのである。然るに希臘では餘程に前から大規模の圓形劇場が各都市に設けられ、演劇は國民的儀禮即ち祭祀の一部分となつて居た。且つ俳優も作家も市民の各方面から推擧せられ、神宮の競技と同じく公衆一般の批判を受けたのであつた。そこで優勝した詩人は名譽の月桂冠を授けられ、又演奏の巧拙に應じて政府から賞罰が下された。此の如く壯大な劇場が早く建設され殊に公衆と劇技との關係が非常に親密であつたから、古今に冠絶する悲劇詩人の謂はゆる三傑も終に現はれ得たのであらう。

さて劇場と公衆との親密は劇の發展にかく迄に必要であるのであるが、俳優と公衆との接觸も亦これに劣らぬ程必要でなけ

ればならぬ。よし舞臺上の演技、脚本の解釋が俳優の責務であるにしても、個性の伴はぬ藝術は決して美を現はし得ないから俳優自身の性は直接に舞臺の上に反響して來るし又其の趣味や好尚なども自から藝風に實現して來るから、公衆が是等の特色を大體なりとも知つて置く方が便利であつて、晴々の裡に俳優を鼓舞獎勵し又は感化矯正することも出来、因て以て劇道の進歩を助くることも出来る。

徳川中期頃から毎年我が劇都に催ほされた「顔見世」なる慣例は無論如上のやかましい意味で行はれたので無いが、像然にも其の効果はまさしく劇の發展を促がし一面に於ては公衆の觀劇眼を高からしめた。よし夫までの良好な効果は無かつたにせよ公衆と劇場との距離を狭め兩者の接近を可能ならしめたので演劇の趣味を普及したのは争ふべからざる事實である。例へば次の年度に出場すべき俳優全部を動員して觀客に紹介し、諸般の吉例も畢つてから、觀客も舞臺の俳優と共に手を拍つて首途を祝つたので、丁度劇場の内外互に鼓應する有様となり、觀客の心からの聲援には俳優の心からの奮勵が必ず應答したに相違無い。近來屢々催ほされる活動役者の「御挨拶」と云ふのも恐らくは同じ意味から起つたのであらう。

時代は急轉した、經濟組織は激變した。各座獨立、座頭専制の舊式は今や全く影を潜めて、進歩した巡業政策のみが全盛である。随つて遺憾の事には劇壇に於ける觀客と俳優との親密が漸く薄らいで（女優は暫らく論圈の外に置くとしよう）活動界



# 近江源氏先陣館

南座  
顔見世興行  
晝の部



山上貞一

## 解説

此作は昭和六年十二月大坂竹本座上演、作者は近松半二、八民平七、松田才二、三好松洛、竹田新松、近松東南、竹本三郎兵衛等の人々が合作したもので、盛綱陣屋の段は八ツ目である俗に「近八」といひます、今ではこれだけで獨立してゐる感があるのは最も場面が傑出してゐて、事實に於て底に底あり、變化に變化を重ねる構想の巧妙さといひ、登場人物の配合といひ、規模の

立派で布を引つる

立派き華やかさ、情も涙もあつて而もいや味のない處、申分のない戯曲と言へる  
鷹治郎の盛綱は既にきわめ附の藝である  
まづ吉右衛門、次で羽左衛門、鷹治郎と仰つてゐるが、私は情の人盛綱として對小四郎の態度より押し、鷹治郎の盛綱を當代第一と言ふ  
丸山耕氏は『情味の溢れた鷹治郎の盛綱は小四郎ならずとも持つてみたい叔父さんとして、懐しみ親しみを感ぜずには居られぬ』と言つてゐられる。正に至言だ。  
役は鷹治郎の盛綱、吉三郎の和兵衛、幸四郎の四宮太郎、彦三郎の時政、右團次の竹の下孫八、長三郎の伊吹藤太、昭和三年六月興行、中座にての見たまゝです。

四ツ目の紋所ある襦袢は正しく佐々木盛綱の陣所だ。腰元達まで襦をかけ長刀を持つてゐる。

その源は近江路の比叡山麓隔てられ便

立目 九つ左

片田の雁越えて武士の義は石山や月の弓張り矢叫びの矢走の歸帆陣幕もひらめく比良の陣館  
鷹元達は盛綱の一千小三郎の初陣の手柄を知りたく思つてゐる、盛綱の妻早瀬も天晴手柄のあるやうと神に祈つてゐる。そこへ物見の軍卒が味方の勝利をつたへ、小三郎が敵方の高綱の倅小四郎を生捕つたことや盛綱が石山の御陣所へ出仕したから追付歸陣すると言つて来た。早瀬は大喜びである。早速と母親へ知らせやうと立上ると、母の微妙が一間より手柄話を聞くべく出て来た。早瀬は小三郎の軍功も相手が同じ孫の小四郎では嬉しいのと悲しいのと片目がわりの心を察すると言ふと微妙は不所存な倅高綱が音信不通の中に出來た小四郎の顔を見た事はない。それに敵味方と別れた上は涙かけてよいものかときつと言ひ放つた。そこへ「旦那の御歸り」と盛綱が小三郎や耶黨を引連れて歸陣した。小四郎は繩にくられて出て來た。微妙は孫かと顔を見初めに胸をおどらせた。  
盛綱は小三郎が大敵高綱の倅小四郎を捕虜にしたのは挨拶の高名と時政公から盃と感状を賜つたことを言つて微妙に悦んでくれといふ。早瀬は出かした産んだ母までが

ある  
と  
は  
何  
ん

肩身が廣いと悦び一同もほめそやした。微妙もほめたがどこやら気が済まぬ。小三郎は四人小四郎の首討つ事無用といふ上意を告げて小四郎の無念さを察した。小四郎は父の教へに勝負は軍の習ひ早や首打つてくれと言ふ。母物見の侍が走り出た。和田兵衛秀盛がたい一人見得られたことを告げた。一同はその大膽さに驚いた。盛綱は囚人を奥へかくまひ老母も遠去けて秀盛を迎へた。長上下の荒くれ男がゆうくと出て来た。鎌倉方の悠長なので退屈のあまり甲冑をぬいで阪本城より使者に來たと言ふ。その口上は囚人の小四郎が入用なれば返してくれと事もなげに言ふ。盛綱は一人の童のために侍大將が來るとは珍説と笑つた。秀盛はその童を生捕つた位で一城でも乗取つたやうに喜び勝軍の基だと言つてゐるのを聞いて惜しくなつて所望しに來たのである。盛綱は高綱こそ大功の勇士と思ひの外倅に迷ふ味練者、だがあの囚人は時政公より預つたもので私に渡されないと斷つた。秀盛は石山の陣所へ行つて時政に直談しやう、刀かけの代りに近習を一人借りうけて石山へと立かゝると小具足に固めた侍がばらりと取巻いた。秀盛はその中を悠々と立去つた。

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

盛綱は母の微妙を呼んだ。そして陣屋を隈なく見まはした上で、甥の小四郎を祖母であつた微妙の手にかけてくれと頼んだ。微妙は時政公より預つた大事な囚人を殺されやうかと驚いた。盛綱は北條殿が小四郎を殺すなどの上意は人質として父高綱を味方につけたし謀事で、高綱が子故に不忠になつては残念だし又子の恩愛に引れて弓勢がにぶつても困る。どうか小四郎に切腹させてくれと頼んだ。峰吹き通す風、早園城寺の鐘諸共、誘はれ來たる白羽の矢……紅葉の立樹へ矢文が立つた。高綱の妻の簀火が出て來た。和田兵衛の供先へまぎれて我子小四郎の様子を見に來たのである。夜廻りに見附けられまいと隠れると陣屋では早瀬が矢文を見つけた。名にさう逢阪山のさねかづら人に知られて來るよしもかなこれは相嫁の簀火が小四郎に陣屋を抜け出で、來いとの謎か、もしそこらをうるついで、母子一所に繩目の取をうけたらどうするのかと矢文の裏へ返歌を認めて陣外の小松へ打つけた。早瀬が奥へ這入ると繩付のまゝ小四郎が出て來た。早瀬のよむ歌で此處を抜け出よ

といふ母の報せを知つてゐた。どうかして出たいと焦つてゐる處へ微妙が廣蓋に無紋の上と短刀をのせて出て來た。『小四郎待ちや』と呼んだ。今宵限りの命と思つて見ると器量骨柄捕ふた孫がいとしいと泣いた。繩を解いてゐる時しも表では簀火が小松の矢文の返歌として、知るも知らぬも逢坂の關——とは時節を待てとの事かと戸の隙間から中を見ると、微妙は子高綱に別れて十三年、孫があると思ひてゐたが見るは始めての小四郎をいたはつてゐた。祖母の引出物だと差出された上下と九寸五分を見て小四郎は切腹をしなければならぬ自分を子供心に悟つた。生きてゐては父高綱が武勇の妨げになるからとて死を勧めた。外では簀火が驚いた。あまりに氣強いばい様と思つたが盛垣が隔てゝある。小四郎は自分の命一つで父や伯父の手柄になる事なら死ぬが、初陣に敵に生捕られたことが口惜しい。父母に一目あつて雑兵の首を一つでも斬つてから死にたいと願つた。微妙はその未練を叱つて介錯を此ばどがして直ちに自害なし、三途の川は手を曳いて渡らうと抱きしめた。小四郎は尚も両親に逢ひたいと言ふ。簀火は堪らなくなつて木戸の口から呼んだ。小四郎は

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

さ  
り  
る

師走拾七日



斷寄らうとするのを微妙は単性者と怒つた。

小四郎は母の聲を聞いて一倍命が惜しくなつたのである。微妙は立派な最期をしてほめられてくれと手を合せて孫に頼んだ。

はるかに陣太鼓の音が聞える。微妙は遠寄の物首に小四郎を奥の間へと連れて這入つた

早瀬が長刀をかい込んで走り出てやうとして箒火と出逢つた。相嫁の初見参である。そこへ四の宮太郎が注進に來た。

『時政公のお入り……』

その聲に二人はきつと陣門のあたりに眼を

みはつた。

陣屋の奥の間である。北條時政が近習古部

新左衛門、佐々木盛清を従がへ召替の鎧櫃を

持たせて御座に着く。そこへ竹の下孫八が和

田秀盛に酒を強いて酔伏せ居間の四方に金網

を張つておいたが天井を打抜いて白旗を奪つ

て立退いたと言上した。時政は高綱を討取つ

たので腹心の害を拂ふたが高綱は將門に習つ

て彫武者を使つてゐるので眞偽が解らぬ。兄

盛綱に實檢せよと命じた。

盛綱は擬つと首箱をあけた。  
『やあ、と、様か、無口惜しからう、私も跡から追付ます』

と腹へさし添を突き立てたのは小四郎であ

る。盛綱は何故の切腹かと聞いた。父を先立

て何まご／＼と生取ちをさらそう。親子一緒

に討死して武士の自害の手本を見せると言ふ

微妙は今更に孫の立派な心掛に驚いた。

そのうちに時政は實檢を急いだ。

『矢疵に面體射損じたれど弟佐々木高綱が

首に相違ない。聊か相違御座なく候』

盛綱の言葉といひ小四郎の切腹で時政は首

の證據を明白に知つた。枕を高くして寢られ

るのも盛綱の働きと着替への鎧を當座のほう

びに残して萬歳裡に本陣に引上げてゆく。盛

綱は改めて箒火に小四郎へ最後の暇乞を許し

た。微妙は僞せ首と知つて時政に渡したのは

京方へ味方する氣かと聞くと、變心はせぬが

高綱夫婦が計略、父の爲に命を捨てて幼少の

小四郎が神妙健氣に不忠と知つて大將を欺

と逢ひながら現在の父に逢へぬことを悲しみ

つゝ死んで行つた。盛綱は實檢を仕損じた申

譯に切腹しやうとする處へ慄然と現れた和田

秀盛が呼びかけて止めた。

『屏風をとれば湖水の唐崎が遠く見えた。盛

綱は秀綱を召捕らうとした。

『此和田兵衛秀盛が習ひ覚えし南蠻流の懐中

鐵砲うけて見よ』

とねらつて打つたのは鎧櫃で、中では格名

十郎が苦しんでゐた。秀盛は北條の隠し目附

も盛綱の手にかゝつたのではないから不忠で

はない。

『此まゝ生るは弟への情け、一つには明への

寸志』

と秀盛は京方、盛綱は鎌倉方と敵味方に返

つて秀盛は白旗を持つて出て行く。盛綱は陣

中にて味方の武士を討たる曲者、返せ〜と

聲高く呼ばはつた。

『ちなみは兄嫁小姑め』

『孫よ明子の亡骸に』

『愛事三井の暮の鐘』

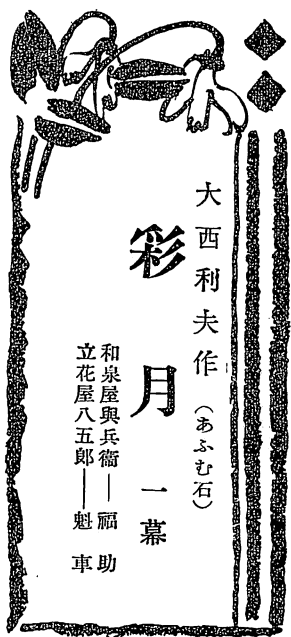
『消えゆく子より親心』

『わが唐崎の夜の雨』

『父にはひと目』

『粟津の嵐』

さらば〜と別れてゆくのであつた。



大西利夫作 (あふむ石)

彩月 一幕

和泉屋與兵衛——福助  
立花屋八五郎——魁車

「た」とひ野の末山の奥、鬼狼の棲家でも、一日なりと夫婦ぢやと、人に云はれて死にたいと、思ふて暮すわしが氣を知つてゐながら今更に、思ひきれとは聞えませぬ、もしや私に秋風が、ふてうつらふ心なら、いつそ殺して下さんせ息ある中は中々に、思ひ切られぬ身の因果。……」

ら、えゝおりやもう安心して、安心して……いや〜、そんなことがあてになるものか、こつちの今の身分と八五郎の身分とを較べたら、どう考へても勝目のない達引……はア、やつぱり氣がもめる、こりやぢつとはして居られぬ、えゝもう耻も外聞もあることか……」

八五郎 やかましういふないやい柴舟はの。  
與兵衛 おゝ柴舟は。  
八五郎 とう〜おれのものにしてのけた。  
與兵衛 ひえ〜ツ……(とよよろととする)  
八五郎 さア、もう何といふても、かなはぬ事ぢや、柴舟は盡未來おれのものになつた證據、さア見い！  
ト、長襦袢の片袖を投り出す  
與兵衛 おゝ……これは柴舟の襦袢の袖、おゝ柴舟の。  
ト、ひろげて見ると血がべつたりついでゐる。  
やゝ、ち、血！  
八五郎 やい、静かにさらせ(と不安らしくあたりを見廻す)與兵衛、それがおれと柴舟が行末かけての堅い約束文ぢや、小指を切る代りに、あいつの胴骨をおれの手にかけてすりばと斬つて書かした血染の起請ぢや

與兵衛 そちや、そちや、柴舟を殺したなア、  
八五郎 おゝ殺した、殺した、柴舟は身體ぐるみ、命までおれが貰ふてしまふた、もう何とわめても、もがいても、柴舟はそちへは戻つて來ぬ、はゝ……そちや口惜しいとは思はぬかよ。  
與兵衛 ……(非常に緊張して暫らく八五郎の顔を見つめてゐたが、やがて昂奮した悲しい笑)  
あは……あは……あは……あは……何が口惜しい、おれは、おれは、おれは到頭勝つたぢや、は……  
八五郎 ナニツ……  
與兵衛 (昂奮して口早に)おゝ、おれは勝つたのぢや、柴舟はおれに心中だて、殺された、その情けより、俺の、情の方が強かつた、柴舟は生命がけて與兵衛に心をよせてゐたのぢや、八五郎、ざ、ざ、ざまを見い！  
八五郎 おのれツ！



## 顔見世雑話

# 暫の遊戯的分子

高安吸江

顔見世に行くか霜降る夜の人 京江 蓼

まだ暗いうちから夢あた、かい蒲團を蹴て飛出すと、霜美しい川原の灯影に先づ恍惚となつて、昔懐しい櫓を眺めたのも昨日と過ぎ、彩燈<sup>いろど</sup>眩ゆき石造の四條橋畔に巍然として聳ゆる、御城の様な南座は威風堂々四隣を壓し、所謂流行のフツイチング、スピリットの象徴かとも思はれ、最早京の芝居でなく、京都の大劇場との稱號に適するやうになりました。プログラム<sup>プログラム</sup>の盛綱以下八種の内、お夏に軔、大森に船辨慶と舞踊劇が其半数を占め、残の半分は義太夫ものに盛綱、賀の祝河庄、古典劇で暫となつて居ますが、何れも撰ばれた一幕揃のレヴィニュー式なのも同じく時勢の然らしめる處と、私共老人組は後へさがつて謹で見物仕る事に致しませう。

顔見世も四十過ぎては先ッ寒し 諷 竹

扱此等の出し物は何れ劣らぬ名作であります、私の特に面白いと思ふのは賀の祝で、此れは先年大阪で宗十郎の八重に鴈治郎の櫻丸の顔合がありました、今回は殊に中車の白太夫が興味をひきます。菅原の中で道明寺よりも、また寺小屋よりも一層情味の深い此佐大村を皮肉で優しい橋尾老人がどう演出するかは、好劇家の大に期待すべき事と信じます私は不幸にして芝居の方ではまだ此役から強い印象をうけて居ませんが、文樂の方ではズット以前に、先代呂太夫の聲涙共に下る南無阿彌陀と、路太夫の美聲でのそれとを對照して面白い差異を知りました。今度のは果してどんなものでしやうか。

顔見世の出しものとしてはやはり暫が最も似つかはしいと思ひます。此程私の書棚の中から偶然見つけた四ツ切の寫眞は、電燈寫眞と題して立鹿館が撮つた暫の舞臺面、それは明治三十八年十一月十二日から東京の歌舞伎座で演つたものです。今日のやうにテヒニツクが進んで居ませんから顔なども鮮明を欠きますが大體はよくわかります。九代目をはじめ権十郎、訥子、猿之助、八百藏、新藏、女寅、染五郎、猿藏などの中で今の中車が腹出し、幸四郎が加茂の次郎をやつ

て居ますが、あとはもう故人です。中央に凜然として例の見得をする九代目の颯爽たる英姿は實に偉大其もので、故鴈外博士の淺草に建てられた暫銅像の銘

睥目隆準塗丹。矮軀亦作長身看。

其止端重邱山安。其動遄迅鵬鷲搏。

音吐旬々拂金盤。一呼堪息百天譖。

が如何にもよく言ひ盡してあるやうに思はれます。唯是等は皆江戸歌舞伎の荒事だけを説明したのでありますが、古典劇の要素の一として外に遊戯の分子の存在を閑却してはなりません。此時は丁度團十郎が三度目の暫でしたが、櫻痴居士の手でツラネも多少修正され、茶番めいた事は一切ヌキにしたと云はれて居ますが、それでも或日九代目の鎌倉権五郎が、エエうぬ等に引ツ立られてつまるものか、悪く側へ寄りあがると、避病院へ抛り込むぞ」と申しましたので、相手の狼狽一ト方ならず「エ、虎列拉病ぢやあるめえし……云々」と危ぶくごまかしたなど、謹嚴な團十郎でも此通りでした。

遊戯的と云へば此もう一つ以前、即同十一年十一月廿七日初日で新富座に出た暫は中々振つて居ます。何しろ團菊左の外に宗十郎(末廣家)仲藏、家橋、小團次、半四郎、小紫などの大一座で一番目忠臣藏の毎日がはり、團十郎が狸の角兵衛菊五郎が與一兵衛、左團次がおかやまで演つたなどの類で、唯顔世とおかるだけは半四郎にきまつて居ました。大切は三

都の顔見世、京の座附に舞子の一群、名に大阪の手打の連中友禪染のなげ頭巾、それに對して江戸の暫といふ立て方なのです。

扱例のツラネもすみ、鏡が返つて「まるく納まる此顔見世目出度一ツギめべつか」の後で皆がソロ／＼絶句し出しますと、宗十郎が着流し狂言方の拵らへ出てつづけます。それが忠臣藏の臺辭で、五段目から七段目六段目とさかんに脱線してメチャ／＼になるのを、菊五郎の將門が「方々ひかへい」と制しますのはよかつたが、又絶句してあとが續きませんので、宗十郎がつける思入をすると菊「イヤそんなせりふは已れは云はぬ、宗「コリヤほんとうの台辭で御座り升、菊「本統でもおれは云はぬ、宗「お前が言はずばわたしが云ひます、」ト宗十郎が五代目の聲色で「テモ小ざかしきわつばが振舞：云々」と云ふ中、菊五郎は人形の思入になるのです。是は大阪出身の宗十郎を狂言方に遣ひ、菊五郎の代に台辭を云はせ、無言の中に二人のウケにした處が作者の趣向だつたのですが、惜しい事には中途で預りになつたさうです。

幸四郎の暫は、殊に其風手の故師を髣髴たらしめる點に於ても他の追隨を許しませんが、理屈つばい現代にこんな古典劇を喜ぶ人が幾許ありましやうやら、頗る心細いやうに思はれます。然しとにかく古格を崩さず、思ひきり非現實的で、遊戯的分子なども出来るだけ豊富な、美しい夢幻境の展開が望ましい次第であります。



# 歌舞伎傳統の精華

林 久 男

又ぞろ吉例顔見世狂言の季節になつて一人に霜おく朝朗ら」の古への氣分は兎に角、四條河原に時ならぬ花が妍を競ふことは、芝居好みの人の心をときめかせずには措かない。殊に當年は、南座もすつかり装ひを新たににして、この昔ながらの年中行事に一段の颯爽味を添へようとしてゐる。

出し物としては「菅原」の佐太村賀の祝が出るのが何よりも嬉しい。と云ふのは、先年此の「菅原」の車曳から寺小屋まで出た時も、自分は此一座によつて是非一度佐太村まで見せて欲しいと待望してゐたのであつたが、それが此度圖らずも其の念願が届いたわけである。

「賀の祝」は明治四十一年五月、市村座で嘉六の白太夫で見たのが、今でも一番目によく残つてゐる。その時は、松王夫婦が榮三郎に榮三郎、梅王夫婦が勘彌に玉之助、櫻丸夫婦が三津五

郎に芙蓉といふ役割であつた。あの鼠小紋の著附で白髪丁髷の白太夫が庭の掃除をすまして、二重下手から真中の佛壇の前へ坐ると、小首をちぢめ、肩を張らして煙管を扱ひ乍ら十作を相手に「けふから白太夫といふ程に、さう心得て下され」と云ふあたりや、櫻丸の團末魔の念佛の鉦打ちや、幕切れに、白の脚胖手甲で菅笠を手にして門口から送り出され、心残りに立ち戻りつゝ、終に本釣で這入るまで、晩年の嘉六一流の枯れた持ち味をよく表はしてゐた。又、芙蓉(菊次郎)の八重が、濃紫裾襦袢のあでな著附で、一人門口にしよんほり立つて、物案じ顔に夫の來るのを待つ姿が、やがて全曲を支配する深いしんみりした味を出してゐたのも忘れ難い出来であつた。

一體かういふ淋しい哀愁的の場面を、吉田社頭の車曳喧嘩場のやうな華やかな場面に配したのが出雲等の狙つた劇的效果を

著しくしてゐるのは云ふ迄もないが、自分は寧ろ此の場面に  
たゞよつてゐる言ひ難い抒情詩的情趣を全曲と對比して興味深  
く感じてゐるのである。

それと前後して歌舞伎座でも、中車、歌右衛門、梅幸、幸四  
郎等の大一座で此の「賀の祝」を見て、いよく此場面が好き  
になつたのであるが、二十餘年後の今日も、それにもをさく  
劣らぬ顔ぶれで此場面を見ることが出来るのは、自分としては  
何よりも有難い。

自分は嘗て、南座の顔見世狂言が毎年いつも殆ど似よつた顔  
ぶれであるのを不足身に慾を言つたこともあるが、併しよく思  
ふと、歌舞伎傳統の世界に於て、現在これだけの顔が揃つて見  
せてくれるといふことは、後年になつたならば、寧ろ言ひ傳と  
なる程の幸運と云はなくてはならない。何れもそれらの役柄  
に於て、後代に型をのこすべき人達である。その人達が毎年一  
人も缺けぬばかりか、一時は二豎に冑された人達も全く健康を  
恢復してそれらの特技を見せてくれるといふことは、歌舞伎  
傳統の爲に、寧ろ永く續けかしと衷心祈らざるを得ないわけだ  
である。

極近い所の顔見世狂言から云つても各優が——多少の出来不  
出来は別として——それら己が持てる藝を擴充的に示してく  
れた。例へば、中車は、松王、本藏、光秀、仁木等に於て、梅

幸は、お石、お鬘、茨木童子、政岡等に於て、幸四郎は、六助  
綱、辨慶、男之助等に於て、鴈治郎は、源藏、藤十郎、富樫  
伊左衛門、南與兵衛、實盛等に於て、而も今年の吉例の狂言に  
あつては、中車が白大夫を、梅幸がお夏、靜、知盛を、幸四郎  
が「暫」と大森を、鴈治郎が盛綱と治兵衛を演ずることなどは  
傳統性に意義のある歌舞伎に於ては、矢張り大なる連鎖として  
永く残されることは否まれないことであらう。

去年の顔見世狂言に「實盛」で其の苦心の特技を見せた成駒  
家は、今年も、同じく型物としてやましい「盛綱」を出して  
人氣を煽つてゐる。今から四十年も前、即ち明治二十三年の六  
月、新當座でこれを演じた時は、父雁雀の藝風そのまゝで、大  
した評判を得たと傳へられてゐる。近年同優が次第に斯ういふ  
方面へ精進して居ることは頗るい、傾向であると私かに思つて  
居るが、その都度々々常に何等か新しい工夫を凝らして居るの  
は尙更頼母しい。あの「是非もなき運命の有様や」と肩で泣く  
所の情味深いあたりは、又一段の工夫がこらされてゐること、  
期待される。

自分はよく云つたことであるが、一體盛綱の首實験は、松王  
の首實験よりは、其の刹那に於ける義味が複雑で、我々の理解  
する世界に一層近いやうな氣がする。半二の「盛綱」は出雲の  
「寺小屋」よりは二十三年も後に出来たものであるから、肉



身の首實驗にクライマックスを置くといふモーチブは、半二は出雲から暗示されてゐたにしても、一體に人情の不自然や無理が少くない所だけでも現代人には面白くない筈である。

首桶をあげた刹那！ 見れば案外に鬘の首である。驚愕——疑念——安堵——喜び！ 見れば傍には可憐な朝の小四郎が深傷に苦しんでゐる。後ろに控へてゐる明智の北條を欺かうか。或は鬘首と言ひ放たうか。いや、それでは小四郎は大死になる。此の瞬間に於ける盛綱の胸中の義と情とのはけしき鬘を思ひやる時、吾人は彼の「是非もなき武運」の爲に、即ち武士の「物の哀れ」の爲に涙ぐましくなつて来る。彼は終に鬘首だとは言ひ得なかつた。同時に我身を殺して義を立てようと決意した。此の刹那の彼の複雑なる心を思ひやるのは、我子を先によこしておいて其の首を腕めまはしてゐる松王を見るよりも一層近代人の心を動かし易い。

併し、斯の如き複雑した刹那の情をあらはすのは——而も無言のうち悲喜哀樂の移り變りをあらはすのは、凡優の容易によくする所でない。それにつけても思ひ起すのは、明治四十三年の十一月（？）歌舞伎座で演じた羽左衛門の盛綱である。

彼は目を塞ぢたま、首桶の蓋をあげた。紙を左右から後ろ向きに首にあて、其の顔を拭ひ、静に首を手前へ向け直し、きつと刀にそりを打たせて、右の袴を上からすつとこき下ろして、静に顔を仰向けたと思ふと、サツと兩眼を見開いた。こゝが堪

らなくよかつた。妻味をもつた兩眼が瞬もせず徐々として下向きになつてゆく——ハタと首を見つめた。其刹那、何とも云へぬ沈痛な表情が閃く。頭を傾け斜に向ふを見やり乍ら、フト心付いた思入れで目に見えぬ程の微笑をして幽かにうなづく。併し、目近に深傷の朔を見やると、急に悲痛の情に襲はれて、目をぱち／＼としばた／＼。それが餘り大袈裟でなかつたのも却て情がこもつてゐた。彼は傳へられたる型によりつゝ、而も自らの解釋による内容をじり／＼と盛つてゆくのであつた。あの狭い細い顔が驚くべき複雑な情緒の波をうつつてゆくのが、外國の名優なども思ひ合はされるのである。

併し、立花家に比べると、成駒家の方は、あの天賦の豊満なマスクである。而も、いつ見ても何等か新たな工夫が凝らされてゐる。藝も次第に圓熟の妙味を極めつゝある。どうか此度も、溜咽の下るやうな至藝をと期待されるのである。

# 舞台戯曲

毎月一回發行  
一部金五十錢

◆新進作家の脚本發表雜誌

東京市赤坂區氷川町二八

舞台戯曲社

振替東京七三二八六番

# 初開場に際して

白井信太郎

顔見世の名によつて、全国的に喧傳されてゐる京都南座の改築工事も、豫期以上の高速で竣成を告げ、茲に昭和四年十二月、新装記念の顔見世興行を以て初開場を致しました次第で御座います。

云ふ迄もなく南座は、三百十有餘年を連綿として存立した日本最古の劇場でありますから、これが改築に當りましても、よくその史的建築美を尊重し、形式を純日本風の破風造りと致し、一面永久性を保有する爲めに、鐵骨鐵筋混凝土の洋風建築法によることゝなりました。

従つて内容外觀ともに、新時代の劇場としての優秀な機能を具備し、觀覽席の大部分を高級椅子席に改め、靴草履のま、自在に出入し得ること、食堂、休憩室を設備した點も、その特徴の一つであります。特に市民各位の御便宜を計り、當劇場を一つの社交場として御利用願へることも新劇場の持つ誇りで、今後あらゆる演藝會、音樂會、集會、宴會などに實費を以て簡易に御貸與致したいと念願いたして居ります。

永遠の後援を此機に臨み特に切望致す次第で御座います。

# 川柳顔見世

渡邊虹衣



東山を背景に、四條大橋の畔にそゝり立つた彼女の姿は、さながら我國固有の學に育てられた上に、泰西の新學によつて一層の磨きをかけられ、同時に完全なる體育によつてその肢體の均整美を看せた如く、現代建築の粹を聚め、鐵筋コンクリート、破風造り五層樓の新粧美々しく、その工を竣つた京都の南座は、其柿葺落しを十二月の顔見世として華々しく開場する事となつた。

顔見世興行は、徳川期以來、我が芝居國に在つては年中行事として行はれて來てゐるが、併し今回の南座に於けるが如く、新様式になつた大舞臺の、柿葺落しに行はれるといふ事は、予の寡聞、餘りにその例を聞かぬのである。此點に於て今回の南座の顔見世は、一面役者のつら見せであると同時に又、南座それ自身のつら見せでもあるのである。

扱て以上を以つて太夫元の三番叟となし、愈々これから前

脇の狂言に入る事とする。即ち狂言の外題は川柳顔見世！

古い川柳點には芝居の顔見世をよんだ句は少なくはないのであるが、併しそのいづれもは、江戸の三芝居をうたつたもので京阪の芝居に就いて作られたものはない、これは江戸に生れた川柳點としてはやむを得ぬ次第であるが、今これ等の句の内難解でないもの五六を茲に紹介する事とする。

朝霧で櫓の見えぬ時分行き

三番叟は曉方の八ツ時から勤めるといふので、観客はまだ夜の明けぬ内から聾々と詰めかけることをかくうたつたものであるが、今度の南座などは山に近く川に近い關係上、朝霧深くたち罩め、さながら浮城の如く見えるか見えぬ内から客の押し寄せる事であらう。

棧敷のはどれも後月結ふた髪

霜月の化粧十月髪を結び

神々のお歸りすんで幕が開き

此初めの二句はいづれも観客の事をいつたものである即ち前の日から髪を結び、化粧をして出掛けるので、芝居を見てゐる時分には月の稱が變るので只一日の事ではあるが後月といふ事になる、次ぎの霜月は十一月で、此句の作られた江戸時代の江戸三座の顔見世は十一月朔日からとなつて居たのでかくうたつたものである。終りの句は神々が出雲の大社へ集るといふ十月の神無月も終りになり神々が元の御社へ戻つて

來ると十一月朔日となるすると顔見世の幕が開くといふ事、それで

八百五丁つねていの晦日なり

といふ句も出來て居る、これは昔は江戸は八百八丁といはれて居たが此顔見世前の十月の晦日は、芝居の關係者にとつては丁度大晦日の如く、諸事の取り決めを行ひ扱て顔見世の聞く十一月朔日を丁度元朝のやうな氣持ちで其業に就いた爲め、其芝居のあつた堺町、木挽町葺屋町の三町は十月晦日はまるで普通の大晦日同様に騒ぎ廻つて居るが他の町々は然うした事がないので平常通りだといふ事で僅かの十七字でよく此風俗慣習をうがつて居る

顔見世に顔を見せぬは馬の脚

これはいさゝか理屈の句であるが、ナル程顔見世芝居といつても馬の脚は顔を出す譯には行かない、最も顔は見せなんだが、馬が物いふたといふ話は鹿野武左衛門の「鹿の髻筆」に載せてある。馬の脚役者が、頼んで見物に來て貰ふたひいきのお客へ對し、顔も見せずに了ふ事は

義理が悪い、といつて馬の脚では今いふ通り顔を見せる事が能きぬところから。布を被つて馬の後脚を勤めながら舞臺へ出て、お客のほめ詞に對しいゝんと答へたといふのである。此役者は齊藤甚五兵衛、座は堺町の市村座といふ話であるが全く斯うでもしなければ馬の脚になつて居る役者にはその存

在をお客はハッキリと意識させる事もできない譯だ。

顔見世のお供はどれも籤強し

顔見世の籤に腰元信をとり

今日でも顔見世へのお供に、大勢の女中などを召使つて居る處では然し皆を引連れて行く事も能きぬので籤引にして當つた者を連れて行くといふやうにして居るがよく、其籤に當るとは織運の強い者といふのである。終りの句は顔見世が見たいとはいつたもの、なか／＼連て行つては貰はず只いふだけの事だと舌を出すこんな動作は今でも見受ける事である

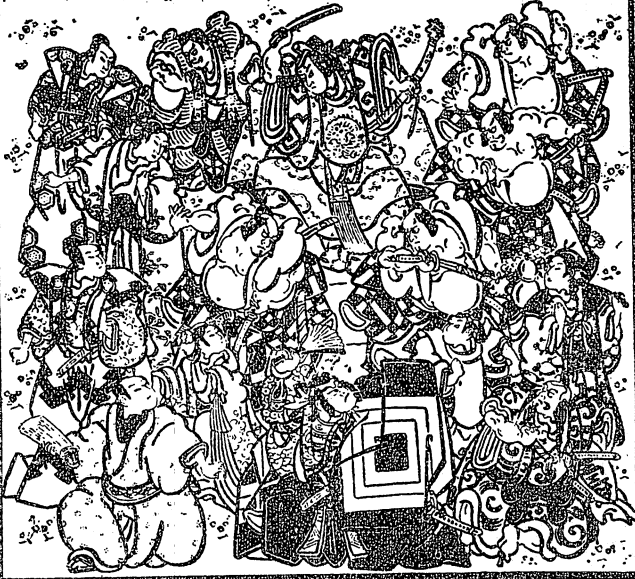
ひやうし木に嫁居直つて口を拭き

此拍子木は幕開きを報じる析である、幕間にお辨當をやつて居た嫁が、此析の音に居すまるを直し、口の端を拭つて取り澄しながら幕の開くのを待つといふのである元より嫁と斷つてはあつたが娘でも亦同様である事いふまでもない。昔の婦人でさへこれだけの行儀があつたのにも拘らず、今日の如く何も彼も昔の婦人よりは進んでゐると自負してゐる婦人客などの内に、幕が開いて居ても平氣でムシヤ／＼やつて居る者が少なくなひのは、一體どうしたものか、

大當り口上首をふるばかり

場内立錐の餘地もない迄にお客が詰込んで居る即ち破れ返る程の大入満員、そこで何か舞臺に在つて口上をのべて居るのであるが何しろ此大混雑で塵張り口上の趣旨が隔々まで徹底せず、只口上をいふて居る者が口上につれて首を振る其態丈がハッキリと見えるのみで詞が分らないといふのである。

新編  
お八景の巻



南座顔見世

暫

(畫の部)

鎌倉権五郎景政  
清原左衛門高衛  
足柄八郎宗衛  
荏原八郎連  
鹿島入道齊  
東金太郎義成  
垣太郎助成

景政 しばらく。  
敵役皆々 オア。

武待て〜〜我心に應ぜぬやつ原罪を糺して成敗なし今盃を巡らさんとなす折柄。

足 暫といふ聲を聞き、首筋元がぞく〜致し流行風でも引にやアいゝが在 斯いふ手前も有様は足の裏がムズ〜致し氣味が悪ふござるわへ。

東 何に致せ我々などはまだ、喰付又事なれば胸がどき〜致してならぬ。垣 左様〜、身共なども今暫くその聲を聞き下つ腹がびんと申した。

震 物はためしだ、聞いて御覽なさい。  
武 しばらくと聲かけたるは。

敵役皆々 何やつだえ。  
景 しばらく。

敵役皆々 暫らくとは。  
景 暫らく〜暫づら。

斯る所へ鎌倉権五郎景政出て来て花道へ留る。  
素袍の袖も時を得し今日ぞ昔へ返り花名に大江戸の顔見世月目覺し

かりける次第なり。



奴八人 ひとつこい。

足今、我君の殿命にて罪有る奴を成敗に行はんとす所へ。

在 暫くと聲を掛け、のたくりいん出た、はつばしめ。

震 イヤ、赤い伯父公二人共知らねば誰も知る筈なし。

照 かう見た所が、柄の素袍に大太刀佩たお若衆さんとやら、氣味悪さうな

東 聞くは當座の耻だと云へば、まア兎も角も聞いて見やう、そも先うぬは

敵役皆々 何にやつたエ、。

足 いやさ、何にやつた、エ、。

景 淮南子に曰く水餘り有つて足らざる時は、天地に取つて萬物に授け前後

する所なしとかや、何ぞ其の公私と左右を問はん、問んでも知れた源は

露玉川の上水からだ許りか肝ツだまゝで濺ぎ上たる坂東武士盛り三升の

九代目と人呼ばるゝ鎌倉權五郎景政當年こゝに十八番久し振りにて顔見

世の昔を忍ぶ筋限は彩色見する突牡丹素袍の色の棟染も滋味は此の相傳骨

法機に乗じては藁筆に腕力示す荒事師江戸一流の豪宕は家の技藝と御覽な

せえほゝかみ敬し白す。

奴八人 ひとつこい。

五 サア、暫くてゝる根元歌舞伎初まつて江戸の名物暫くの本治何れも首

の用心しやれ。

敵役皆々 やあ。

武 今暫くと聲を掛つん出た奴をよく見れば見覺へのある角前髪外に類も荒

事の本家に相違あらざるか其權五郎景政か何で暫くと止立致した。

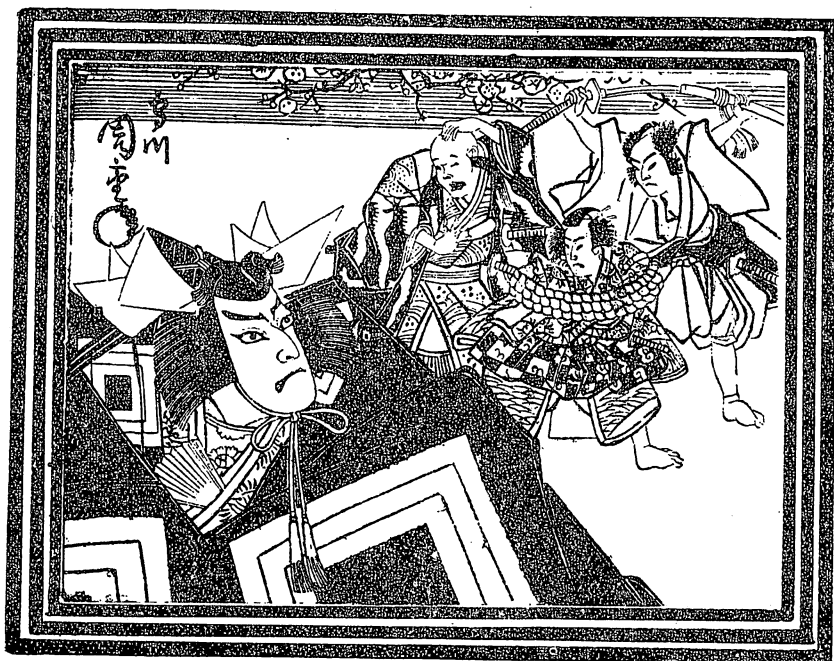
景 何んで大福帳の頭をはずした、イヤ、誰がはずした。

武 して其大福帳にいわれがあるか。

景 愚也それ大福帳のいわれ先大は萬物の頭名なくて外なきを大と讀ませ一

を書き人を加え天地乾坤の惣名これ大なり。





武 扱て又福とは。  
 景 福は幸ひと讀み籍には則ち示すと書き上の恵みを下に示すの心なり又作  
 りには一口の田と書き、古き文にも民は國の御寶と稱し誠に君の御威勢は  
 此のあし原は申すに及ばず、天笠震且あだし一口に飲み納めんとの理なり  
 武 扱て又帳とは。

景 知らずば事を問ひ玉へ帳は長久の長上一人より下萬民に至る迄人の司を  
 長く書ては、おきと讀む籍には則ち巾を書き衣食満足する時は國治まりて  
 民豊かなり、治まる時は文を左にして民をなで亂るゝ時は武を右にして敵  
 を推つ夫れ惟れば兵は凶器なり止を得ざるに是れを用ゆる誠に呂望張良光  
 武大宗天下を治むるゆゑなり、そのかみの歌に人は驅人は石垣人は城な  
 さけは味方、仇は敵なり、唯々一心のなす所誠に天地人の三歳は國にあつ  
 ては君民國武家にあつては智仁勇民間に下つては家の三寶庵も賑ひ國家繁  
 昌の色をあらけす、是大福帳の三字に至極す、此に目出度、末の年吉辰祕  
 密の額なり、と掲げたるが誤りか、ぐつとも云つて見る。

武 のさばり過つ其詞、此の武衝が耳障り誰かある引立い。  
 足 ハツ、こりや誰れ彼れと云ふよりも噂に聞居る吉例の入道どんが引立て  
 さつせえ。

震 宜敷うムる、吉例のあれば是非がない、勝手は知らぬがやつて見升う。  
 敵役皆々 手並の程が見たいいなア〜。(ト震齋勢ひよく下手(来て))

震 かいや待てよ、安受合に出は出たが勝手は知らず、力はなし所詮只ては立  
 ち居るまいと有て跡へは歸られず、なまずにいんで此胸がすまぬ。(一  
 寸諷ひかけて) まゝ我乍ら悪い聲だどりや〜。(花道へ行き) わつば  
 め、そこを立てて。

景 こりやアなんだ餘の化物か。  
 震 事も愚や、我こそは常陸國の住人 鹿島入道震齋とて要石でも恐れぬ入  
 道、きり〜そこを立てて。

南座顔見世 (夜の部)

# 一番目 賀の祝 一幕

佐太村の場



佐太村白太夫住家の場が舞臺に展げられた常足の二重が茅葺の屋根に門の格子、上手は庭で松、梅、櫻の樹が立ち並んでゐる、土間には米俵が積んである、外は青々とした野山に、梅も櫻も花をつけて長閑な春景色である竹本の聲もゆつたりと聞えた。

松王、梅王兄弟の女房が来る、道草も女子の手わざかさにつみ込み、蒲公、嫁菜……

下座の合方も春めいて、唄が賑はしく聞える、向ふより白太夫の賀の祝儀に梅王の女房がでて来ると後より松王の女房千代が呼びかけて、花道で一緒になり、門口へ来る、二人は互ひに内へ入るのを譲り合ふ、白太夫は聲を聞きつけて門口へ向つて

「一時に産した三つ子の嫁達先の後のとせり合ふ所が八重がとうから来て待つて居る、どつちこつちのおし合なしに這入つた〜」  
二人は内に入つて、男をいたはり祝のこしらへは三人の嫁がする

ことになつて、白太夫は倅共の来るまで一ト休みと有合ふ枕にゴロリと横になつた。  
嫁達三人はさぐめきながら膳ごしらへに家の内はいとも賑しい。やゝあつて眼を窺ました白太夫は、先達時平公の車先きで兄弟三人の大喧嘩その譯を聞かせと云つたが、嫁達は聞いても言はぬ夫の氣性で、たい此上は親御の計らひ仲の直るやう言ふてくれとばかりである、白太夫も座の白けるのを氣にとめた體で、祝ひの膳を急いだ、嫁達は刻限の來るのに、夫の見えぬのに氣がかりと三人一緒に迎ひに行かうと立ちかけた、白太夫は呼びびとめて、子供達は皆來て居ると云つた、みんなは不思議さうに目を見合はした。

「コレおれの指さきを見い」と上手の庭を指す、そこには松、梅、櫻、嫁達は成程とほへ笑んだ。  
「サア生れの日の刻限違やわるい、祝儀には陸の膳もする習ひ、ちやつと膳を拵へやい」  
「云ふに猶豫もなりがたく、俄に盛るやら、箸うつやら……」  
三人は膳ごしらへを始めた、  
「給仕は元より習はねど、見なれ、聞なれ、立振舞八重が配膳御所めけり……」  
八重が膳を白太夫にすゝめる、春は梅の樹に八重も櫻に、千代は松の前に膳を拵えての夫の自慢に鈴々の顔にはおのづと微笑が浮んだ、白太夫は親でも辭儀作法はあるものと立つて庭樹の前に坐つて、子にも言ふごとく輕くお辭儀をして立ちかけたが、バツタリ尻餅をつく嫁達はかけ寄つて介抱する、と腰をさすりながら起きあがり、狐輕にまた膳の前に戻つた、膳の出來具合を褒めながら、ふと白木の三寶に心附いた、八重からの祝ひものと聞いて何にやら胸につかへたやうだが、餅がのどにつかへた可笑しさに紛らした、春は三本の扇の祝ひもの、中の繪は三人兄弟を祝ふて松梅櫻の繪、末廣がり目出度祝へば、千代は頭巾の贈り物、白太夫はずぐ頭に被つた。

「どれもこれも不足のない心の付いたおくりもの、子供達の来る間、氏神様參つて来ませう、幸ひ三本の此の扇子供が生先末廣が氏神様へも頼んで来ませう」とまだ氏神を知らぬといふ八重をつれて白太夫は出かける、門口で杖が折れて氣にかゝるらしいが、そのまゝ八重と向ふへ入る。

千代と春は門で見送つてゐたが、内に這入ると夫の選いにちり／＼する、

「うはさ申ばに松王丸、日蔭すね木の意地拔き顔……」

花道から松王が出て来る、千代はまち兼ねたと取りつくを

「エ、ベリ／＼とかましいし」と怖い顔で振りはなせずと内へ這入る、おそいと云ふて自分は主持、梅王櫻丸は扶持放れの用のない身體、そいつらのおそいのがほんのおそいと云ふのぢや、と春に聞えよがしに大きな聲でいふ。

「詞のはしにも残る意趣、梅王も日足はたける、せいて来かゝりいそぎ足梅王が足早に花道から来る、迎ひに出た春と一緒に内に入る、親や櫻丸、八重の居らぬを不審がりながら、待兼ねるものは来ず、見

る／＼から胸の悪い面がまへを見るものだ、松王を尻眼にかけて嘸鳴る、二人は車曳この方の意趣を持つてゐるのだ、

「梅王に當てこすられ、松王丸は一徹短慮」

嚇つとした松王は、忽ち大聲で梅王と口争ひ、果ては刀に手をさへかけた、女房共は恟りして各々夫に廻りついて、賀の祝ひ日に双物三味もあるまいと止める、兩人は大小を女房に渡して、兩人を門口へ出し錠をおろして立向つた、梅王は不意に松王を縁から蹴落した。

「やい、汝お兄い様を足蹴にさらしたナー」と梅王の足をかいて突落す、兩人は角力風の立廻りになり、各々肌をぬいでキツと見得になつた、門口では女房の困つた顔、聲をかけて止めるけれども二人の耳には入りさうもない、梅王は土間に積んだ米俵に手をかけて一つ兩手に差上げて松王に打つてかゝつた松王も俵を掴んで振りかざすなど、目まぐるしき立廻り、梅王の打かゝる俵を松王が外した、はづみをくつて梅王はよろ／＼と上手へよろけて、櫻の木にぶつかると枝は折れた、二人ははつとした、折から白太夫が戻つて来た

の女房の聲で、二人は恟り俵を捨て錠を外して一同内へ入つて改まつた様子で白太夫を迎へる、松王と梅王は秘藏の櫻を折つたことは互ひに罪をなすりつけて譲らない。

「年は取つてもこわいは親、上へも上がらず大つくばい……」

白太夫が八重をつれて内に入る、二人は可憐に禮をして祝儀をのべた。

「祝儀をのべても赤面し、塵をひねらぬばかりなり、親はほや／＼機嫌顔

ゆえ、今日の祝儀もサラリとすむだ、……白太夫は二重へ上つて櫻の枝の折れたのを見てぎくりと胸をつかれた面持、ツと納戸口をのぞいて思入れ、ぢつとなる。御祝儀濟んだ上にはと、梅王、松王兩人は懷中から一通の願書を白太夫に差出した。

「ハ、心安いは親兄弟、夫婦と云ふぢやないか、こう並んだ内、願があらば口ではいいてきつとした此願ひ書、さらば俺も代官所の格でさばいて見やう」と手に取りあげた。白太夫は二通を讀み終つて、二人を見下ろした、梅王の願ひ菅相丞の配所へ奉公に行く事は、白太夫頑として許さない、いざり奉公

なら年寄りがる、後に残つてお在てになる御臺や若君の在家を尋ねて、御用に立つ所存をせいと、腹立たしい聲で叱りつけた、松王が勘當受けたい願は、神武以來珍らしい願ひぢや、勘當すれば自分も菅家に忠義が立つと白太夫は聞届けた、譯を知らぬ千代は餘りの事に途方に暮れた、白太夫に取入らうとしたが、白太夫は眼もくれぬ、松王も猶更である、「菅相丞のゆかりのやつらに物いゝかわすと身の穢れ、松王様の出世なさるを見て、親父め物ねだりにうせおるな、随分共に長生きして」と親の顔をじつと……

「エ、勝手にさらせ」と白太夫が持つた箒をグイと突つ、白太夫はよろ／＼とするを千代はそばへ寄らうとした、松王は千代を引戻して門口へ突やり、思入れあつて揚幕へ入る。

「跡に一人取りのこされ八重が身の仕舞もつかぬ物思ひ、門に立ちそい待つ夫……」

後の納戸口から刀を手に悄然と櫻丸が出て来る、櫻丸の一言で胸りした八重はバタバタと傍へ走りより、先刻からのいきさつにも出て来いで納戸に隠れてゐる譯を聞かしてくと云ふ、櫻丸は何んと答へていゝか言葉も

ない、白太夫は三寶に小脇差を乗せて悲しうに老の足弱さを見せ、櫻丸の前へ置いて用意よくば、とく／＼と急ぎ立てる、八重は又胸りして、死ぬ譯を問ふた。

「某が主人と申すも恐れ多き齋世の君様、百姓の倅なども菅相丞の御不憫を加えられ、烏帽子子になし下され、御恩は上なき樂地の勤め、勿體なくも御身近く召仕はれ、菅相丞の姫君とわりなき中の御文遣ひ仕おせたが仇となり、讒者の舌に御身の憂き名、終には叛逆といふ立てられ、菅原の御家没落。

「是非もなき次第なれば、宮姫君の御安堵を見届け義心を現はす我が生害」

「今朝早う爰まで来て右の段々、生きて居られぬ最期の願ひ、聞届けて腹切り刀親の手づから下されたわい、我に代つて御禮申し、死後の孝行頼むぞや。

「義を守る夫の詞……」

八重は聞いて、さう云ふ譯なら共に死なうが、親父さまに思案はないかと身をもだへて泣きくづれる。

「頼みも力も、おちばて、」

「下向すりやおれた櫻、定まる業とあきらめて腹切刀渡す親の心、思ひ切つておりや泣か

ぬ、そなたも泣くな／＼やい」口では強く云ふても白太夫は矢張り泣すにはゐられない、櫻丸は決心して、脇差を持つた、白太夫は介錯は親がすると取出したのは、鐘と槿木であつた。

「撞木を取つて打ならず、鐘もしどろに……」

「南無阿彌陀佛」念佛の聲と共に櫻丸は脇差を腹に突立てた、八重も夫の血刀で自害しやうとしたが、表から梅王夫婦が駆け入つてそれを止めた。

「片時も早く菅相丞様の御跡をしたい、鳥へおもむく現世の旅立、櫻丸が魂魄は未來へ旅立、此なきがら梅王夫婦頼むぞよ」

「八重が事まで、つど／＼に頼む詞の置みあげ、南無阿彌陀佛と笠打冠り西へ行旅千萬億土……」

白太夫は脚絆わらちに杖と傘で旅立ちの姿で立ちかけた、

「残る二本は梅王、松王三つ子の親の住所、來世に夫れと白太夫、佐太の社の舊跡も、神の恵みぞ知られけり

舞臺の人々は顔も得上げない、うれいの様三重にて……

——(幕)——

# 大森彦七

伊豫の國松山街道の山中、月の出には遅い三月二十五日あたりの間に浮んだ松明の光が二つ、上手には辻堂が夜霞の衣を着て突つ立つてゐる、松明の主一つは土地の代官菊間五郎太、もう一つは久米村の百姓共で、明朝未明から催される御堂で湊川の合戦に楠殿を討ち取つた剛の者、大森彦七が猿樂を舞ふといふのでそれを見んものと村を出かけた者だ、入りこねては残念だから殿様の供人として連れて呉れと百姓共は拜み倒した、五郎太は氣輕にそれを許してつれて行く事になつた。

二つの松明が上手へと消えりと、床の竹本がしづかに流れ出す。

「頭は北朝、建武三年春のくれ、二十五日の小夜更けて丑滿わたる深山路の辻堂の屏がスウ！と開いて、内から袷衣を並折に着た上臈姿の女性が現れて、今行つた菊間等の跡を見送つた。

「今も今とて道行く人の噂を聞きば、思ふにたがはず大森彦七、御堂の能に参るとて、此の道へはかゝるよな、その通りを待ちうけて、ふと額にかゝた鬼女の面が眼にとまる、女はその面を外して袂に包んで、病になやむ旅人と見せかけて突つ伏し倒れた。

「折しもこゝに道後の左衛門……」  
 騎馬の道後左衛門、前後に松明をかざした郎黨二人を引連れて舞臺へ來ると郎黨の一人は眼ざとも倒れてゐる女を見つけて、松明をつきつけた、左衛門も馬から飛び下りて女をたすけ起した。

「それなる女性、何人なれば唯一人、此の山中の真夜中に、かゝる所に居らるゝや」と不審さうに問ふた、女は尋ねらるゝまゝに、播磨路の者で亡き兩親の後世を弔ふ爲め、高野の大師に願をかけ、四國靈場巡禮の道すがらと答へたが、左衛門は中々に合點しない、言葉遣ひから容姿のあてやかさに、左衛門持つて生れた色好みがちらと現はれ出した、優しくも素性を明されよと問ひ訊すが、女は苦しむ辯解するばかり、左衛門はとうとう氣色を變へて威丈高になつた。

「女と思ひやさしく申せば、無禮の返答さう申すならば詮方ない、此の左衛門が引立て當

國伊豫の守護細川殿の檢斷所へ差出す、それ家來どもも引立てい」  
 主の命で郎黨共は荒々しく女を引立てやうとした。

「かゝる所へ伊豫の國の住人、大森彦七盛長、御堂の庭に急がんと、まだ夜深きに出で立ちて、道の露芝ふみ分けて、山路をたどり來りしが……」  
 松明を持つた家來を前に、後ろに裝束櫃を擔がせた従者をつれ竹本一つばいに舞臺にかゝる、彦七は行手を透かして見て立止まつた。

「それに在すは道後左衛門近信殿か」  
 「大森彦七盛長殿で御座るか」  
 と聲をかけたが彦七は不思議さうに女を見て、様子を開ふた、左衛門はぐつと反り身になつて南朝方の問者を召捕つたと大業に言つた、彦七は驚き顔に家來から松明を取つて、女の様子をじつと眺めた、女も彦七を凝つて見て息をのんだ、彦七は一寸思案の首を傾けたが、

「やあ和御寮は佳吉の神職津守の息女鈴姫殿よな、どうして當所へ來られた、盛長を尋ねてか、左様で御座らうが」  
 彦七は目醒せをした、さそくに女はそれをのみこんで頷いた。

彦七は左衛門に聞かると、通り某身奇りの者であるから、只今受取つて同道すると云つたが、左衛門は掌中の珠を取ると思ひ、心残りながら、後刻會はうと、漣々引取つて行く。女は彦七の前に手を突いて、救はれた禮を述べた。

常彌生の末の若葉だち、残んの花の白雲に、おぼろに見ゆる小夜中に、雲の脚さへむら立ちて、こだまに響く水の音

女をつれた大森彦七が先刻の人数で花道から出て来る、何日ない水勢の烈しさに、彦七は女性の身では徒歩渡りもなるまい、我背にかゝれとすゝめた、女は美含みながら彦七の背に掛つて、袷衣をふわりと頭から被つた竹へどうと、漲り落つる谷川の、流れを渡る折こそあれ、さつと吹き来る夜嵐

の空にきらめく北斗の光り……女は先刻辻堂から持つて来た鬼女の面をかぶつてすつくと立ち、懷劍を抜いて逆手に握つた、その恐ろしい鬼女の形相に家來共は「アッ」と叫んで松明を捨て、裝束櫃を置き放して逃げて行つた。

「おのれ曲者た彦七は叫んで扇子を構へた父上の敵、まつた菊水の寶劍を奪ひ取つた大森彦七、そこ動くな今まで素性を包んでゐるが女は楠の息女千早姫である、遮二

無二斬り込んで来るのを彦七は身を交はしてとうく、姫の腕を振ち上げて、名を名乗れ、仔細を語れと、鋭く姫を見据えたが、姫は唯首打てとばかり今は觀念の様子である。彦七は思ひ當ることあるらしく、楠判官正成の息女千早姫であらうと、姫の健氣なる心を感じ入つて、湊川の合戦の有様、正成の最期の模様をつぶさに物語つて、寶劍菊水は尊氏より預つて守護してゐるが、御身の孝に感じて改めて寶劍を譲らうと言つた、姫は寶劍を譲つて貰つて萬一咎めがあつたらと辭退した。

「その辭退無用々々、幸ひなるそれなる面、正成殿の怨靈惡鬼となつて奪ひしと、世上に沙汰なさんに何の、難き事やらん」と彦七は寶劍を姫に差しつけ、裝束櫃に目をつけて猿樂に用ゆる裝束、之れ幸ひ、早速着用して此場を去られよ、と内から鹿織を取り出した常彌、忝けなしと身にまとひ、曉近き明星

の、きらめく光りにテラテラ、見え隠れつ、悪鬼の姿……姫は彦七に厚く禮して、悪鬼の様に揚幕へ。

彦七は見送つて、流石は楠家の姫君なり、男子も及ばぬ御氣象……と感歎の思ひ入れ、大森殿大森殿と遙かに人の呼ばる聲、はつと驚いて彦七は後前を見廻したが隠れる

場所がないのでそのまゝ地に俯伏した。上手から道後左衛門、馬上に薙刀掛い込んで駆けつけて来た、加勢を頼みに行つたものと見え彦七の従者諸共に松明をかざして来た左衛門は馬上から飛び下りて彦七を抱き起した、彦七は扶け起されるとそのまゝ、活と眼を開いて虚空を覗んだ。

「汝れ、正成此寶劍に熱心のこり鬼女となつて奪はんとな、我も名に負ふ大森彦七盛長なるぞ、やわか汝に渡さうや」と左衛門を睨めつけた、左衛門は呆氣に取られて茫然突つ立たまゝだ、彦七はガラリと變つて足拍子面白く常磐津、竹本の懸合ひでつくり狂人の踊となつた、果ては左衛門祕藏の馬の口を取つて鞍上に跨つた。

「やあ卑怯なり正成、寶劍奪つて逃げ去らんとは汚なき振舞ひ、返せ、もどせ……」竹へ返せ戻せと、さし招き、何れをあてと白眞弓、矢聲を掛けて……、

さつと扇を開いて、虚空を招く、馬は足並揃えて一躍り、其儘後をも見ず花道を駆け行つた。

大森彦七 幸四郎  
道後左衛門 幸藏  
息女千早姫 宗十郎



# 顔見世狂言雜俎

渥美清太郎

盛綱

東京の芝居は楽になると、可成り打出し時間が早くなる。道具の整頓にも依るのだらうが、一つは俳優の役が手に入り過ぎて、テンポが早くなり過ぎる爲でもある。鴈治郎の芝居はさうではないやうだ。鴈治郎が樂の日にチヨボに誂へを出したといふ話を聞いて、非常に感心したものである。それほど鴈治郎は役に熱心である。また紙治のやうに、何十遍と出した狂言でも、必らず一二ヶ所は新工風をすると自身で云つてゐる。それほど鴈治郎は藝に熱心である。盛綱も鴈治郎が何十遍と手がける部であらう。然らば今度はどうか注進受けを出して欲しい。鴈治郎が注進受けをいつもクツてしまふには、何か確乎たる信念があるのであらう。

うが、注進受けは何と云うても大切な箇所だ。盛綱の役そのものにとつてよりも曲全體から見て抜くべき箇所ではない。今度は注進受けに新しい工風を試みて我々の切望を充して欲しい。

お夏狂亂

あの幕切れ、老いたる順禮夫婦の現はれる淋しい幕切れには、何度見ても、憾に打たれる。順禮夫婦は大切な役であるところを、これをやる役者が近頃は大分下落して來てゐる。初演には、菊四郎と女房は慥か梅昇だつたらうか。菊四郎のあの形、初めて見た所爲か、今でも眼に残つてゐる。

誓

幸四郎のやる「誓」は、いつも團十郎

最終の、大福帳のそれである。あれは「誓」のエッセンス見たいな臺本で、流石櫻痴居士がアレセンスしたゞけ、「誓」の要素は大部分集めてあるが、ユーモアの味は大分稀薄になつてゐる。これは團十郎自身の好みから來たものであらう。併し、「誓」は、一面から見れば一種の喜劇と云つてよろしい。武士階級が町人に翻弄される喜劇と見てもいい。だらう。喜劇だから笑はせろと云ふではないが、「誓」には、もつとユーモアの味を出すべきだと思ふ。「誓」の脚本は、今でも何十種と残存してゐる。その中から選擇して、いつか變つた種もやつてもらひたいと思ふ。「誓」は苦虫を噛みつぶしたやうな顔をして、演つたり觀たりする狂言ではないのである。

賀の祝

「賀の祝」だけ離して上演するのは、ほんの近頃の事なんだから、昔ではやりたくともやれなかつたものである。千代と櫻丸を變つたのは四代目菊之丞である。五代目菊之丞は梅王と千代を變つた。どんな變り方をしたかは知らぬが、名人小團次は白太夫と八重を二役やつたさうである。併し、松王と櫻丸の早變りは珍しい。今度の觀ものであらう。

大森彦七

「勸進帳」は七代目團十郎の創始したものが、大成したのは九代目團十郎である。同時に「大森彦七」は、九代目團十郎が創始して、幸四郎が大成したものである。高麗家十八番と稱してもいふ譯だ。今度は幸四郎の使ひ方の巧いのが特に目に立つ。

十一月の歌舞伎座でやつた「住吉物狂」は、「大森彦七」の原作であるが、その原作が舞臺へ出たのを見ると、櫻痴居士の改作の仕方、巧いのが、今さら變に際立つて見えた。

船辨慶

わたしは、いつもこの長唄に感心してゐる前に勝三郎の「船辨慶」といふ立派なものが出てゐるのに、更にこれを作曲した三代目正次郎に感心してゐる。靜の舞の「都の四季」は彼れの傑作である。大體が謡曲通りで、この舞の間だけが默阿彌の創作といふ譯だが、斯うしたものになると默阿彌の作はいつと同じやうでその點は不感服である。默阿彌は初代櫻田治助の系統を引いた、寫實劇の大成者だが、舞踊劇にかけては、治助に遠く及ばない。

紙治

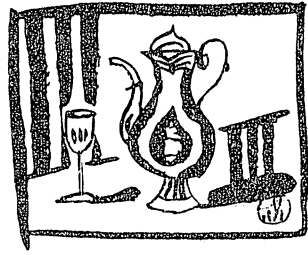
技神に入ると云つてもいゝのは鷹治郎の河庄である。中車の孫右衛門は、まだそこまでゆかない。誰も云ふ事だが、侍に扮してゐる間が、いつ見ても本當の侍のやうである。「權三助十」の家主は、彌太五郎源七のやうだつた。

昔の作者は、舞踊劇の材料を狂言に仰ぐのに、茲まで碎いたものだつた。これが本當だと思ふ。従つて、この踊を、猿曳を狂言師仕立でゆくやり方は純粹ではないやうに思ふ。松羽月に變る朱の玉垣と梅の釣枝うつほ猿は本當の歌舞伎の踊だ。

大坂にあつた顔見世資料 (二)

ほめ言葉  
— 南木萍水 —  
舞臺歪がすむとヒイキ連(代表者)と座本、役者が打まじつて大判成と稱する歪事を催すこの時頭取が一座の役者衆の爲めにほめ言葉と稱する御祝儀を述べます内容は立物などの名前をつらねて章句となした所謂一座禮讚のほめ言葉で、年々文句に趣向を凝したものです。





# 「歌舞伎國」と泥靴

## 顔見世の情調を讃仰しつゝ

富田泰彦

「私達は、永遠に歌舞伎の世界を讃仰する者である」——此の言葉は、前提でもあり、而して結論でもある。

所謂新劇なるものが、盛んとなり、歌舞伎が減じて終ふべき運命にあるか、私はソンの易者見たいな議論に、こたわつてゐる。新舊演劇の對立的な、消長などを氣にしてゐる場合ではあるまいぢやないか……？。

「政治は力なり」と云つたのは、原敬？だつたと記憶する。しからば「演劇は藝なり」とでも云つて置かう。藝術は善である——そして悪の影像でもある場合はあつても、表現の効果的に、より前者の方が、勝つてゐることは否まれない。取り分け

歌舞伎に於ては、その例を擧ぐるの煩に堪えない位のものだ。

私達は、歌舞伎の藝術至上主義を強調する者である。チレット・タントとしての嘲笑も甘んじて受けよう。劇場の舞臺は、飽迄も藝術の桃源境にして置かうぢやありませんか……。

今の「階級闘争意識」は、斯うした桃源境をも、泥靴で踏みぢるように、闖入して来た。何んと諸君慨嘆すべき現象ではないか「暫」のツラネも「紙治」の幻想も、今やナツプの一味の文士達の手によつて破壊されようと云ふ危機にあるのだ。

彼等の文字若しくは演劇への藝術運動のスローガンは、「プロ

レタリヤ作家は、何よりも先づ明確なる階級的觀點を獲得しなければならぬ。明確なる階級的觀點を獲得することは畢竟戰鬥的プロレタリアートの立場に立つことである……」との觀念の下に行進をつとげつゝある。

× また、プロ文士の一人は云ふ「歌舞伎は既に滅びつゝあり、その思想的に於ては勿論、その趣味嗜好の上から云ふも、現生活には全く無關心である。我々の演劇は、現實のまゝを我々の主觀を透して、何等粉飾することなく表現し得るからである……」と云ふのである。

× 等、等、等、議論は多々ある。要するに劇壇の左傾思想潜入と云ふことは、政治的に見ることは、暫く措きて、是れを一つの藝術術として、考察して見る場合に、果して一般觀客に享け容れられるや否や、頗る疑問とせざるを得ない。

× その反證として、先づ彼等の言葉を擧げよう、「歌舞伎の生命は形式美だけである」と、——私達は思ふ形式美を認める以上は、さう歌舞伎の生命は乏しいものでないと思つたい。形式美とは、一つの概念である。その傳統藝術として育まれて来た概念こそ、實に我國民性ではなからうか、南畫の一點一線、四

條派の綉彩——皆抽象觀念からの美的認識である。恐らく我國民性の没却されざる以上は、未だ「傳統の力」を信じて可いと思ふ。

× 勿論演劇には、幾多の形式のあることは、認めるとして、果して今日提供されつゝあるプロレタリア演劇に、何れだけの藝術的潤ひを持つてゐるだらうか、——その筋に於て、その主題に於て、その演技に於て、彼等の舞臺構想から、眞に心からなる歡びある感激の聲を上げることが出来るであらうか、要するにプロ演劇としては、未だ消化されざる不純さを多分に持つてゐるが爲めではあるまいか、脚本のプロットとして階級闘争を扱ふのも可い。だが今日の如くナマなものでは不可なり。先づ國民性を基調とすることを忘れてはならない。その表現に於ても、もつと洗練された「藝術的價值」を認めさせねばならないと思ふ。

× 歌舞伎十八番の「助六」を見るまでもなく、町人が武家階級に反抗する筋は、幾位もある。「磔茂左衛門」が許されなくとも、宗吾大明神として祀らるゝ處の「佐倉の囃」に對して、如何な官憲も干渉しようとはしまし。要するに是れ等は、國民性を對照し、修辭的な演出を見せてゐるからではあるまいか。

私の頭腦は、餘りに保守的であると笑はゞ笑へ、一躰我國の演劇は、その脚本の持つ思想的迫力に、徒らに興奮するよりも俳優を中心として發達して來た、歌舞伎の國の、何等こだわりのない美しい舞臺氣の裡に、浸り得ることは、何れだけ幸福なのか知れない。

俳優中心主義と云へば、今度の顔見世ほど、當代の名優と、歌舞伎狂言の範疇とを示すものとして、申分のない條件が具備されてゐると思ふ。——と斯う筆を進めて行くと、何んだか「ミツワ文學」染た落になつたが、實際顔見世の情調ほど今も昔も懐しいものがない。

イヤ、高速度時代の、イヤ、モダニズムの尖端を行くのと恰で現代人は曲馬團の一役を引き受けてゐるやうな神經ばかりを譯なく苛立して、たゞ慌しい生活を送らねばならぬ時、宛然貞享、元祿の昔に返した届托のない長閑な顔見世情調に、泌々と一日を浸ることが出来るのである。

血みどろの鬭争のみに、餘儀なく生活を續けて行かねばなら

ないほどの險しい現世相に、直面しつゝある私達に取つては寔に歌舞伎の持つ醍醐味に、寛きある生活を見出すことの出来る機縁を、いつくまでも續けたく、また續けて行かねばならぬことだと思ふ。

見果てぬ歌舞伎の夢——。

それを支持するは、お互ひ國民の責務であらう。折角傳統藝術として、史的生命を持つ、歌舞伎を、殊更ハンマーの一撃をくつて崩壊させて終ふことはなからうぢやないか、藝術至上主義」を是認する諸君ならば、必らず歌舞伎の價値に、恒久性あることは、信じて貰ふことが出来るよう、さうして俳優中心に、發達して來た演技ならば、更に將來に幾多の天才も出ようではないか。——諸君、徒らに悲觀は止めませう、たゞ歌舞伎の形式美を生命とする以上は、如何なる時代が來ようとも、何かの形式に依つて歌舞伎は保存されるものである。

さうして再び繰り返す、「私達は、永遠に歌舞伎の世界を讃仰する者である」と、この言葉は即ち、本稿の前提でもあり、而して結論でもある。(四、一一、二二)

# 『船辨慶』のこと

## 河竹繁俊

○  
新歌舞伎十八番の一つである、この「船辨慶」の書きおろしは、東京の新富座でありまして、明治十八年十一月のことでした。

材料となつたものは、能の船辨慶でありまして、筋もそつくりで、詞章にも似通つた所があります。どなたも御承知のこと、は存じますが、義経が平家討滅の後兄頼朝と不和になり、西國に走り、攝津の大物の浦から乗船せんとするに際し、妾静を送り返し、船出の後知盛の靈が顯はれ、海中に引入れようとすると、武藏坊辨慶が法力を以て退散せしむるとい

ふ筋のものであります。九代目團十郎が静御前と知盛の亡靈に扮し、先代左團次が武藏坊辨慶を、中村芝翫が三保大夫といふ船頭を、市川海老蔵が義経を、それ〇〇勤めたのであります。

○  
作者は黙阿彌で明治十八年ですから、七十一歳の時です。作曲者は當時長唄界の鬼才杵屋正次郎、振附は先代花柳壽輔といふことになつてゐました。そこで演出者が九代目といふのですから、當時東京劇壇の第一人者によつて成されたものだといつてもよいのですから、頗る好評でありましたが、所謂本行物——活歴式

の濫い、凝つた行き方のものでしたから一般民衆の喝采を博するといふわけには至らなかつたらしい。

○  
同じ新歌舞伎十八番の中の「紅葉狩」とか、新古演劇十種の「土蜘蛛」など、その作風から言つても、藝風から言つても、能樂から材料を仰いでゐる上から言つても、全く傾向を等しくしてゐるものです。

○  
明治の前半期を風靡したと言つてもいい、「高尚がり」を多分に攝取して生れたものであります。

○  
今度京都の顔見世には、尾上梅幸丈が上演するさうですが、度々手に掛けたお得意のものだけに、立派なことであらうと考へます。  
殊に久しく見ませんから、機會さへ得られたら、静の舞の件だけでも見學に行きたいと思ふくらゐです。





「アイ私しや持病の痲が起つて……」

とつじをまぎらす、小春はさう云つて三五郎に返事するより他にすべがなかつた。三五郎はそれを眞に受けて、

「ではわたしが、脊でもさすつて上げませうか」

脊中の上に手を持つて来る三五郎の親切をそれらして、それを断る小春であつた。

「私は此處に居て旦那に見つけられたら、いかん故早う返事を書いておくはなれ」

無理もない三五郎の云状、小春は帳場の中へ這入り手紙を書く。

遠近に鳴り響く賑やかなさわぎの音が聞へて来る。三五郎はうつゝのやうにその音のする方に耳をかけた。

「三五郎さん大きに待たせました、もう書けましたわいなア、此の手紙は大事な文ぢや故誰にも見せぬやうにして下さいな」

小春の言葉呑み込んで三五郎、紙につゝむだ何時もの駄賃の利薬「おまけに」と云ふを押へて小春は守袋を出して同じやうに三五郎の手に握らした。三五郎は委細心得顔に足のはこびも軽く表へ飛び出した。小春はほつ

としたやうにその後を見送つたが……?

「治兵衛さんの身の上を案じ暮しての此文、

お氣の毒やら悲しいやら、よく切ないお心はお察し申しますわいなア」

聲も落して涙聲、切なる思ひに身を苛める「小春さん爰に居やしませんしたか、追ツつけ旦那も見へます程に緩くり遊んで居て下さいな」

常から優しくして呉れる河内屋のお庄が、さう云ふて小春の重くたれこめた胸の中を拂ひのけるやうに云つて此方へとこまねいたのであつた。

此度意地張りからでも小春を身受けすると云ふ江戸屋太兵衛の語がお庄の口から小春に傳へられた。日頃から蟲の好かない太兵衛に身受けされる事は小春に取つてどれ程辛い事であつたか知れなかつた。二人の話を外に立聞きする二人連れ、それは當の本人江戸屋太兵衛と、五貫屋善六であつた。そんな事とは知らずに内らでは猶も二人は太兵衛の事を悪口してゐたのであつた。二人はその話を聞いて、互ひに顔を見合せた。

「オイお庄やん、油蟲さつきから表で何も彼も聞いてゐたぜ」

「ごまかぶりも一緒にやぜ」

聲にお庄は恟とした。小春も共に驚いた。

「小判の光で俺の女房にして見せるのぢや」

太兵衛はいま／＼しさうにお庄と小春を睨みつけて、その腹いせにさう云つてのけた。

相手が何かにつけて無愛想にされ／＼ばされる程彼等は又意地悪くこね廻すのであつた。

元々太兵衛がぞつこん惚れ込んだ小春ではあつたのだ。それ故紙屋治兵衛との仲を知れば知る程太兵衛はそれに何處／＼までも反駁して行つたのであつた。

治兵衛を嘲弄する諷刺の願に合せて踊る太兵衛もせめてのそれが腹癒せとしたに相違はなかつた。最前からの事の總てを立聞きする兄粉屋孫右衛門も又弟故に人の端に乗る悪評も黙つて耳にしなければならぬはめを嘆じたのであつた。

「紙屑が来た、／＼さう云て二人が孫右衛門の傍に進み寄つた。

「サア紙屑金返せ／＼」と孫右衛門は笑止らし／＼二人を覗みつけた。

「身共を何と致すのぢや、此大小が目にかゝらぬか、いろ／＼の痲けもあれば、有るものぢやアハ……」

二人は今更に己が視覚を疑つて狼狽して逃ぐるを孫右衛門は見送つて嗤笑した。

「お、旦那様でムりましたか、先程からお待ち申しておりました」

お庄の愛想のよい、いこひに迎へられて孫右衛門は部屋に這入つた。

孫右衛門は今更のやうに泣々と小春を打見守つたのであつた。成程治兵衛が女房子供を打忘れて小春に幻を抜かすのも無理はないと思つた。

小春も又孫右衛門の様子を一目見たその時から様子あるものと思つてゐた。

「先刻から一言の挨拶もなく、俯向いて計り居らるゝが、チトものを云はつしやれ、コレ小春どの」

孫右衛門は始終黙つてゐる小春をさう云つて話の糸口を見出さうとつとめた。

「十夜の内に死者は佛になりたいと云ひますが、そんでムんすか」

小春は改まつたやうにさう孫右衛門に聞き糺した。

小春は死に對する手段を猶も孫右衛門に聞き糺すのであつた。孫右衛門はそんな小春の間に對して氣味悪く感じられた。

お庄も二人の始終の話を聞いてゐたが、孫右衛門の様子に氣がついてか、そんな事を聞き糺す小春を制したのであつた、そして今宵隣座敷に淨るりがあるゆへ奥へ參つて一口召上り乍ら淨るりを聞いては如何でういませう

かと、其場の成行をつくるやうに云つた。孫右衛門も今の場合その方に轉じる方が上分別と、小春と共に奥座敷へお庄の招するまゝに招かれたのであつた。

治兵衛はかねて小春と約せし心中の今宵に迫るを、ひそかに頼冠りに面體をかくし河庄の表へ忍びよつたのであつたツ。ト後振返つて、

「今、向ふの養賢屋で顔は見えねど、普六太兵衛高聲あげて小春が噂、待客河庄方」

とがひに動くばかりに聲聞こへず。治兵衛はそつと格子越に中を覗いて、

「アレ、小春が灯火にそむけた顔のアノマア瘦た事わいのう、何かの事をヲ、苦に病んで

爰に居ると吹き込んで

治兵衛は自分を知らせたい一心に思はず手をたたく。

心で招く氣が先へ、身は空煙の抜柄と、格子に抱き付あせり泣き、奥に

は客の聲として  
「ア、思ひの有る女郎衆のおかげで、ほつたりと氣が目入つた、表へ出て行燈でも見て氣を晴らさう、サ、小春來やれ」

孫右衛門はさう云つて、小春を連れて出て來る。

「最明からの素振り、詞の端と云ひ、その紙治とやらいふ男と心中する心、よしやそれに違ひあるまい、死神のついたそちの耳へは意見も道理も這入るまい、さりとは悪いが管先」

の男の無分別からそれは云ふものゝそれに連れそう女房始め一家親類皆そちを恨み憎しむ親は無いか知らねども、モン有らば不幸の罪一夜乍も侍の役、どうも見殺しにもなるまい、定めし金づく、そりや五兩や十兩の事なれば用立ても助けてやりたい、何と死ぬる覺悟に相違あるまい、侍冥利他言は致さぬ、心底残らず打明きやれ、ヤレサ小春どの」

孫右衛門の言葉に小春はそれをそらす事は出来なかつた。

「有難うムんす、思ひ内にあれば色外にあらわるゝ、成程お前の推量の通り紙治さんとは死ぬる約束、元はと云へば身受けの張り合、南の元の親分と爰とにまだ五年の内、人手に取られては私は元より、主は尙の一分立たず、いつそ死んで呉れぬか。アイ死にませうと引くに引かれぬ義理づくめに、ふつと云ひ交し首尾を見合せ合圖を定め、モウ抜けて出やう」と、いつ何時を最後ともその日送

りのあへない命、ほんの事は死にとむない第一私とても命は一つ、水くさい女ぢやと思召も、はづかし乍ら死なずに事の濟むよぶにどうぞお前をたのみます」

小春はさう云つて孫右衛門に總てを打明けたのであつた。孫右衛門もうなづいた、外にそれを聞いてゐた治兵衛は

「ナニ、そんなら死ぬるといふたはアリヤ皆嘘だつたのか、三年此方欺つききつたアノ野狐め、いつその事踏込んで腹癒しようか」

治兵衛は小春の心中立を今更分つたやうに欺されてゐたと云ふ意識に激怒を感じて、自分の今迄の愚劣さ悔めさを返り見ずにはゐられなかつた。

小春は猶も孫右衛門に頼むのであつた。

「どうか今年申分に合ふて下さんして、あの人の來る度に邪覺になつて期をのぼして下さんしたら、先も殺さず私も助かる道理、何の因果で死ぬる約束をした事ぞ、思へば悔やしいひよんな事をしたわいなア」

口と心は裏表、絞る秋は雨露の

小春は無氣にもない陳狀を云はねばならぬ我身の苦衷に泣いた。治兵衛はそれを表に聞いて只一途に女の心變りを恨むのであつた。そして思はず腰の一刀を障子越しに中へ突込

むのであつた。孫右衛門はすかさずそれを格子にくゝりつけ、そして小春を奥へ促したのであつた。其處へほろ酔ひ機嫌で善六太兵衛がぶらりとやつて來て、治兵衛のその様を見つける。そして今に貸してあつた二十兩の金を返せとせがむだ、その上盗人だと放言したので、大勢の者が出て來てきんぎんに治兵衛を打擲する、孫右衛門は見るに見兼ねて表へ飛出して二人の前に二十兩の金をたゝきつけてその證文を引裂いたのであつた。

親切に餘りある孫右衛門の態度に治兵衛は深く感謝したのであつた、けれど頭巾を取つたその人は現在の自分の兄だつたので今更の様に吃驚したのであつた。

治兵衛と小春の對面にさすがに意味深きものがあつた。夢にだに思ひ得なかつた愛しき女から今先のあの愛想づかし、治兵衛は總てを改悔と憎惡の念に淋しくあきらめなければならなかつた、小春にしても又その通りであつた。此の人の義理と人情にからまる今の自分の宿命に如何に涙しなくてはならなかつたか。治兵衛は小春の様子あるべき心中を知る事の出来ない所に、より一層小春に取つて切々なるものがあつたのである。兄の前に絶縁を誓ふ治兵衛の懐中より差出す、互ひに變ら

じと先の世までの堅い約束の起證文三十枚——守袋に互ひの厚い情愛も、とけて恐しくもほつれなければならなかつたのであつた。

小春が守袋に密めた三十枚の起證文、それと共に表出たる紙屋内よりの最前の手紙、孫右衛門には其時判つきりと小春の心意を見抜く事が出來たのであつた。情愛こめしその幾年月、今日心ならずも別れゆく果敢なきを其時二人どうして感知し得たであらう、あきらめやうとしてもきらめる事の至難な戀情に

られる治兵衛は、別れる間際にもせめてもの男の張りを小春に云つてのけたかつた。

「コリヤ小春、最前云ふた事を覚えてゐるかおのれのような奴は」

思はず振り上げるこぶしの下、小春は思ひつまつて

「もういつそ……」——「コレ」孫右衛門の鏡い言葉に、小春はハツと其の場に泣き伏す。

ハツとばかりに泣き別れ、歸る姿もいたましく、跡を見送り聲を上げ、

歎く小春もむごらしき、不心中か心中か、誠の心は女房の、その一筆の奥ふかく、涯がえも見ぬ戀の道、わ

かれてこそは……  
今に残る河庄の——

# 梅幸のお夏狂亂

中内蝶 一一

長唄の所作事や淨瑠璃舞踊の數多い中でも、一番むつかしいのは、何と云つても狂亂物です。

狂亂物の舞踊を見て、これまでは是れはと感心したものはいくらもありません。それは、狂亂を演じてゐる俳優自身が狂人になりきつてゐないからであります。と云つて、舞臺で本當に氣ちがひにならなくては困りますが、私の云ふのは、如何にも人間の本性を失つてゐる、氣の毒な、哀れな氣ちがひらしい感じを舞臺にあらはす俳優が、少いと云ふ意味なのです。云ひ換へれば、大抵の役者は、たゞ狂人の眞似をしてゐるだけだと云ふことになりまゝ。變に眼を据えて、首を曲線的に動かして見たり頓興な聲を出して笑つてみたり、その狂人らしく見せやうとする形なり。科なりが、持つて來てくつ付けたやうで、さも狂人を粧うてゐると云ふ風に見えるものが多いやうですが、それでは、狂亂と云ふ舞踊ではなくて、僞氣ちがひの踊と云ふことになりまゝです。そこで、繪畫美も、深刻味も乏しいと云ふことになるのであります。

九代目團十郎だとか、五代目菊五郎だとか、最早故人となつた名優は別として、現在の俳優の演じた所謂狂亂物の中で、私の巧い、面白いと思つたのは、梅幸の「お夏狂亂」と、菊五郎の「保名」とであります。

もつとも、菊五郎の「保名」は、さす手、引く手の型よりも氣分と味と云ふことに重きを置いてゐるので、古典的歌舞伎舞踊の本質からは大分掛け離れてゐるやしないかとの説もあります。菊五郎にはまた菊五郎の藝術家として主張がありませう。

さうして、文字通りに見物を魅してゐることは事實であります。梅幸の「お夏狂亂」は、何處までも古典的歌舞伎劇の約束と味とを失はないやうにと努めてゐます。と、同時に、狂人の心持を何う云ふ風にはさうかと云ふことに努力してゐます。

この人の狂亂は、單に形ばかりの狂亂ではありません。又氣分本位の狂亂でもありません。動いてゐる間の跡のこなしと指す手引く手、それが如何にもなごやかに美しく整つてゐて、同時に深刻味のあるしほらしい内容が柔かに流れ出て來る。随つて表情に無理がない。本統にいちらしい狂人になりきつて、僞狂人がらしい不純なわだかまりのない、醇化された狂亂舞踊となつて舞臺に展開されてゐるのであります。

梅幸の「お夏狂亂」は、初演以來好評の出し物であります。私も幾たびか其舞臺を見ましたが、見るたびに益々洗練されて梅幸のお夏か、お夏の梅幸かと云はるゝまでに、この優の持役

となつてしまひました。

「お夏狂亂」の面白いのは、坪内博士の脚色と作詞のうまさもありませう。又常磐津の作曲のうまさもありませう。併しそれを更に一層面白く見せてゐるのは、お夏に扮する梅幸の頭腦のよさと、その歌舞伎芝居の藝のうまさとが、與つて最も力があると思ひます。

梅幸の他に「お夏狂亂」を演じたものは、東京でも二人や三人はあります。その人たちの舞臺を見ましたが、やはり僞氣ちがひの舞踊になりました。梅幸の摸倣になりました。さうして本統に生きたお夏の狂亂を見せたものはありませんでした。

狂亂の役に成功するか仕ないかは、初めて舞臺にあらはれた刹那の第一印象で、大概はわかるものです。梅幸のお夏が納手拭を地に引きずりながら花道からあらはれた時の、一と目見た感じで、この優は立派に狂亂の舞踊を演ずるな！と云ふことがもう頷かる、ではありませんか。

このお夏の狂亂を、淋しく哀れに、しつとりと見せる爲には作その物としても色々な舞臺技巧が施されてあります。たとへば、最初の里の童の遊びにしても、中途の酔つばらひの馬士の踊にしても、更に最後の順禮の老夫婦のからみにしても、お夏の雰囲気をつくるため、また情景を添へるためには、からみの人物を上手に使つてあります。

里の童たちは、あれで仲々儲かる役に出来てゐますが、お夏

が登場するまでのあの賑やかな踊りが、少しく長過ぎはしないでせうか、この子役たちはあれだけで引込むのではなくて、お夏からんで清十郎もどきの色々な悪戯の科があるのですから前の踊りはもう少し端折つたらよからうと思ひます。

賑やかな童の踊から、お夏のしつとりとした踊り、それが引込むと酔つばらひ馬士の出になつて、陽氣な、浮々とした踊になる。これは所作事や淨瑠璃によくある舞臺技巧ですが、初演の時、この馬士に扮した幸四郎も實にうまいものでした。今度の舞臺にも、やはり幸四郎が附合ふこと、思ひますが、「お夏狂亂」は、梅幸のお夏と幸四郎の馬士によつて、舞臺が大きく見える心地がするのです。この兩優の他の人たちによつて演ぜられた「お夏狂亂」は、何んだか舞臺の小さな感じがして仕様がありませんでした。

最後の幕切れに出る老いたる順禮夫婦、これはお夏の雰囲気を哀れに淋しいものにする爲に、何んとも云へない好い情景であります。その老順禮の出方や、からみ方に就いて、その後色々と變つた技巧が加へられました。私は初演の時のあの松原の間に見ゆる順禮が、一番趣があつたやうに思はれてなりません。

その順禮に扮する俳優も、やはり初演の時の松助と菊十郎？が、一番うまかつたやうに思ひます。

(昭和四年十一月十八日)

# 「暫」の内の容

田 倉 ◆◆

吉例京の顔見世に鷹治郎の「盛綱」、幸四郎の「大森彦七」、梅幸の「船辨慶」や「お夏狂亂」とともに、歌舞伎十八番の「暫」が出るこの「暫」、こそ好劇家の観劇慾をそよるに足るもので、先般中座で上演した時も、異常な好評を博した。

いふまでもなく幸四郎得意の市川流の荒事であり、師匠堀越園洲ゆづりの家宿な藝風を傳承する點において、「勸進帳」の辨慶と、ともに、恐らく當代無雙と稱すべきものがあらう

しかも辨慶は幸四郎以外に故段四郎の可能なり逸品であつたし、現代では羽左衛門もやれば菊五郎もやつて幸四郎ほどの豪宕味には乏しいが、それ／＼特色を具へてゐるけれども、「暫」だけは關十郎以來、幸四郎の獨壇場となつてゐる。

私はこの「暫」といふ狂言は、歌舞伎十八番の内でも、殊に面白い痛快味に富んだもので、好きな芝居の一つに數へることが能きこの作の年代記的研究は、既に先輩諸家によつて盡されてゐるから省略するが、その内容の點のみから言ふと、元祿時代に於ける新興階級としての町人が、特權階級である武士に對して虹霓の氣を吐く、その痛快なところが何よりも愉快である。

この「暫」を世話に酔つた内容をもつのが「助六」である。「助六」の主人公は花川戸の助六實は曾我五郎時政となつてゐるが、彼の氣焰はあくまで市井の遊使の徒の啖阿でこれを武士階級の代表者としての、擧の意休へ投げつけるのである。

ところが「暫」の主人公鎌倉權五郎景政は、その姿こそ大太刀を佩いて、公卿の清原武衡に向つて萬丈の氣を吐くのであるが、その實權五郎は助六と等しくちやき／＼の江戸ツ子である。

花道のつらねや大福帳の言ひ立ての如きは當にこれべらんめえの俠客の如くである。してみると、權五郎も亦當時の新興階級の町人

が武士の形を借りて、特權階級の公卿姿に身をやつした清原武衡といふ武士に對して、反抗的精神を表現したものだと思はれる。だからと思はれる。

即ち當時の芝居見物の多くは町人階級によつて代表されたものであるから、彼等は意識的にも無意識にも、かうした舞臺を見てやんやと喝采を送つたのであらう。

こんな風に解釋して「暫」を見ると、この芝居は今日の言葉で言へばたしかにプロレタリア劇であり、プロレタリアの勝利を謳歌したものである。

この意味から考へても「暫」は随分面白い芝居ではなからうか。勿論、プロレタリアと言つても、現代のその意識とは大いに異なりブルジョアジイとプロレタリアトが分化を遂げない以前の町人階級の意味なのであるが被壓迫階級、被搾取階級であることは言ふまでもなく、その下層階級の鬱積された肚裏の喝々を發散する代辯者として、鎌倉權五郎景政や、花川戸の助六が登場したのであると考察すれば興感があるではないか。

況んや「暫」の權五郎が大太刀を抜いて一難ぎに多勢の人間を撫斯りにするなんかは甚だ痛快で、封建時代の去勢された、被壓迫階



# と形式美

## 啓明

級の手でつくられた劇としては頗る異色あるものであらう。

それにしても先般中座で、これを上演した際

大阪の観客の一部は、かうした内容価値を知悉せず、たゞ「阿呆らしい」と貶してゐた者があつたといふことを耳にしたが、

私はかゝる観衆を憫笑せずにはゐられない。由來、京阪地方の観衆は演劇に餘りに筋を求め過ぎる悪い習慣がある。

だから「暫」の好きナンセンスな荒唐無稽に等しい劇を見ると、唯阿呆らしいで片づけるのだらうが、妙くとも「暫」には奇抜なナンセンスの永遠性がある。そこに立派な藝術美が存在するのである。

私等には「暫」の内容のナンセンスは、曾我廼家や志賀廼家の喜劇よりもより興味が深い。

く、且より藝術的であることを認めざるを得ない。

次に推稱すべきは舞臺面の繪畫美である。一面に丹碧の鶴ヶ岡八幡に、紅白の梅の吊枝宛として春光大雅の趣を舒べた一幅の畫圖である。

そこに紅の筋眼に前髪、椀色の素袍に鶴菱のどてら、小手腰當に大太刀を佩いた奇抜な服装の權五郎が、花道から搖ぎ出す。請役は藍隈をとつた武術と、外國芝居の道化役どころの沙汰ではない滑稽な鮫坊主や腹出してゐる。

更に優にやさしい桂の前と加茂の次郎、並に振袖姿の照葉が點綴されてゐる。洵に寛々たる長閑さが展開されてゐるではないか。そして花道のつらねや、大福帳の言ひ立の面白味から、本舞臺での大まかな立廻り、元祿見得、大太刀を振りかざしての荒事、次いで幕外の引込——いづれも繪畫美と彫刻美とが相交錯して、藝術的陶酔境に誘はれるに充分である。おまけに古風な大薩摩や薩子がその間を縫つて、遺憾なく古劇の特色を發揮する。

私はこの「暫」のごとき劇を、當今左翼的プロレタリア劇に精進してゐる新人にも、是

非一度は見てもおくことを奨めたい。

單にかゝる劇をブルジョアの遊戯として片づけてしまふやうでは、當來の演劇に餘りに無關心の譏を免れないと信ずる。そしてそこには何等かのより善き暗示を受するに相違ないと思考するものである。

この意味から言つても、歌舞伎十八番の「暫」は興味ある素材であると思ふ。



清原	鹿島	成田	足柄	加茂	寶木	那須	月岡	鎌倉
武	五	入	左	義	貞	義	小	権
道	衛	義	義	貞	義	貞	金	五
衛	門	網	郷	前	九	景	政	政
彦	幸	長	魁	扇	政	政	政	政
三	三	三	三	三	三	三	三	三
郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎

# 緊縮時代と……

## 「暫」と……

吉本寛汀

菊も紅葉もうら枯れた冬ざれの京の町を彩つて美しく展べられる顔見世の歌舞伎繪巻は、京洛中はおろか全關西の芝居すきにとつて一年中の観劇的飢渴を満たして呉れる食前方丈の珍味佳肴だ。

しかも今年には顔見世といふ懐古情調にびつたり嵌つた「暫」が演物の一つに据えられたことを喜ばずには居られない、そこで「暫」に關したことも書かうと思ふが、今更「暫」の考證でもあるまいから、肩の凝らぬエピソードを二つ三つ並べて見ることにする。

今は昔、天保十二年に時の閣老水野越前守が極端な緊縮政策を採つて、奢侈を禁じ、節約を鼓吹したことは人の知る處だがこの時の施政方針はどうして、昨今の緊縮宣傳どころではな

く、頭ごなしに、高飛車に命令して違犯する者はビシ／＼と容赦なく處罰したのだから堪らない、絹布の衣服も金銀の裝飾も庶民の身邊からすつかり影を潜めてしまつた。

この天保の御改革のために一層痛む目を見たのは將軍家お膝元の江戸を初め各地の芝居小屋だつた、取別けて平素おかいこぐるみに馴れてゐる役者などはお咎めを受けたりして大恐慌を來したが、その頃江戸の町奉行の役人が堺町の芝居へ出張して座元は言ふに及ばず、座頭から名題役者一同をすらりと並べて「金糸、縫襖、縮緬、天鵞絨といふやうな贅澤な衣裳を舞臺で着る事は罷りならぬ」と嚴かに言渡し、おまけに生意氣な役人の一人が座頭の七代目團十郎に向つて「どうも暫に使ふ衣裳が近年立派になり過ぎるやうだが……」と文句をつけたものだ。「暫」は御承知の通り正徳四年の初代團十郎初演以來代々市川家に相傳されて、毎年の顔見世芝居に上演され、後に少しく馳み氣味であつたのをこの七世團十郎が自ら選んだ歌舞伎十八番に加へて復興させたからで、幼年時代から手がけた得意狂言道具は古來私に傳はりましたもので、近頃の新潮ではござりませぬ」と皮肉に報いたので、役人も返す言葉がなく、却つて赤面したといふ話がある。

それから、これもその七代目の逸話だが、その頃長崎へ上陸して江戸表へ出府した外人が、日本の團十郎に逢ひたいといふ

希望で、當時幕府の御普請役を兼ねて通辯を勤める大塚勝三といふ人を通じて申込んで来たので、團十郎も快く承諾し、翌日日本橋本石町の和蘭陀屋敷へ出向いて外人に會つてみると、その毛唐先生つくくんと眺めて「これは違ふ、ダンジウロではない」と云つて肯かない、そこで「いやこれこそ正真正銘の市川團十郎に相違ござらぬ」と言ひ聞かせても、なか／＼承知する気色もなく「日本へ渡らぬ先から逢ひたいと思つてゐた憧れのダンジウロの肖像が此處にある」と云つてポケットから出したのは、團十郎が扮した「暫」の錦繪だつた。

なアる程さうか、と居合せた一同、外人が「違ふ」といふ理由が判つた。で、團十郎は直ぐさま深川木場の自宅へ使を走らせ「暫」の衣裳、小道具から化粧道具まで取寄せ、其の場で紅隈、柿色の素袍、角前髪、納豆烏帽子、大太刀といふ約束のこしらへをし、錦繪の通りに大見得を切つて見せたので、外人も「お、ダンジウロ、ダンジウロ」と驚喜し、お禮の印にその場で羅紗二巻を贈つたといふ。

其處までは洒落た話だが、この時分の幕政が前に書いた通り七むづかしい時代なので、烏帽子や大紋素袍を舞臺以外に民間で用ゐるとは怪しからぬ、といふ無茶なお咎めが、その時に肝煎した幕臣であり通辯である大塚氏に下つて、聽て隠居を申付けられたとは、飛んだ餘味を受けたものだ。

近世の名優九代目團十郎も「暫」は三度上演したが、その最

後は明治二十八年十一月の新富座で、一番目が「大阪陣諸家記録」二番目が「伊賀越」の新關から岡崎、仇討まで、中幕に、「暫」が出て、今の幸四郎も當時染五郎で加茂次郎義綱、中車が荏原八郎と共に「暫」の舞臺に出てゐたものだが、この年はまた、ことし昭和四年のやうに夏から秋にかけてコレラが流行し、先年物故した中村雀右衛門の先代なども七月に神戸大黒座出勤中激烈なコレラに感染し、發病三時間で休れた位だつた。

で、その當期々々の當込みの幕辭を挿むことなども興味の一つとして喜ばれてゐる「暫」の舞臺だから、九代目團十郎の鎌倉権五郎が「え、うぬらに引立てられて堪るものか、悪く傍へ寄りやアがると、回向院へ抛り込むぞ」といふ幕辭のところ、その日の當意即妙に「悪く傍へ寄りやアがると、避病院へ抛り込むぞ」とやつつけた。

あの嚴格な九代目にしては珍らしい諧謔だが、この不意打に面喰つたのはこの幕辭を受ける市川幡谷の豊島平太で、チョット目を白黒させたが、これも突差の出鱈目氣分で「え、コレラ病ぢやアあるめえし、抛り込むぞ、は無禮の雜言……」とやり返したのがドツと前受けして満場沸き返るやうな場當りを取つた事もあるさうだ。

緊縮時代と「暫」とコレラ——氣の利かない三題斷のやうだが、まんだら近頃の世相と縁が無いでもないところを拾ひ上げてお茶を濁しておく。



# 歳晚「紙治」小話

— 變つた河庄の思ひ出 —

木 谷 蓬 吟

近松二百年祭の記念興行に、原作通りの「天網島」茶屋場を出すことになつた時、今まで演じてゐた紙治の川庄とは、チヨイ／＼意氣なり段取りが違ふので、ハテそれでは今迄やつて居たのは本當の天網島ではなかつたのかと氣が附いた。そこで調べて見ると、それは近松は近松ぢやが、弟子の近松半二の改作物で「心中紙屋治兵衛」と云ふ標題だといふことが分つた。それから程なく、東京へ持つて出た時に、正直に「心中紙屋治兵衛」と題して上演した。スルト今まで「天網島」の藝題に刷らされて居た東京の人たちは、コレハ怪しからんことだ、立派に「天網島」といふ藝題があるのに、いかに鷹治郎が治兵衛をやるからといふて、「心中紙屋治兵衛」と改題するとは横暴だ……と云つた風に散々に叱られたといふ話を聞いたことがある。

嘘でも本當でも、どちらになつても構はぬが、要するに鷹治郎を唯一の治兵衛役者だと認めてゐることは事實である。それで全くよい譯である。事ほど左様に、いつ見ても、鷹の治兵衛の天下一品であることに間違ひはない。

私共が往時の劇壇を振り返つた時に、阪田藤十郎が伊左衛門役者であることを一種の憧憬の眼で眺めるやうに、治兵衛役者の鷹治郎を、百年後の人々は同じ心持で憧れる事だらうと思はれる、全く、我々は常に見馴れては居るものゝ、此役などは鷹の歴史的存在を確保する一名作だと云つてよからう。

それはそれとして、私はいつも言ふのだが、大近松の原作「天網島」を大和屋まで出して、孫右衛門を鷹治郎にやらせて見たい。

あの茶屋場を、今まで通りの治兵衛本位でなく、孫右衛門

本位でやつて見ても面白いと信じてゐる。

川庄を孫右衛門本位でやるなどは出来ないことだ——と、叱る人があつたら、私は私の見た笠岡の田舎芝居を是非見せてあげたいと思ふ外はない。ちよつと其川庄の孫右衛門を御覽に入れやう。

岡山縣下の笠岡町で觀た川庄は、全く孫右衛門本位に出来てゐた。役者さんは市川右田次と云ふ人が治兵衛で、中村桂車の小春、孫右衛門は座頭の市川猿左衛門と云ふ人である。

丁稚の三五郎を一座の花形役者の何とか云ふのがやつた、小春が手紙の返事を書く間、門口で待つうちに、近所のお茶屋でいろ／＼な散財の歌が聞こえる、三五郎はそれをかさに随分長い間いろ／＼な踊をやる。最後にそれを見た小犬がクワン／＼と吠える、三五郎はベソを搔いて到頭小春に犬を追ふて貰ふ、小春は煙管で犬を追ふと云ふ珍型なぞあるが、數え立てれば際限がないから、こゝでは孫右衛門だけの變つた演出を思ひ出して見やう。

孫右衛門が川庄へやつて来る、女主のお庄が孫右の手を握る、無禮者めときめ付ける。

一旦奥へ行き、又立戻つて忘れた刀を取上げ、思入れあつて奥へ入る、と淨瑠璃「天満に……」とくる。

小春が膝にもたれる、孫右は扇でイマノ／＼しそうに打拂ふ。孫右が獨り舞臺となり、治兵衛の抜身の刀を、何處へ匿せばよからうと、いろ／＼あつて、額の後(額)には忠孝とあるへ匿し、ヤレ／＼と云ふ思入れ、その拍子に火鉢にけつまつく、灰神樂が上がる、袖や膝先を拂ひ、その手を兩袖に入れて、二三度廻つて、袖を振りつ、奥に入る。

治兵衛に意見のくだりは、眞世話でやつて、入れゼリフが中々に多く見物を散々に悦ばす、このあたり治兵衛の役、甚だわるし。

治兵衛は、小春と逢ひ初めののろけ話しをやる、調子に乗つて孫右の膝をつめる、これにからんで孫右の仕草が、随分豊富にある。

こんな調子で、この一場を通して、孫右衛門が主人公の觀があつた。

鷹治郎が治兵衛をやるから、一層治兵衛が重きをなすので孫右衛門をやれば同じ筆法で孫右衛門本位の川庄が出現するだらう。

この時に及んで、松竹は、「紙治兄孫右衛門」などと藝題を變へやうものなら、それこそ本當に横暴だと叱られても、それこそ本當に一言あるまい。



# 賀の祝の舞臺

高谷伸

歌舞伎——ことに操りから移入された歌舞伎——に於ては、その重要な場面を舞臺上に均齊といふ手段によつて、がつしり固めてゐるものが多い。

賀の祝に於ても、白太夫を中心に櫻丸夫婦の悲劇に對し、松王梅王の兩夫婦を並列的に進行させ、手がたい構成を見せてゐる。

賀の祝といへば「菅原傳授手習鑑」の三段目の切である。菅原といへば竹田出雲、三好松洛、並木千柳の三作者が忠臣藏等と、もに、腕によりをかけて書いたものである。忠臣藏では三人の作者が三人の切腹をそれ／＼書きわけたやうに、菅原では三人が三組の親書の別れを書きわけたものである。道明寺の菅相頭と菊屋姫、賀の祝の白太夫と櫻丸、寺子屋の松王と小太郎の生別死別がそれである。淨瑠璃では三の切といへば一番重要な段である。故に、三つの別れの中で、この賀の祝は一番肝心の幕なのである。

にも拘らず、菅原といへば寺子屋を聯想するやうになつたのには、いろ／＼理由もあらうが、作者の狙つた濫さが、かへつて淋しくさせた結果であらう。殊に車引のやうに、歌舞伎に移つて一層、色彩的效果を高めた幕の前に控えては、白太夫といふ老人中心の幕はあまりに彩りに乏しい。作者は、これを救ふために八

## 越後獅子

長唄連中

角兵衛獅子 宗十郎

### 日本堤の場

本舞臺向ふ奥深に江戸吉原遊廓の切出し二重舞臺を敷つしめ、正面に古原出囃子、都べて日本堤の體よろしく跳らへ鳴物にて幕明く。

ト、出囃子の前絃きよき程にダンダラ幕を引落すと、直ぐ唄になり、打つや太鼓の音も澄みわたり、角兵衛と招かれて居ながら見下す石橋の浮ぶも舞も風雅もの

ト、これにて向ふより獅子舞喜太六スツボリかつら獅子頭を冠りかさん、の持らへ、鞆鞍を腹前にしのバチを兩手にもち出で來り、花道よき所にて

〽諷ふも舞ふも囃すのも、一人旅寝の草枕、おらが女房を褒めるぢやないが、飯も焚いたり水仕事、麻擦るたびの樂

重をかなり働かせてゐるが、嘘でもよい意想外な道明寺の木像や、子供を柳に涙を搾る寺子屋の方が、筋の變化が多いだけに受けたのである。

しかし、全段のうちこゝに力點を置いたことは、「梅は飛び櫻はかるゝに世の中に何とて松のつれなかるらん」といふ一首の歌から松王梅王櫻丸の三人兄弟を作り、三つ子は舍人に召されるといふ説から道真記に結んで紐立てた淨瑠璃で、この三つ子の兄弟が顔を揃へるのが、車曳から賀の祝にかけての三段目であるからやはりこれを中心としやうとした作者の意圖は充分明瞭なものである。

賀の祝にも、櫻丸は櫻丸はと、見物を待たせて置いて、八重にまで揚幕に心をやらせながら、實は誰よりも先きへきてゐた櫻丸が奥から「嘸待ちつらん」で出るやうな技巧はある。しかし、今まで敵と思ひし松王のうつつかわつた様子に驚くほど意想外ではない。

構想から言へば寺子屋の方に無理がある。それだけ泣いて泣いて泣きぬきたい昔の見物の前には力があつた。賀の祝には寺子屋ほどの押しがない。松王梅王の儀をもつての争ひはあるがあとは極めて静かである。親子兄弟の氣持ちもしんみりと、よく書けてゐる。理屈にも無理がない、それだけ、どこかに櫻丸の心のやうに控えがちな所がある。その澁さが、他面白大夫と三夫婦を顔揃ひで見せねばならぬ大層さと共に、寺子屋程舞臺で見られなくなつた。遠慮は無沙汰、今では寺子屋一幕が菅原を獨占した氣味もあるが、賀の祝には何としても、見れば見る程よい味がある。

幕あきの情景から、のどかな春らしい田舎の空氣が漂ふてゐる。松梅櫻三本の植樹、積み俵などが在郷唄か何かの下座で展開されてくる。千代や春が若菜摘み摘みやつてくるといふ長閑な情景である。松王や梅王にしても歌舞伎獨特の怪奇

しみを、獨り笑ミして來りける。

ト、これにて喜太六本舞臺へ來りて宜しくこなし

越後がた、お國名物さまざまあれど、田舎訛りの片言交り、しらそきになる言の葉を、雁の便りに届けてほしや、小千谷ちどみの何所やらが、見えすく國のならひにや、縁を結べば兄やさん、兄ぢやないもの夫トぢやもの、來るか／＼と濱へ出て見ればのほいの濱の松風、音やまさるさやとかけの、ほいまかとな、すいた水仙すかれた柳のほいの心石竹氣は紅葉、サヤとかけのほいまつかとな、辛苦菫句もおけさ節。

ト、此の間よろしく踊り振り事あつてとまる、此所へ獅子舞正吉、額八、嶋松、松治の四人喜太六と同様の拵らへにて出で來りて出合ふ事あつて、踊り文句となり。

何たら愚痴だへ、牡丹は持たねど越後の獅子は、おのが姿を花と見て、庭に咲いたり咲かせたり、そこのおけさに



なしかし華やかな拵いで現れる。さうした気分が一轉して、櫻丸の切腹といふ暗  
らゐる場面になると、着附にまで美しいながら寂しい陰が絡はる。そこに首尾相應  
の舞臺技巧がある。

松王などの服装も、袴を使ふのもあるが、歌舞伎の舞臺にはやはり理屈放れ  
た彩りを尊重したい。古格に泥むのも考へものだと思ふ。櫻丸が肩入れの着附か  
ら、色氣のある襦袢を見せ、最後に白装束になるのも、美しさの中に、あはれが  
あつてよいであらう。

櫻丸のあはれさは、その姿ばかりでなく、その心には更らに深いものがある。  
下々の下々たる牛飼舎人と自らの身分を遜つても、忠義、といふ固い言葉よりも  
つと人間味に富んだ主人思ひの心から、苧屋姫の戀をとりもつた櫻丸である。そ  
の誠心があだになつて、姫の戀も管相巫左遷の一つの理由に數へられた。櫻丸は  
身分こそ卑しいが責任感は一倍強いものがあつた。それが切腹となつて現れた  
白太夫は松王の性格が強ければ強い程、櫻丸にあはれを感じた、何とかして助  
けたいと思ふが、結極、撞木鉦の介錯より道はなかつた。

淨瑠璃ものに珍らしく筋に無理がない。裏の裏をかくやうな特殊のからくりが  
ない。子供を糊にした涙の強要がない。それらのことは、普通の昔の芝居好きに  
は物足りない事であつたかも知れない。しかし、今の芝居好きには、かへつて、  
殊更らしい嘘の多い芝居より、きつと同感されることが多いと思ふ。さうなると  
舞臺構成の中心は白太夫であるが、感情の上では今ではやはり櫻丸が中心となる  
色彩の上から見ても櫻丸と八重が中心である。

説くところ、やはり歌舞伎色彩論になるが、今日に於て色彩は歌舞伎の重大な  
要素の一つであることは強く主張してもよい筈である。

いなこと言はれ、寝たり、寝たらす待  
ち明かす、御座れ話しませうぞ、こん  
小松の蔭で松の葉のよに、こんこまや  
かに弾いて唄ふや獅子の曲。

ト、皆々よろしく取合になり踊り舞  
ふことあつて又、一人づゝに入れ  
かわりて、

向ひ小山のしちく竹、いたぶし揃へて  
きりを細うに十七が室の小口に晝寝し  
て花の盛りを夢に見て候。

ト、ふり事あつて納まる、これより  
獅子舞五人共に、さらし布を兩手  
にもち、高下駄を穿き立ち上り、

見渡せば、西も東も花の顔、何れ  
賑ふ人の山、打寄する、女波男  
波の絶間なく、逆巻く水の面白や

ト、これにてちらしになり

さらす細布手にくるくると、さらす細  
布手にくるくると、いざや歸らんおの  
が住家へ。

ト、皆々宣敷、總踊りになり、よろ  
しくあつてキツとなり。一暮

十二月の顔見世は、昨年中より工事中の新築南座の柿茸落しに、一層白井社長の手腕も振はれ、狂言の探定も一粒撰みと云ふ先づ他座では眞似の出来ぬ据ゑ方、不肖私の出物は、晝の中幕三段返しの越後獅子と、夜の切幕うづば猿に決定致しました。此猿廻しの方は先年京阪で一度上演致しましたからこれで二度目と覺えて居ります

脇役の大名と奴が引立つ様に書かれてある役で、丁度幸四郎丈の大名、長三郎君の奴と云ふので古ひ物でも退出しの幕には御見物の足を、幾分かはお引留が出来る事と思ひます。それから晝の越後獅子は私も京都では無論初めてで、私に取つては初めての出し物と申しても宜しむ位で、十何年か前に、帝劇で一度死んだ宗之助と二人でつとめた事が御座あますが、其他一人では今度が初演、只犬一座の中で一人の舞踊は、淋しい様な懸念も致しますがなるべき華かにと工風を凝らしておりますので、唄は六左衛門一派がこられて江戸一流の氣分を十分に出してくる事と信じております。やがてこの唄が問題になり、花柳社會に流行される様にも成れば、無上の結構だと勝手な熱もこの序にふかして戴きます。例の〽なんか〽



私 役 々 々  
澤村宗十郎

等の所は、云ふにいわれぬ好む氣持の妙味があると信じます。その私の役々には、大森の千早姫、是は度々つとめて居ります。また皆様も御承知でありますから、幸四郎丈の彦七を御らん下さい。と自家最負でなしに、他家推賞——ごついでに見て頂くと云ふ譯、格別取立て申上げる程の事も御座いません。

少し話しが前後致しますが、晝の中幕に林さんの盛綱に女房役のかかり火を勤めます。是は私としては二度目の舞臺、一座では初めての事ですから、無論懸命に勤めさせて頂く積りです。モウ一つは「暫」の鯉坊主の役で、是は私の好きな役の一つで、氣の軽い割合に御見物に受け役で、申さば私の道樂、大阪で「暫」が出ました時も此脇役を私が買つて出た事は皆さんがよく御記憶にある事と思ひます。何にしても本年の顔見世は初開場の上、珍らしい犬一座でありますから、自分から申上げては我田引水の形も御座いますが、必ず犬入を見られる事と信じてうたがひないのです。どちらかといへば口も筆も不都合な方で御座いますのでこゝろあたりで御謙慮申上げ、たゞ〽皆様の御後援を待つ次第で御座います。

# 團十郎と菊五郎

—「大森彦七」の懐古—

伊原青々園

「大森彦七」は最初福地櫻痴居士が、歌舞伎座で五代目菊五郎にさせようといふ考へで、當人に其の咄をしたら、菊五郎の

いふには「わたしはイケない。鬼女の方ならするけれど」といふので其のま、廢案になつてしまつた。すると其の翌年、明治座の秋興行に九代目團十郎が出勤するにつき、奥役の河原崎權之助（今の長十郎の父）が團十郎の處へ出し物の相談に行くといふので、河原崎は前年の大森彦七の事を知つて居るから、あれは何うでしようかと聞くと、福地さんに頼んでくれとの事で、それから本讀みになつた。

團十郎は其の本讀みを聴いて「物語は大變い、けれど面白みが薄い。後が狂亂になるといふ趣向にしたら面白いと思ふから福地さんに相談してくれといつた。河原崎がそれを承つて福地へ交渉に行くと、櫻痴居士も「よろしい、その段取りをつけて見よう」といふので書直したのが、今日も行はれて居る新歌舞伎十八番の「大森彦七」である。

常盤津は先の名人林中が健在の時、節付は先々の仲助がつけ、團十郎の宅で稽古をしたが、千早姫は市川女寅（後に門之助）で、これが當人の出世藝になつた。荷が勝ち過ぎて居るが、おれが叩いてやる」と團十郎がいつて、やかましく小言を食はしたさうだ。振附は花柳であつたが、健康を損つて息が切れるので、大部分は團十郎自身で拵へた。しかし花柳の顔を潰してはわるいから、當人のつけた振は其のま、に残して、ムズにしなかつた。こゝらが團十郎のえらい所である。

その時に、道後左衛門の役を、座頭の先代左團次がつとめようと言ひ出したが、團十郎がいふには「高嶋家を出してはいけない。本人は場を肥やすつもりだらうが、揚肥やしではなくて左團次といふ役者を安くする、明治座といふ城を押へて居る役者だから」そういつたので壽美藏がつとめる事になつた。守川源平といふ座主も左團次につとめさせたいし、當人でも出ようといふのを、團十郎が右のやうな意見なので、河原崎が在りのま、を左團次に告げると、左團次は「うむ」といつたきり黙つて考へ込んで居たといふ。これでも團十郎のえらい人であつた事が思はれる。

稽古が済んで衣裳の誂へになる。今でも型になつて居る市松の衣裳は此の時に團十郎が選んだのである。看板繪は齋藤長八（鳥居）の意匠で「元祿風にしたら宜からう」と、大森が面をもつて荒事の元祿みえをして居る所をかいたが、團十郎がそれ

を見て「こいつは看板に詐りありで却て可笑しからう」といつたさうである。

それで、いよく明日がツケといふ日に、遊び人の石定が故障をいつて来た。丁度その時に名古屋へ行つて居る五代目菊五郎が「大森彦七」を團十郎がすると聞いて、石定から明治座へ抗議を申込ましたのである。それは前年の歌舞伎座一件があるので、大森は自分に先取権があるといふのである。明治座では其のことに惱まされて居たが、今の延壽太夫の母に當る横濱の

### (おふむ石)

## お夏狂亂

お夏 梅幸  
馬士 彦三郎

馬士 よう、こりやどうぢや。

浄 いたか降つたか天人の

零落か、さつてもえらい美しい。

唄 へをなごにや果報ありやは、今日もおきてが心中立の、一升どつくり二升かけて著るまいぞの約束も、寒さ淺ぎぞ喉元を、

すぎりや浮氣の小當に。

ト、ぢやれかゝる、お夏振拂ひ行うとする。

お夏 いえく〜ひとりで渡るわいの、オ、く〜く〜てもま仰山な

唄 螢がり。

お夏 皆もおぢや、さあ〜〜つれて螢来い〜甘い水

やろに、そちもかわいや夜すがらに身をば焦す水にも消ゆる火に。  
この内始終馬士縮みて

富貴樓のお倉が來合せて、其の始末を聞いて「それは高嶋家の方が理屈に合はない。わたしが捌いてやる」と名古屋の菊五郎方へ手紙を持たしてやつた。結局菊五郎も同時に同じ「大森彦七」を演ずるといふ條件で苦情は落着いた。そうして明治座へおつかせて、市村座で出すといふ事になつたが、今度は當人の菊五郎がイヤだと言ひ出して、その代りに市村座では「辰橋」を演ずる事になつた。以上はその時の局に當つた故河原崎權之助氏がわたしに語つた所である。

道戯たる振り、唄切れ  
ると合方俄にけたゝま  
しくなる。

浄 あり怖ろしや焦熱の、苛責の杖此の世から受くるぞよ、人のあさましや助けてたべの悲しやと、彼方へ走り此方へ迷ひ、狂ひ亂るゝ有様に。

ト、文句の通り馬士をつきのけて、お夏上下へ走りまわり、身を揉みあせる、馬士はおひ

〜に酔のさめかゝりたる思ひ入。  
あつたら笑止や、氣ちが

ひどの、かゝりあふては迷惑と。  
お夏馬士に縋りて泣くト、腹を立てこづき廻す。馬士迷惑のこなし

酔のさめ際興ざめ顔、すがるをつきのけ振拂ひわが里きして走り行く。  
ト、馬士お夏を突き放し上手へ逃て入る。



# 芝居と能の船辨慶

森 ほんのほ

成田家のお家物である「勸進帳」の向うを張つて、先代菊五郎が黙阿彌翁に新作して貰つたのが、お能からソツクリ生け挿つて来た「土蜘蛛」で、在來の歌舞伎十八番に對して、「新古演劇十種ノ内」と銘を打つたのです。この新作所作事がスツカリ當時の好尚に適つて、非常な好評でしたので、九代目團十郎も能狂言の「釣狐」を殆どそのまま、舞臺に移して、これを新歌舞伎十八番の一つに數へました。次の年には五代目はやはり能が、りの「茨木」（新古演劇十種ノ内）を花柳壽輔は能狂言を脚色した「釣女」を演じるといふわけで、能模様、狂言模様の舞

踊が續いて舞臺に掛けられたのでした。と同時に、タネを謡曲から採つて劇化した「仲光」や「山伏攝待」が、「高時天狗舞」等と同じに、團十郎によつて活歴風演ぜられました。是等は後の作である「伊勢の三郎」や「紅葉狩」と共に「新歌舞伎十八番」に數へられるものです。尙、先代の右團次、左團次が能を舞踊化した「望月」を演じてゐます。

斯様に、史實的な戯曲や、能風、能狂言風の所作事が頻りに迎へられる時代に生れて来たのが、此度選ばれた「船辨慶」で、尾崎紅葉氏の硯友社が創立され、坪内逍遙氏の新小説が發表された明治文壇を背景とした十八年の十一月、新富座に上演されたのでした。作者はやはり黙阿

彌で、作曲が杵屋正治郎、振付が花柳壽輔、いづれも當代の妙手揃ひであります。役者の方は、静と知盛を九代目、辨慶を先代左團次、船頭を芝翫、福助（歌右衛門）の親子で勤めました。

近頃は、六代目が屢々これを演じ、三津五郎も勤めたことがあります。梅幸丈は先年、帝劇、市村座で、近くは昨年十月、帝劇で再演して、全く手に入つたもので、成田屋のお家物を音羽屋系のこの優が演じることに、別な意味での興味はあるのであります。

芝居の「船辨慶」は、能曲の題名ごとソツクリそのまま、歌舞伎の舞臺に移したに過ぎないと言つても可い程、黙阿彌翁の加筆も極めて僅です。その點が今日批難されるところです。

能の五流とも、題名は「船辨慶」ですが、辨慶がシテではなくて、前は靜御前は知盛の亡霊です。よくお能の見物の中には、知盛の靈が假りに靜御前の姿と現じたもの、やうに誤解してゐる向があ

りますが、これはとんだ大笑ひです。

知盛を劇化したものには「義経千本櫻」の「碗知盛」や「新七ツ面」の一ツに「碗潜」(能にもこの題名の曲あり、知盛の入水を取つたもの)があり、この「船辨慶」のやうに本行寫してないのはいふまでもありません。

芝居でも能でも、前ジテに優艶な静後ジテに悲壯な知盛、この二つを一人の役者が演分るところに興味があるので、役者の方から言つても、所謂「氣のい、」役です。

能の方では、普通演じる型と、「小書」と稱して特別な型を用ふる場合とあり、す。小書には「前後之替」「重前後之替」或は「白浪の傳」とか「止めの傳」とか言ふのがあります。芝居は此等の型からいろいろ拾ひ集めたもの、やうに思はれます。それも大體は、型の派手な金剛流と一般的な觀世流とに依つてゐるやうであります。

靜の舞は、能では中ノ舞、或は序の舞を舞ひますが、芝居では、袖うち振るも

恥しや」で一度舞があり、烏帽子を落してから「今様」の踊がかつた舞があり、更に「唯麴」のワカの前には舞があることになつてゐます。能の方では「恥しや」の後にイロエと稱する短い振があり、ワカの前に舞があるだけで、芝居の方の「都名所」は船頭を勤める狂言方に名所話をさせる型もあるのから思ひ付いたのではないかと考へます。

能の義経は子方から出ますが、芝居では子役ではありません。家來は辨慶と四天王ですが、能ではワキの辨慶とワキヅ

三人です。船頭は能では一人だけで、狂言師が勤め、後ジテの装束の付け上る間のツナギとなるので、荒浪を漕ぎ脱ける科などは芝居と大凡同じです。前の名所話もツナギの爲です。

お能の曲を生のみ、歌舞伎の畑へ移植するのは考へ物であります、貴族的な藝術を大衆の物に改造したのと、兎も輕視され易い歌舞伎俳優が、徒に自尊心の高い能役者に對して、挑戰的に進出しているのは痛快で、いつも此種物を見る時に感じる處です。

### 磨齒煉固「スブギ」



本品を使用すれば幼時よりも老年に至るまで歯牙を完全に保つ事が出来ます。何故なれば、ギブス煉齒磨は刷牙がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであります。さらば毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さらば気分は爽快になられます。本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります。有テな百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形 壹圓 金七拾五錢  
小形 壹圓 金四拾五錢  
ロンドン、パリ、ブリス、  
デイトン、  
ギブス株式會社  
日本代理店  
株式會社 横山商店  
東區豊後町三番地



# 南座の顔見世

新 村 出

本年は京都の年中行事たる南座の顔見世興行も、座の新築と共に一層賑かなことであらう。東西の名優ぞろひ名作ぞろひ、私の如き寒さざらひの引込み思案ものの氣をそゝらすにはおかない具合だ。芝居道樂の本居先生に、こればかりはあやかつて私も一つ見物に出かけるとしようか。

私も宣長翁の壯年期同様、東京では二十前後の時代には、相當に芝居をのぞきまはり、郷里の家からお小言をくらつたやうな経験もあるが、今度の興行では私にとつては梅幸が一ばんの古顔である。私が十七歳の明治二十五年の夏、築地に歌舞伎座が建つてから二度目の興行、盆興行のをりに、菊五郎一座が牡丹燈籠の書下ろしを演じたことがあつた。大向の三階で、たしか二十五錢位で見たのが最初で、あんまり氣に入つたので二度見にいふことも思出のたねである。田舎から出たての一高生で、何がなしに嬉しくてたまらなかつたのだ。お米と伴藏が五

代目で、新三郎が菊之助、今の梅幸が榮三郎のころでお露をつとめた。お露とお米の幽霊が連れだつて来て蚊帳の中へおとづれて新三郎をなやます凄艶な情景は、四十年近い今日もなほ眼にうかぶ。それ以來何度も何度も見來たつた梅幸だが、いつもあの姿がおもかけに立つのみか、そのをりの寫眞をも自分は愛藏してゐる位だ。執着の甚しいものと笑はれもしようが、第一印象といふものは忘れられないものだ。

さてその梅幸が船辨慶とお夏狂亂とを演るのださうだが、兩方とも私は芝居では見たことはない。船辨慶は能では度々見聞し、お夏も踊では一二度は見たが、歌舞伎のは、見れば今度が始めてのわけだ。どちらも見ものであらうが、以前見た人の話に船辨慶は、後シテの光景がいつも明るすぎて凄味が足りない感じがしたさうだ。照明に注意を要しはしないだらうかと思ふが、自身で見ないうちに注文をつけるのは早計かもしれぬ。と



もかくも二十餘年間、殊に最近の數年間、斯道に全く遠ざかつてゐる自分にとつては、梅幸がお夏や静をやつてくれるのが嬉しくて見るのが待遠でたまらない。

明治三十九年の暮であつたか、築地で鷹治郎の紙治を見て、御同様に感嘆したのを始めとして、京阪に移住してから數回も見なれたが、いつ見ても天下一品なのは鷹の紙治だ。多言は野

暮だ。大森彦七は、櫻痴居士が太平記から取材して團十郎に書下した活歴物だとおほえてゐるが、多分築地で私もその時見た鬼女は梅幸ではなかつたかどうか、それはおほえないが、ともかく見れば今度が二度目になる。今では幸四郎の彦七はこれ一品だらう。

大阪にあつた

## 昔の顔見世資料

(その三)

—— 南木萍水 ——

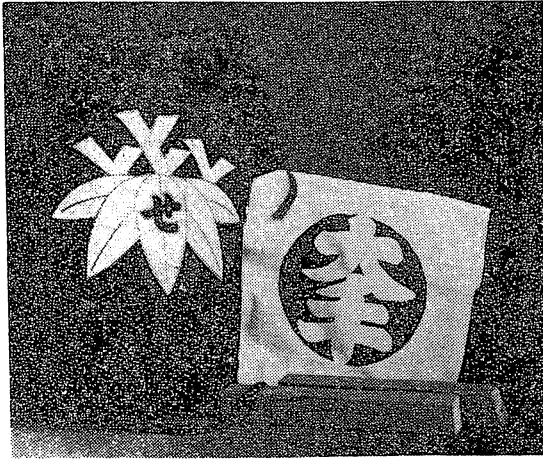
### ○手打連の頭巾

手打連の着付けは各々の連中の印を模様とせる一定の衣裳をつけ、頭巾は赤地に白く笹瀬、大手などの印を染め抜いたもので(寫眞参照)手に拍子木を持つて、舞臺際に立ち役者連に對したものです。

### ○主なる最辰連中

笹瀬、大手の二連は、當時劇界に對す

る權威者として、著名なものでした。笹瀬連の起りは享保五年、笹屋小兵衛、瀬戸物屋傳兵衛の兩人が幹旋で出来たもので、この二人の頭字を取つて笹瀬と命名したものです。大手連中は享保二十年に生れたもので、これは大手筋に當る人達で組織されたから、左様に命名されたもので、河内屋孫兵衛、大和屋八郎兵衛の兩人が専ら勞を執つたものです。この他に藤石連、花王連、ざこば連、堂島大連などがありました。



# 師走の大坂劇壇

## 浪花座の第一劇場は

### 「旋風時代」が好評

角座は大阪唯一の歌舞伎  
久々の新派が樂天地へ

新築なつた南座は一部の座席を除く全部は草履ばきの椅子席といふ最近代的設備の内で、舞台の最古典的藝術に陶醉さそうといふ従來の顔見世氣分を根本的にブチ破つた新雰圍氣で三十日より華々しく蓋を開けたが、これに對して師走の大坂劇壇は一日遅れて十二月一日より一齊に新陣容で開演するが浪花座は、第一劇場が八月新組織以來五ヶ月演續の第五回公演を以て愈々お名残りとなる。狂言は第一の「旋風時代」は大阪毎日新聞連載中の田中貢太郎氏原作にな

る明治初期の旋風のな時勢推移の種々相を描いた大衆文藝を鳥江鏡也氏が巧みに劇化したもので、その當時の世態風俗を如實に、特異な演出を見せる由。第二の「エヂソン」は電燈發明五十年記念祭に因み特に上演、發明王エヂソンの躍如たる姿を彷彿せしめるに足る歴史的演じ物、劇場表もそれに適しく白晝の如く電飾して、尙劇場内にはエヂソンに關する珍稀な文献などを集めた展覽會を催してゐる。第三の「堀川波の鼓」は文豪巢林子の原作を最も忠實に脚色し

たので、原作に忠實な演出者の努力は必ず好評を博すであらう。第四の「變な村」は武者小路實篤氏の新作で作者一流の作劇術を隨處に肯かせしめる輕い諷刺劇である。

▼角座は昨年六月以來の花形大歌舞伎晝夜二部興行にて我童、橋三郎、ひとし、長太夫、延太郎、大吉、成太郎、蓮女等にて、狂言は晝の部第一新作食滿南北作「紅葉山」第二右田寅彦作「堀部妙海尼」三幕、第三「神靈矢口波」頓兵衛内の場、夜の部第一「玉藻前巖杖」道春館の場、第二重扇助作食滿南北改訂「接木根岸礎」四幕、第三「夕霧伊左衛門郎文章」竹本連中、常磐津連中、長唄連中にて開演。  
▼樂天地は二日よりは、大井新太郎、久保田清、山田九州男等合同の新派劇復活、大衆的興行にて出演する由  
▼中座の五郎劇は二十日初日にて二の替りを出してゐるが、本月も打越す。

おむ石

## 船辨慶

辨慶 義經 福三郎 助  
知盛の靈 梅 幸

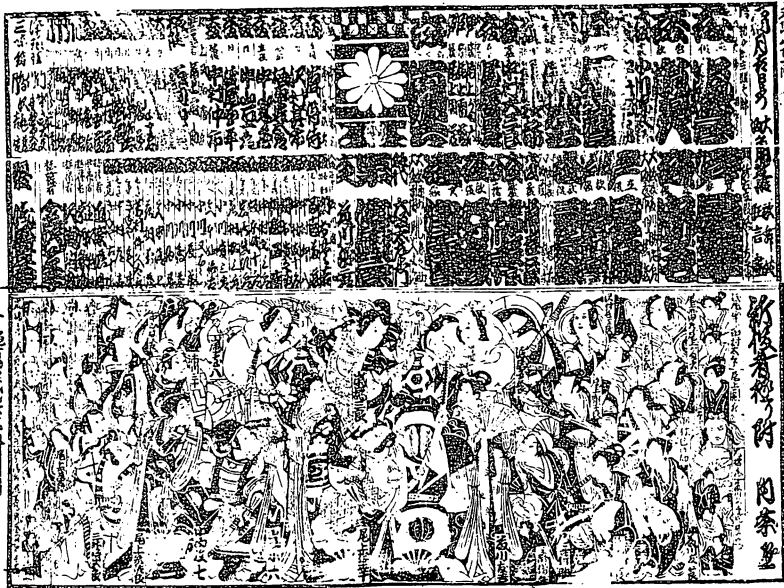
辨慶 あら不思議や海上を見れば西海にて亡びたる平家の公達一門銘々浮び出たるぞ。懸る時節を窺ひて恨みをなすも理りなり。

義經 いかにか辨慶。御前に候。

辨慶 今更驚く事勿れ、たとへ悪靈根みをなすとも  
義經 悪逆無邊の罪積り、神明佛陀の冥感にそむき天命に依つて沈みし一門

何程の事あるべきぞ。  
義經 言ふ間あらず雲霞の如く涙に浮びて見へたりけり。

ト 義經こなしあつて太鼓地に  
なり花道より知盛黒頭鐵形の  
つきし白鉢巻、法被半切附太  
刀知盛の拵へにて白柄の長刀  
を持出て来る。花道にて



水萍木南 (四のそ) 料資世見顔の昔 たつあに阪大

○顔見世番附

顔見世興行に限り昔は番附に狂言役名を省き顔觸ればかり書いたものを發行しました(寫眞参照)これは文政八年角座のものですが、この形式は江戸風ものが移つて來たので、この他に齣組がなく、四段位ひに取扱つた文字ばかりのものもあります。

まだこの他に、舞臺盃といつて、顔見世興行開場の前日に新顔の俳優連の爲に、舟乗込を行ひ、一行が劇場に入ると舞臺には古參の役者連がざらりと居並びて、新參の役者を迎え、それより頭取が役者の名を呼出して、いづれも座本に盃をする、これが舞臺盃と稱した儀式で、終つて當夜の來賓に向つて新參俳優が挨拶をするといふ古式がある。

知盛 抑も是は頼武天皇九代の後  
嵐平の知盛の幽嬪なり、あら珍  
らしやいかに義經、思ひもよら  
ぬ浦浪の

知盛を知る邊に出舟の  
知盛が沈みしその有様に  
又義經も此海へ沈めんものと  
夕波に浮べる長刀取直し、迫  
る巴や浪の紋、四邊を拂ひ潮  
を立て悪風烈しく吹きかけ目  
もくらみ心も亂れ前後を忘る  
は計りなり。

ト 大小早筒大破入りにて知盛  
舞臺へ來り舞ばたらきよろし  
くあつて

ト その時義經少しも躓かず打物  
抜もち現の人に對ふが如く言  
葉をかわして職ひ給へば

ト 義經太刀をぬき知盛と打合  
ふ辨慶にて留て  
辨慶中へへだて打物業にて叶  
ふまじと球數さら〜と押し  
もんで

ト 辨慶球數をもみ是より祈り  
になる。

昭和四年十二月

# 南座 顔見世 興行

(畫之部)

大森痴雪作並ニ舞臺監督

松田種次舞臺裝置

吉川觀方衣裳考案

一番目 **新東** 鑑式 幕

中幕 **近江源氏先陣館** 盛綱陣屋の場

大四利夫作

新作 **彩月** 島の内の夜

所作事 **越後獅子** 長唄連中

坪内博士作 **お夏狂亂** 常磐津連中

歌八番の伎 **暫** 一 大薩摩連中 幕

大猿若住の兵次子	仲新内居お呂民光	遊坂客與三郎	坂口藤三郎	梅王彌房春次	大藏女藤春次	江戶早藏人瀬	寶木早藏	妻戸太兵衛	奴舟蝶	加吹義藤	伊茂義藤	伊吹義藤	舟吹義藤	暫若口孫彦	竹下口孫彦	猿若口孫彦	源和泉屋櫻兵衛	舍和泉屋櫻兵衛	春泉屋櫻兵衛	紙人々治盛丸	佐松木盛丸			
扇	雀	成三郎	成三郎	駒之助	駒之助	吉三郎	吉三郎	長三郎	長三郎	長三郎	長三郎	長三郎	長三郎	右次	右次	右次	福助	福助	福助	鷹治郎	鷹治郎			
五貫原善六郎	荏原八衛門	古郡新左衛門	裝束師吉兵衛	北條賣る老爺	茶を賣る老爺	北條番の臣	木戸番の臣	海僧藤内	番上藤内	遊客喜之助	侍女喜之助	郎黨久馬	髭生久馬	少刀お三彌	太刀お三彌	紀國屋小春	女房照千代	妹花屋照千代	立花屋照千代	稻葉八内	龜井小金丸	波若小金丸	猿若小金丸	仲居お弟長子
九團次	九團次	齊五郎	齊五郎	右左次	右左次	市昇	市昇	魁童	魁童	魁童	魁童	魁童	魁童	章景	章景	章景	魁車	魁車	魁車	政治郎	政治郎	鷹治郎	鷹治郎	

(夜之部)

一番目 賀の祝一 幕

櫻痴居士作

新歌舞伎十八番の内 大森彦七 竹本連中 當磐津連中

河竹默阿彌作

新歌舞伎十八番の内 船辨慶 長唄囃子連中

玩辭樓十二曲の内

二番目 心中紙屋治兵衛 河庄の場

大喜利 壽 靴 猿 常磐津連中

侍女小萩	菊間五郎太	豊島平太	巡禮の女房	老女吳竹	武藏坊武	清原武	馬原	北條主計	井上時計	河内屋お	知盛屋お	愛盛屋お	狂女お	母女お	粉屋孫右衛門	和田兵衛秀	板倉周防守	丁丸三	息女桂	妻お	箱廻し嘉助	足柄左衛門	阿彦三右衛門		
小主水	菊四郎	梅之丞	梅朝	彦三郎	梅三郎	幸車	市中藏	扇雀	箱登羅	梅幸	梅幸	梅幸	梅幸	梅幸	中車	市藏	扇雀	扇雀	扇雀	扇雀	扇雀	扇雀	扇雀	扇雀	扇雀
女大名三好野	大森彦七	倉權五郎	信樂太郎	道後左衛門	成田五郎	東村金太郎	岩村主膳	巡禮の男	伊勢三郎	武藏九郎	駿河次郎	醒井主水	田方運八	舟方義子	加茂義子	猿見の太夫	息女千早	鹿島入道	妻兵衛御	角兵衛	春日の部屋おまん	郎黨兵太	逢阪彌十郎	中三郎	
幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎	幸四郎

南座額見世興行上演新作

# 新東

# 鑑

二幕五場

時 徳川三代將軍時代(寛永年間)  
處 京都

## 第一幕 四條磧

正面に三條の大橋を望んだ四條磧の體、下手に芝居小屋の側面、中央上手寄りに横ざまにうねつた柳の立木、その四邊に掛床几二三を置く。

時は春、午後。

床几には有徳な町人らしい老人、娘連れの女房、武士などが憩ひ、擔ひ茶具を据えた老爺が茶をひきぎ居る芝居の賑やかな鳴物が聞へる。下手から騒がしき人聲に送られて涙

人と疵奴が争ひながら出る。

その後芝居の木戸番二三名と大勢の男女が續く。

床几の客は喧嘩と見て散り〜に逃去る。

浪人 俺の火繩を踏潰し居つたによつて喰はしたがなせ悪い、どち疵奴の分際で三拜九拜這ひつくばつて詫びをしる。

奴 なにがおのれ、不意に喰はすとは卑怯な奴だ、この蹄の手前勘忍なんねえ、さア抜け〜。

奴は片肌脱ぎになつて身構へる。

木戸番一 こんな所で喧嘩をされては迷惑だやるならもつとむかふの磧へ行つてやつて

くれ。

奴何だと、やい貴様達も覺へてゐる、此方の片がついたらうぬの番だ、よくも木戸を突出しやがつたな。

木戸番等尻ごみする、その間に、一人の木戸番は浪人の袖を引いて上手へ去らせる。

尻尾を巻いて逃るのか、やいどさんびん、待ちやアがれ。

奴も跡を追ふて上手へ去る。

群衆も續いて上手へ去る。

下手から猿若彦作と装束師吉兵衛が出る。

彦作 喧嘩はもう鎮まつたか。

木戸番一 漸う片づきましたが、毎日のやうに芝居の中で騒がれるには困つてしまひます。

吉兵衛 何とかお上で取締つて下さらぬものでございますか。

彦作 全くどうかならぬものか、芝居に喧嘩は一番禁物でないさ、皆早く小屋へ歸つてくれ。

木戸番等は下手へ去る。

吉兵衛 それでくどいやうでございませうが今申した衣裳料の所をな。

彦作 決してなほざりにはして置きませんによつて、どうぞもう暫らく待つて下さるやうに。

吉兵衛 では何分よろしうお願ひ申します、時に太夫さん、部屋ではお内儀の手前で申しませなんだが、櫻町様のお奥から太夫様にいろくお傳言を聞いて居りますので。

彦作 いや、その話ならお預けにして置きます。

吉兵衛 まゝ、さう堅う云はずに貴めて預つたこれだけなりと、

文を彦作へ渡す。

彦作 こんなものを渡されても、私は返事はえゝしませぬ、兎に角これはお返しします。

吉兵衛 さうでもござらうが、それだけは受取つて貰はぬと私がお中老に呪まれます、御迷惑でも、どうぞ。

下手から彦作の妻おいねが出る。

彦作は驚いて文を懐中へ忍ばせ、吉兵衛は急に話を外らせる。

いかうお手間を取らせまして、では何分よろしくお願ひ申します。

吉兵衛は上手へ去る。

いね 次の出幕もよそにして、高が装束師の吉兵衛をそのやうに大事にせねばならぬのかえ。

彦作 いや、喧嘩と聞いて出たまでだが無事に済んでまアよかつた。

いね 風託らしく床几にかけて考へ込む。何をそのやうに思案らしうしておいでなさる。

彦作 衣裳料のことが心にかゝるのだ。

いね 櫻町中納言様のお奥から衣裳料の催促が参らせ候て來ましたのか。

彦作 何をいふ、そんな馬鹿なことが、

いね いねは突如に彦作の懐中の文を奪ふ、お前と云ふ人は、

彦作 情氣もよい加減にせえ。

いね その情氣は誰がさす。

彦作 文をくれるは先方の勝手、私の知つたことぢやない。

いね 白々しうよりもそんな顔が、彦作 見つともない恥を知れ。



いね 浮氣者、悪性者。

掴み合ひが始まる。

この以、上手から稲葉内記正利が出て、二人の間を引分け向かゝるおいねの腕を捉へる。

正利 都女郎は優しいが命と聞いたに、女だ

てらに何たることぢや。

いね あいたゝゝゝ、腕が折れる、あゝ痛たゝゝ、彦作どの。

彦作 もし、手荒なこととして下さりませ、

そりや私の女房でござります。

正利 なに、そちの女房か(手を放す)

いね 掴み合はうといさかかはうと、他人の知つたことぢやない、ほつて措いて下さりませあゝ痛やの。

彦作 痛かつたか、女夫いさかいは犬も

喰はぬといふに、あなた憚りさんでござります。

二人は座まじさうに下手へ去る。

正利は見送つて思はず高笑する。

正利 こりや、床几を借るぞ。

上手から女が出る。

女 有難ふ存じます、旦那様、幸茶立ての爺

が来て居りますが一服どうでござります  
正利 左様か立てさせてくれ。  
女 畏まりました。(上手へ向つて)これ、お茶一つ頼みます。

蔭で返事が聞え、やがて以前の老爺が出て茶を侷める。

二人は上手へ去る。  
上手から所司代板倉周防守重宗が奴一人を随へて出て、正利と顔見合す

重宗 内記殿ではないか。  
正利 や、周防守殿か。  
重宗 意外な所て出逢ひ申した、いつ頃京へ

わせられた。  
正利 都の春にそゝのかされてけふ逢阪山を越へたばかりでござる、ま、これへおかけ

なされ。  
重宗 (床几にかけ)さて一別以來、いつも御健詳でと申したいが、駿河大納言様の一條

以來、御家中は散々、今かうして貴殿に出逢ふても申述ぶる挨拶の言葉が御座らぬ。

正利 三代の將軍家光公の弟御が話腹を切らさるゝ世の中、これも治國平天下の爲め

とやらさうなで、

重宗 いや左様なことは、ま、聞かぬ體にして置き申さう。

正利 いかさま、貴殿は京都の所司代であらせられたな。

揚幕から板倉の家來阿彦三右衛門が二三名の組手を随へて出る。

三右衛門 殿、春日様がお尋ねの者の在所を漸う突留めましてござります。

重宗 それは頂上、やはり京のうちに。

三右衛門 八方に手分けして搜りました所案外にもこの川原に小屋を構へて猿若狂言を致すものゝ許に身を寄せて居るのでござります。

重宗 早々屋敷へ召連れるやうに、三右衛門 畏まつてござります、御免下さりませ。

三右衛門等は下手へ去る。  
重宗 内記殿、お身は母御前お福の方が此度上洛あらせられたを御承知か。

正利 さア、何所やらで噂に聞きはづつたやうにも覺へます。  
重宗 高ふは申されぬことながら、此度の上洛は内密は將軍家の御名代、女性の身を以

て天顔てんげんを咫尺しやくしやくし奉り、都みやこと江戸えどとの折合せがひの爲めに心を碎かるゝ容易ならぬ御大役おほいやく既に長くも朝廷てうていに於かせられては母御前ははごぜんを従したが二位にに叙し春日はるひの局まがらひと申す稱號しょうごうを賜はつてござるぞ。

正利 ふう、餘りあまと申せば恐れ多い。

重宗 それほどの權勢けんせいある母御前ははごぜんを持ちながら、お身みはなせその袂たもとに縋すがられぬ。

正利 母ははに縋すがつて出世しゅっせをせぬかと云はれるのか、周防守すうぼうしゆ殿どの、稻葉内記いなばうちき正利せいりと云ふ男おとこは駿河大納言しゅんがだいなごん忠長ちゆぢやうの家臣けしん中取なかつり分ぶんけ殿どのの御寵愛ごちゆうあいを蒙り、取とり分け殿どのの帷幕ゐのりに参まゐじ天下てんかに對して畏おそからぬたくみを目論めろんだ大道無道だうだうむだうのしれものとして、母ははからは勳當くんたうを云いひ渡わたされ、剩のちさへ天下てんかお構かまひの刻印こくいんを打うたれて居ゐります。

重宗 それは表向おもむきき、貴殿きでんほどの連つれれな若者わかしよを勳當くんたうしたい親おやが何所どこにござらうか、拙者しよに思おもふ旨こころもある、兎うも角かくも二條にじやうの役宅やくたくまで参まゐられぬか、けふは内大臣うちだいじんのお召めいによつてこれより月の輪つきがわの御殿ごでんへ参まゐるが、遅おそくも初はつ夜よまでには歸邸きでん致いたす。

正利 忝かたじけなふござる、どうていづことの的あての

ない旅鳥たびどり、時ときを貸かして下さりやうとなれば喜よろこんで参まゐ邸でん致いたします、然しかし豫あらかめ申まをして置おく、母ははへ取とりなしなどのお心遣こころづかひはかまへて御無用ごむいように願ねがひます。

重宗 それは拙者しよが存ぞんじ寄よりに任まかすとして、では待まち申まをすぞ。

正利 有あ難がたふござる。

重宗 は奴やつを隨したがへて揚幕あきへ去いる。上手うでから茶ちやを賣うる老爺おやぢ荷にを擔かいで出でる。

老爺 旦那様だんなさま、お茶ちやはもうお宜よろしうござりませう。

正利 遠都とんとほどあつて風流ふうりゆうなりはひがあるの、今いま一服いつぷく所望しよぼうせう。

老爺 畏おそまりました。茶ちやを立て、備そなへる。この間にさまゝな往來わうらいの人が通とほり過ぎる。下手うでからおいねが三右衛門みゑもん等に護まもられて出でる。

いね 私わがは所司代邸しよしよだいへ引ひかれるやうな悪わるいことをした覺おぼえはござりませぬ、どうぞ御殿ごでん辨わを、

三右衛門 お上の御沙汰ごさたちや、神妙しんめうに参まゐれ。いね ても私わがには何なにの咎とがも、

振切ふるきつて去いらうとするのを粗あら子が遮さかり、引立ひきたてて上手うでへ去いる。

正利 は異いしんで見送みおくる。下手うでから彦作ひこさくが慌あわたしく出でる。

彦作 おいねへ。行い手に迷まよひ老爺おやぢに突當つきたる。正利 は上手うでを指さす。彦作 は妻つまの名なを連呼れんこしながら上手うでへ馳はせ去いる。——幕まくら——

### 第二幕

#### 第一場 智恩院の客殿

正面床おもてのこ、脇床わきのこ、上手側面うでがわに高欄たからん附つの椽えん、むかふに京洛きやうらくの町々まちまちを見下みくだす、下手正面うでがわと同じく側面がわに襦じゆの出入でいり、貼床はりこ、繪襦ゑじゆ等華麗ゑいれいを極たぎめた智恩院ちえんいんの客殿きやくでんの體たい。欄干らんかんの一隅いちこくに凭よつておいねが思おもひに耽たつてゐる、第一だいいち帯おびとは別人べつじんの如ごとく御殿風ごでんかぜの美うしき粧まひ、下手正面うでがわから二人ふたりの腰元こしもとが出て四邊しへんを探たづねし求もとむる體たい。

腰元一 まあ、おいね様爰においでなされたのでござりますか。

同二 お部屋にお姿が見へませぬので、どんなに心配致したか知れませぬ。

同一 早ふお部屋へお戻り下さいますやうにいね 私は一人ごちつと爰に居たふござります、ほつて置いて下さいまし。

腰元一 でもそれでは私達がお局様からお叱りを蒙りますから。

おいねは黙つて外を眺めてゐる。正面から春日の部屋子お萬が出る。おいね様、まアこれへおいでなされませぬか。

おいねは餘儀なげに座に着く。御氣分が優れぬのでござりませぬか。

いね いゝえ。萬 では何ぞ御心配事があるのでござりますか。

いね 私はやつぱり元の我家が、萬 ほゝゝゝ、誰しも初めは皆んなそうでござります、私もお部屋子に召されました初めは、我家が戀しうて毎夜のやうに泣きました、でも月日が私の眼から綺麗に涙を拭

取つてくれました、ほゝゝゝ。

いね さうしたものでございませうか、でも家ではどんなに察じてゐますことか、定めし私を薄情者と、

萬 何のそのやうなことがござりませう、外の儀とは事かはり、お局様の御所望なり、あなた様の御出世なり、仔細は板倉様からお傳へなされましたので、育ての親御様もお喜びであつたさうにござります。

いね まア私の育ての親……萬 数々の下され物も皆おいね様をお育て申したお蔭と、それは、御満悦であつたと申すこととござります。

いね 私はどうしたらよいのか、自分に不實な心は微塵なけれど、成行はやつぱり不實な仕向けになつてしまふ、私はどうでも一度戻らねば、立上る。

皆止めやうとする。上手より春日局出る。おいねは驚いて坐す。何をむづかつてゐやる。いね はい。

萬 まだお馴れ遊ばさぬのでお淋しいのでござりませう。

春日 それも無理はない、まアもそつと膝近ふ來やるがよい。

萬 さ、おいね様、お傍へお越しなされませ。

おいねはおづ／＼春日の傍に進む。

春日 この間から公の御用繁多て染々話すことも出来なんだが、けふは打寛ろいでさ

まゝの話を聞かせませう、先づ何より第一はそなたの氏系圖のこと、父上は稻葉美濃守正成と申され、太閤殿下のお眼がねによつて金吾中納言秀秋卿の附家老として一

城の御主人、關ヶ原の戦ひの後、思ふ所あつて仕へをお辭しなされ、この西京の粟田に閑居なされたが、丁度その時そなたが誕生しやつたのぢや。

いね その私がどうして深泥ヶ池の百姓の家で育つたのでござります、母上様、私は全くお前様の、

春日 はて今もいふ通り紛れもない美濃守殿のお種、一國一城の御主を父に持ち、母は畏くも公方様のお守役、又兄の稻葉丹後守正勝は八萬五千石を賜はつて相州小田原の

城主、か様な家筋に生れたそなたになればよしや下さまに育つとも、今より心を改めて父母ならびに兄の名を辱かしめず女ながらも立派に身を立つる覺悟を持たねばなりませぬぞ。

いね はい、でも私のやうなものに逆もそのやうなことは、

春日 いえ、母が必ず教へます、江戸へ下れば千代田のお城のお奥に住ひ、直々上様に お目文字もかなふて仕詣によつては如何なる御説を蒙らうも知れぬ、これそなたは春日が娘ぢや、行末には楽しい春の仕合せが……お入、さうぢや、いねといふ名は何となふ田舎びて聞えがわるい、今から春と改めやう、皆もさう心得てたもれ。

萬 お春様とは御容貌にお適はしいいお名でござります、お春様、お目出度ふ存じ上げます。

番僧 おいねは浮かぬ體である。下手の禪の外から番僧の聲が聞へる。お女中衆、お取次を頼まず。

腰元一 腰元の一が禪を開ける。何事とござります。

番僧 所司代板倉周防守様御見舞のため御入來にござります。

腰元一 お控へ下されませ。(春日に向ひ) 所司代板倉周防守様御見舞の爲め御入來にござります。

春日 これへお通し申しや。腰元一 (番僧に向ひ) これへ御案内下さりませ。

番僧 は、番僧去る。やがて板倉周防守が件の番僧に導かれて出る。板倉は一揖し殿の席につく。お萬、腰元、番僧去る。

春日 そなたはこれにおやれ、周防守殿にて妾容だけはどうやらお奥らしう見えて参りました、名もけふより春と改めました。

重宗 ほう春殿と、なにさま禪たけて昨日とは別人と思ふばかり行末の御世話を見るやうな。

春日 なふ周防守殿、この春日が仔細あつて夫にはなれ父御伊賀守殿の御世話にて上様の

お乳の人に選まれましたは二十年の昔、今また御子息の其許がお骨折にて絶えて久しい娘に廻り合ひましたは重ねの御恩、春日厚うお禮を申ます。

重宗 痛み入つた御挨拶、拙者こそ父とお局の由縁によつて大奥萬端何くれと御配慮を蒙り御恩は口舌に盡されませぬ。

春日 思へば二十年の月日には、世の中も人の身も變れば變るものでござりますな。

重宗 誠に養ひ君は三代の公方として征夷大將軍とならせ給ひ、徳川の天下の礎は定まる、これも偏にお局の盡忠による所と、春日 あ、もし、それはちと御褒詞が過ぎます、ほゝゝ。

重宗 時にお局、お春殿と目出度き御對顔の序に、今一人御對顔を願ひたい人がござるが。

春日 して、その御人は、外でも御座らぬ御次男の内記殿。

重宗 いや、それならばふつとお斷り申ます。御勘當は豫て承知致し居るが、上様に一再ならずお取なしのお言葉があつたと承はる内記殿のこと故。

春日 一周防殿情に上様のお名を出しては  
恐れ多ふござります、二度とお言葉は御無  
用に願います。

屹といひ放つ。

重宗は是非なく口を嚙ぐ。

おいねは耐へかねた體で、

殿様……あの板倉様、お願ひ申しま

した、あのことは、

重宗 あの事とは、

いね あの彦作殿の、

重宗 (はつとして紛らすやうに) 養ひ親の彦

作とやらへは萬事此方で取圖らひ、仰せの

金子も遣はし置きましたれば、決して御懸

命は御無用。

いね でも何とか返事が、

重宗 いや、喜んでお受け致すとの返答であ

つたと、

いね え、喜んでお受けするとは、私との縁

を切るといふ。

春日 これ、そのやうに端下ない物いひはせ

ぬものぢや、最前も申す通り今までのこと

は何事によらず、ふつと思ひ捨てねばな

りませぬぞ。

いね でも……はい……

そつと涙を拭う。下手から腰元の一

が出る。

腰元一 井上主計頭様が火急に御面談申上た

いとて御入來にござります。

春日 これへお通し申しや。

腰元の一 畏まりました。

下手へ去る。

重宗 主計が何事か聞込んだと見えますな。

春日 大方たま公卿衆が江戸の悪口でも申し

たのでござりませう、は、は、は。

井上主計頭正就が下手から出る。

正就 や、周防もござるとは丁度の所へ参つ

た、お局、早々江戸へ引上げませう。

春日 何故でござります。

正就 この上べんくと公卿どもの鼻息をう

かどつて居つては恐れ多くも將軍の御威光

にかゝはります、けふもけふとて上様をば

北條泰時にたとへて、

重宗 主計殿、

正就 い、やそれがしはいふ、姑婆アを見る

やうに口ばかりつべこべと叩き散らす長袖

どもは、關東の武威を以て嚇しつけるが第

一だ、それには上様御名代たるお局が袂を  
拂つてきつと江戸へ引上げるのが彼奴等  
に取つては何よりの目薬といふやつだ。

春日 武威を示して濟むことなら女の私に御

名代の大役は仰つけられますまい、一歩過

ごさば江戸は朝敵の汚名を被らねばなりま

せぬ、そこを程よく取なして、大内の御機

嫌をなほさせますが、此度の役目の眼目で

ござりますぞ。

正就 それを存せぬ正就ではをりないが、聞

きやアやつぱり聞腹が立つ、え、いまく

しい鍋取り公卿め。

春日 女の私に武變者の主計殿を添へられた

上様の頑軟よるしきを得たお圖らひが染々

感腹いたされます。

正就 冷評かしめさるな、三河武士はみんな

かうしたものさ。

重宗 は、は、は、なまじ公卿などを見るから

腹が立つ、旅のつれづれは柳馬場か六條に

かざる、なま主計西京は日本一の女所ぢや

正就 よしてくれ、俺は京都の女は大嫌ひだ。

重宗が眼でおいねを教へる。

や、お娘御は京育ち、こりやあやまつた、

あやまつた。

春日 ならば主計殿の奥方にも思ひました  
が、こりや御縁がござりませぬな。

正就 いやお局の娘御なら京育ちが蝦夷育ち  
でも忝なく頂戴しますぞ。

春日 ほ、う。

重宗も笑ふ。

おいねは不快な心持になる。腰元の  
二が下手から出る。

腰元二 三條内大臣家のお使として諸大夫岩  
村主膳様がお越しにござります。

春日 ほんに、けふは内臣家から何やら觀せ  
うといふお先觸があつた、兎もあれこれへ

腰元二 畏まりました。

正就 またしてもお鍋取り公卿か、拙者は御  
免蒙らう。(立かける)

春日 まあ、さう仰せられずと下におゐてな  
され。

下手から腰元の二に導かれて岩村主  
膳が出る。

主膳 昨日主人より書面にて申上げました通  
り、お局の御旅情お慰めの爲めこの頃都に  
流行りまする、猿若の歌舞伎を御覽に入れ

まする、臨時の舞臺を當寺の廣間にしつち  
へましたれば、何卒見所まで御出ましを願  
ひまする。

春日 恐れ入つたるお心盡し近頃過分に存じ  
上げまする、早速一同を召連れて拜見いた  
すでござりませう、内府様へよしなに御禮  
を仰上げられ下さりまするやうに。

主膳 委細畏まつてござりまする、では見所  
にお待受け申上げまする。

主膳は下手へ去る。

春日 お萬に皆を連れて見所へ参るやうにい  
や

腰元二 畏まりました。

春日 周防殿、見物なされませぬか。

重宗 お招待致しませう幸計お身もお見やれ  
小面倒な眞平よしにする。

春日 そりやなりませぬ、努めても御覽なき  
るのがお使ひの役目の一つでござります。

重宗 お局の申さるゝ通り、それが使者の禮  
儀といふものぢや。

正就 西京まで踊りの見物には來ぬが、禮儀  
となら是非がない、参るとせう。

正面からお萬を先に大勢の腰元出る

萬 お局様、有難う存じまする。  
春日 お春、さ、來やれ。  
立上つて促す。

おいねは餘儀なく立上る。  
上手の櫓より稻葉正利が窺ふ。  
重宗が眼顔で制す。――廻る――

第二場 同 舞臺

廣やかな書院、正面を金屏風にて圍ひ、下  
手に青竹の欄を設けて橋掛かりとし、上手側  
面に御簾を垂れて見所に宛てゝある。

正面に歌うたひ、三味、鼓、笛の唯  
方が居流れる、櫓がよりから野上の  
宿の長(女)に扮した道化形俳優大藏

彌藤次が出て、名告座に立つ。  
長 斯様に候ものは美濃國野上の宿の長にて

候、わらはあまたの上臈を持ちて候、中に  
も花子と申す上臈は幼き時より是に持ちて

候が、此人は扇子にすきて、明暮扇さばく  
りをのみ致すによつて、扇子に付て仔細あ

りとして、花子宛女と皆々仰せられ候、それ  
につき、此の春都より吉田のなにがしと申

す御方東へ御下り候が、わらはが所に御宿

りあつて、かの花子に御酌を取らせられ、  
何がし殿の扇子に取りかへさせられて御下  
り候らひしに、斑女その扇子にながめ入り  
今は人の酌とて召さるれども、遂に参ら  
ず候間、長がわざにてありとて、皆々わらは  
をば御叱りなされ候て迷惑致す、色々意見  
を申せども、今は早わらはが申す事をも聞  
き申さず候程に、花子を置きても詮なく候  
間、追ひ出さばやと思ひ候。いかに花子疾  
う参り候らへ。

花子に扮する彦作出でシテ桶のほと  
りに下に居る。

此間もさういへ異見申せども御聞きなく候  
まし、今よりしてはわらはが所には置き申  
間敷く候、何方へなりとも急いで御出で候  
らへ、わらは申たがひ申す上は、此家の内  
には叶ひ申すまじ、急いで御出で候らへ、  
あゝさても腹立や、面憎や。  
花子の持ちたる扇を取つて打つける  
此體になりてもまだ扇子さばくりを致すか  
腹立やへ。

と入る、花子扇を取上げ憂ひの科、  
地の歌になる。

唄へげにやもとよりも定めなき世と云ひ乍  
ら、うき節しげき河竹の、流れの身こそ  
悲しけれ。分け迷ふ行衛も知らず濡衣、野  
上の里を立出て、近江路なれと憂き人に別  
れしよりの袖の露、そのまゝ滑へぬ身ぞつ  
らき。

憂ひを含んだ、静かなる道行の振り  
あつて中入りする地の調子が改まる  
唄へ踊るぞ名残り富士のねの、行きて  
都に歸らん。

吉田の少將に扮する猿若金の助、二  
名の供と太刀持を随へて出る。

少將 是は吉田の少將とは我がことなり、さ  
ても我過ぎにし春の頃東へ下り、はや秋に  
もなり候へば、唯今都に上り候。

唄へ都をば霞と共に立出て、しばしほどふ  
る秋風の、音白河の關路より、又立歸る  
旅衣、都にこそは着きにけれ。

我宿願の仔細あれば、是れより直に糺に参  
らうするに候、皆々参り候らへ。  
少將はワキ座に着く。

唄へ春日野の雪間をわけておひ出くる、草  
のはつがに見えし君かも。よしなき人に

別れ衣、雲の旗手に物おもひ、うはの空  
にぞあくがれ出て、身をいたづらになす  
ことを、神や佛も憐みて、思ふことを叶  
へたまへや。

花子籠を持ち出て振りあつて神に  
祈る科。

少將立上る、供の一人進み出て、花  
子に近寄る。

供の一 いかに狂女、何とてけふは狂はぬぞ  
面白ふ狂ひ候らへ。

花子 うたてやな、あれ御覽せよ。  
唄へ今まではゆるがぬ梢と見えつるも、風  
の誘へば一葉も散るなり。

狂へとな仰せあり候らひそ。  
供の二 さて例の斑女の扇は候。

花子 なに扇とや。  
唄へ憂き人の、かたみの扇手にふれて、う  
ちおきがたき袖の露。

花子 ふるごとまでも、思ひぞいづる、  
唄へ月重山に隠れぬれば扇をうつてこれを  
たとへ、花琴にちりぬれば雪を集めて  
春を惜しむ、淋しき夜半の鐘の音に、明  
けなんとして別れを催し、又狩寝になり



ぬるぞや。

供たからからんで狂亂まうらんの體てい、亞ついて少將すうしやうにからむ。

唄うたへ閨帳紅閨けいせうこうけいに枕まくらならぶるゆかの上うへ、なれしすすまのよすがらも、同穴どうくつの跡あと夢ゆめもなし、よしや思おもへばこれもげに、逢あふは別わかれのさだめとて、世よをも人ひとをも恨うらむまじとは思おもへどもうらめしや。

かたみにのこる扇あふぎより、猶なほうら表おもてあるものは人心にんしんなりけるぞや。  
怨うらみみかこちて泣なく。  
この時御簾ときみすずりのうちに泣なき聲こゑ聞きえ、おいねが簾すずりを掻かき分わかけて舞臺まいたいへ出でる。花子はなこの彦作ひこさく始め皆驚みなおどき演伎えんぎを中止ちゅうしする。

彦作 や、そなたは。

いね 彦作殿。

取總ととねつて泣なく腰元こもとすけ數名かずな出いて引分ひきわける

いね お春様。

お春様。彦作殿。

おいねを引立ひきたてんばかりにして、御簾みすずりのうちに去さる。彦作ひこさくが追おはうとするのを他の俳優たけいゆう等ら

### 第三場 客 殿

が遮せり止とめる。——廻まる——

舞臺ぶたいは第一場だいいちばうと同じ。

下手したてからおいね取亂とれみだした體ていで出いて泣なき伏ふす。お萬まんと數名かずなの腰元こもとついで出いる、その後のちより春日かすがひの局くわ昇のぼりした體ていで出いて皆みなを去さらせる。

春日かすがひ お春はる、今のあのしだらは何なにたる事こと、仔細さいしゆを眞直まことに申まをしませい。

おいねは泣なき入いる。  
母ははの面目めんめくを踏ふみつけたあの所業しよごふをするからは覺悟かくごがあらう、泣ないておたては濟すまぬ、さ、はつきりと申まをしませい。

いね 母はは上様じやうさま、あの猿若さるわが彦作ひこさくは私の夫つまでござります。

春日かすがひ そなたは夫つまを持つてゐやつたのか。  
驚おどく、下手したてから重宗じゆうしゆが出る。

周防殿すおうだん、娘むすめは俳優風情たけいゆうふうじやうの妻つまでござりましたのか。

重宗じゆうしゆ 御心中ごしんちゆうを推おして明あらさまには申まを上げ兼ねて居ゐりましたが、いかにも御息女ごめいよめは、春日かすがひ 周防殿すおうだん、その上うへを聞きかせて下さります

るな、所詮しよせん下賤げせんに育そだつたもの、さもしいとともあらうかと思おもへばこそ、第一だいいちに家の氏うぢ素性すじやうを教しへ、行末ゆくすゑの仕合しあせをも含ふめるやうにいひ聞きかせ、過ぎたことはふつと思おもひ捨てよと諭さとしましたに、これお春はる、そなたは今の春子はるこの子こぢや、仕詰しぢめによつては幾萬いくまん人に敬うやまひしづかれる身みとならぬものでもなく、さはないまでも大名だいみやうの北きたの方かたにはならぬ身みぢやぞや、さ、改心かいかんはたつた今いま、今いまならまだしも身の耻はにかみを包かみ清きよむるすべもある、心こゝろをすゑて返答へんたうをしませうぞ。

上手うでの廣椽ひろぐらから稻葉内記いなばないき正利せいりが出る。妹心いもこゝろにもない返答へんたうを迂濶うがくにするな。

正利せいり 妹いも、え。

春日かすがひ 許ゆるしも得えいで春日かすがひの座敷ざしきへ踏ふ込むとは理り不盡ふじん千萬せんまんな、とつと出いませい。

正利せいり 無斷むだんで座敷ざしきへ踏ふ込むと、欺あざいて人の子を奪さらふといづれが理不盡りふじんでござらうか。

春日かすがひ そちや勘當かんだんの身みの上うへぢや、母ははに對面たいめんのかなふ男おとこでない。

重宗じゆうしゆ それがしが沙汰さたするまで、必ずかならず別間べつまに待まちたれいと申まをしたに、

正利 御芳志は忝けないが、母として、子として對面することは正利ふつと思ひ切り申した、天涯無住あかの他人の一浪人が、初めて知つた妹のために推参したまで、母上、いや春日のお局、稻葉内訛正利と申すこの男の前で、見事これなる女を我が娘とおいやるか、承はらう。

春日 よし腹はどうあらうとも、稻葉美濃守正成の種と生れたからは、私が娘に相違ない。

正利 生まれ娘、妾腹の娘、然かもその妾は本妻の怒りにふれて追出され、生れた娘は人知れず洛北の農家に渡されたとはい、よもお話はなざるまい。

いね そんなら私は母上様の眞の子ではござりませぬのか。

重宗 妾腹の子さへ我子として引取るゝお局の御意悪心が、實の我子の上にはどのやう深からうが、改め申すまでもない、内訛殿、そこを思ふて必ず癖見心を持たせらるゝな。

正利 癖見……癖見も持たうでか、母は私を天下のお拂ひ者にしてくれた、そもく

正利が分別持たぬ童の頃、駿河大納言忠長卿の近侍に參らせたは誰であつたか、正利が忠長卿に忠を盡さず、あることないこと内進するほどの不所存者であつたら、遺れ利根の若黨として、勘當もされず、今頃は兄貴並の小大名にまつり上げられてゐるのであらうが、正利元來片意地者、二俣武士は大嫌ひぢや。

春日 天下を治むるには智略經綸を基とする時の勢ひによつては恐れ多くも將軍の弟君さへ、命をちぢめさせらるゝことを思ふて見よ、そちの勘當も諸侯に籠を示す母が涙の御奉公、親子の情にほだされて、公方様の御守役が勤まらうか、こな白痴者め。

正利 成程、夫を捨て、乳呑子をふり残してまで出世の綱に取組り、今は五尺の男子をくゞつのやうに指頭であしらう男まさりの女丈夫の眼から見れば、正利などは白痴であらう、よしそれとても苦しうないが、たゞ一人の妹だけは、その女丈夫にはしたうない、こりやおいねとやら、そちは義理の母につくか、二世かけた夫につくか、しかと思案せい。

いね 母上様の思召し、あの人の思惑、あゝ私(泣く)上手の椽から、正就が彦作を引立てる御息女に尾籠を働いた無禮者め。

正就 突進。

いね 彦作殿、私が悪うござんした、勘忍し下され。

二人取組つて泣く。

正就が意氣込むのを重宗がとめる。正就は正利を見て思ひ入れある。

彦作 所司代様のお諭して一旦は諦めたが、どうしてあなたが忘れやう、これおいねそなたもやつぱり同じ心であつてくれたのかいね、あい。お局様、どうぞ私を川原へお戻し下さいまし。

思ひ切つた體で春日の前に平伏する正利 よふ申した、青雲の梯を攀づるばかりが人ではない。

春日 市井の塵に埋もれて牛甲斐もなく生きたいとは。おいね、稻葉家の縁も今限り、春日の子とは思はぬぞよ。

いね え、そんなら私は元通り、おゝ彦作殿。

彦作 女房(春日に)有難うござります。

正利 それでこそ將軍召せども出座せず、半世を野に隠れたる父上のお心に適ふ。何の出世した所て高が公方の弄り物になるが行止まりぢや。

春日 狼りに上様の御名をさみする不届者、さらぬだに都と江戸の御中らひ、穢やかならぬこの頃、彼様な不所存者が王城のあたりをさまよふては、江戸の天下に如何なるさわりを引起さうも圖られぬ、周防守殿、お身は所司代のお役柄、何事も天下の御爲め殿しい御成敗がなふては叶ひますまい。

殿然といひ放つ。重宗はその意を曉り、餘儀なき體。

重宗 所司代板倉周防守重宗役儀を以て申渡す、無宿の浪人稻葉内記、唯今限り京都お構ひ、洛外三里の外へ退去致せ。

正就 周防、それは餘り、現在お居の、春日 いや、これでこそ止しい御政道でございます。

重宗 憂ひを忍ぶ體。正利は冷やかに嘲笑ふ。  
重宗 猿若彦作、その方には穢を許し、歌舞伎の司を申付くるぞ。

第四場 智恵院三門前

春日 満足の體、彦作、おいね、喜んで平伏する。  
廻る

上手 針めに智恵院の三門、よき所に亭々たる松と櫻の立木、夕暮時。

上手から彦作とおいねが出る。

彦作 これ、鳥渡待ちや、あんまりの嬉しさに、何も忘れて我家へ戻らうとしたが、かうなつたのも皆祇園様のお蔭、この足で直ぐお禮詣りをせにやならぬ。

いね ではお前は祇園様へ願をこめて下されたのかえ。

彦作 願籠め所か、一座には内々で日参をしたのだ。

いね 嬉しい忝けない、あゝ私は今始めて夢からさめたやうな、上の方の暮しは結構な羨ましいものと思ふてゐたが、さてその中へはいつて見ると、いふこともすることもあると皆裏と表があつて眞と嘘と怨と情と義理と見得とが、かうくかうく入り亂れて何所をどう捉まへてよいのやら、あゝ、もう私や辛氣ふて、

彦作 おゝさうかく、

肩を擦つてやりながら、

それを思ふところとどもの暮しは氣樂なものぢや、思ふことは藝道一筋、客が喜べばこつとも喜ぶ、あとは食ふて癪て仲よふして、時々喧嘩はするけれどな。

いね 其もお前いとさきの私の格氣から、もうく其格氣もぶつゝりと、おゝさうぢや

お禮詣での序に祇園様へ斷物にするわいな彦作 ハハ……それがよく。

二人上手へ行きかける時、上手から正利が出る。

いね おゝ兄様。おゝ、仲よぶ暮せよ。

彦作 やつぱり京都お構ひでござりまするか。いね さうしてあなたはこれから何處へ、

正利 徳川の息のかゝらぬ所へ行く、なかに花は江戸や京に限りはせぬ、蝦夷でも咲く筑紫にも咲く、唐朝鮮にも咲くだらう、

花道へ行く時、三門に春日の局が出て見送る。

鐘の音。落花がヒラ／＼と散る。  
幕

# 編輯後記

松本泰三

新築なつた南座は浮城の如き雄姿を鴨東に聳峙して、昔の佛といつては漸やく頂部樽邊に俛ばすばかりの變現、堂々たる最近代式建築の美装を凝らして四條濱に曬出してゐる。

この南座は愈よ三十日から東西大合同の顔見世興行と共に開場する。本號發賣もその初日には是非間に合はせよとの嚴命一下、編輯室は忽ち鼎沸忙殺、寫眞編輯、廣告原稿の整理、果ては本文の初校、再校と次から次へ——給仕が置いた一碗の茶を喫する暇間もない。机上の全面積は紙また紙に圍重される。さつきから、ひどく邪魔ツ氣に感じられてならないこの茶碗をさへ除けてみやうともしない。たゞ紙とペンと字をみつめるばかり、その癖にがく冷へきつた茶の埃が氣にかゝる。

とにかく編輯後記までこぎつけて肩荷がおりた。特輯にふさはしく口繪の増刷、記事の豊富、特別記事等、かならず諸彦の御満足を得ることゝ信じて疑はぬ。殊に口繪寫眞の面積擴大を計つた事はその第一例であらう。

伊原、渥美、河竹、中内、飯塚の諸氏等東京劇文壇の大家の顔を描へ得た事は、なによりの悦びでまた本號の誇りである。京都からは島博士を初め、林

成瀨、高谷、森の諸氏に、大阪では富田、渡邊、倉田、吉本、木谷の諸氏本誌には始めての新村博士の玉稿を頂いて愈よ内容の充實、以つて斯界の權威を確保した感がある。飯塚氏の「顔見世興行の起縁」は顔見世を經濟的見地から述べられてゐるのは面白い。京都の堂本寒星氏は南座の建築と開場の繁忙の中とは知りつゝ御無理なお願ひをして「南座沿革史」の執筆を得た。同氏は、こんど南座の新築を記念して單行本「京都の歌舞伎」を發行されてゐる、これも諸彦についてながら御薦めする。

顔見世の記事ではまだこの他に、藤井博士、綿貫六助の二氏から執筆を願つてあるが、頁の都合上残念ながら割愛していただく。何とぞ悪しからず。この他、北村筆子氏から「ひどい目に逢はなかつた話」で渡歐中の感想文を載いてゐるが、これも編輯の都合上次號に掲載を願ふことにした。

次に新年號の豫告だが、どうも豫告といふやつは變更しがちでいかん。「道頓堀年鑑」の編纂論もあれば、「文樂座號」の説もある。そうかと思ふと、「道頓堀十年史」といふ一十十日や二十日では出来上りさうもない話が出る。あらましの豫定は立てゝあるが發表する處まで至らぬ。

尚ほ本顔見世號のため、錦繪その他「昔の顔見世」の記事で南木氏に少なからぬ御迷惑をかけた。末筆乍ら多謝。

昭和四年十二月一日發行

月刊『道頓堀』第四年第三十九輯

- ◇ 誌代は前金でお拂ひを願います。
- ◇ 郵券代用は一割増にて御注文を願ひます。
- ◇ 註文を願ひます。
- ◇ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

## 廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島三丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾五錢 (郵費五厘)

昭和四年十一月三十日印刷  
昭和四年十二月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市東區船場橋之町一丁目

大阪市南區久左衛門町八番地  
發行所 道頓堀編輯部  
電話(二四〇番) 六六五番

緩帳  
フシ

劇中真織

留換國旗

梅原商店

神戸市

楠利西門

番五一六一町元

電話

主の笑顔に  
ついでに  
返され

飲めぬわたくしも

酔はされた

天下  
火銘酒

シ  
ラ  
ユ  
キ

白雪



根津 伊丹 灘

小西本店

南唐沿葬

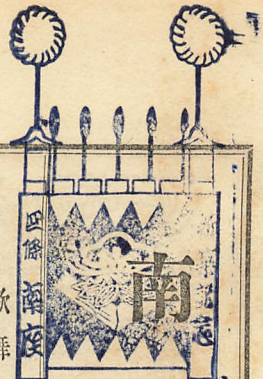


行禮世因









南座  
世興行

沿革史

七つの櫓の變遷

堂本寒星

歌舞伎の序幕

江戸時代の初頭、慶長八年四月のころ、出雲の阿國が大社修覆の爲め勸進の旅に出て、京へ現れて念佛踊を踊つた當時四條河原（現在南座のある界限、賀茂川から大和大路全體の古い總稱）には既に六條狹斜（島原遊廓の前身六條三筋町の廓）のしのぶ、佐渡島の女歌舞伎、日暮小太夫、説經與八郎の説經座があり、女歌舞伎には未だ一定の舞臺といふものがなかつたから、能舞臺をそのまま、裝用し、周圍を竹矢來で仕切り野天で見物せしめてゐた。

阿國のそれも所謂女歌舞伎の一つに該當する譯だが、阿國歌舞伎では最初の念佛踊からや、こ踊、かぶき踊、物真似づくしと短日月に長足の進歩を遂げ、斷然女歌舞伎の群を抜いたので、後世阿國を以て女歌舞伎の始祖と呼ぶやうになつたのであるが、これらの女歌舞伎は四條河原を始め、五條河原三條繩手の東、北野その他洛中洛外到る處に散在してゐたの

で、當時京の所司代であつた板倉伊賀守勝重は、女歌舞伎、物真似興行を取締る必要から、元和年間に四條河原の東部一角を劇場街に指定し、此處に七つの櫓を公許する事となつた。今日の南座は實にこの七つの櫓の一つで、今から凡そ三百十有餘年以前のことである。

この櫓といふのは城廓を形取つたものと言ひ傳へられ、入口の上部にあつて家紋を染抜いた幕で包み、前面二角に紙の幣を、上部に數本の槍を横たへて、これを以て興行公認の表徴としたもので、今日でも南座が櫓を有し、顔見世の際には表口に竹矢來を組み、劇場を芝居と呼び、見所を土間と云ふのはこの遺風で、舞臺の屋根は板又は柿葺で張つたから、歌舞伎劇場の落成を一に柿葺落とも稱してゐるのである。

七つの櫓

元和の七つの櫓の名稱は、遺憾ながら今日傳はつてゐないが、遊女の街頭進出はやがて風俗上に弊害の甚だしいものが



延寶時代四條河原と下部左端

あつたから、寛永六年十月全国的に女歌舞伎、女舞、女淨瑠璃を停止され、新たに興つた若衆歌舞伎も承應元年禁止後、野郎歌舞伎がこれに代つたのであるが、明暦二年には遂に京大坂の芝居が取崩しを命じられた。

然し間もなく寛文八年に村山又兵衛の請願によつて七つの櫓の復興を見た、當時の名代は村山又兵衛、都半太夫（後、都萬太夫）早雲長吉（後、早雲長太夫）龜谷衆之丞、絲槍權

三郎、布袋屋梅之丞、蛭子屋儀左衛門（後、夷屋吉郎兵衛）で、櫓の位置に就ては正確な記録はないが、種々の資料に據つて推考すると、四條通（中の町）北側に二座、南座に三座大和大路（二十一軒町に）二座あつたと見るのを妥當とするだがどの座がどの名稱であつたかといふことは、これまた記録がないから判明しない。

七名の名代は何れも當時著名な俳優の名稱であつた譯で、爾來永く世襲となり、この名代でないとい興行を許されなかつた、それで元和の七つの櫓の名代も、恐らくこれらの人々の祖先だらうと云はれてゐる。最もこの七名が悉く歌舞伎を興



明治時代の南座





(座南が 六のつ 櫓 (八版額を被せ大もの) のも)

行してゐたとは断じ難い、それは蛭子屋儀左衛門には特に仕  
 方舞物眞似、早雲長吉には蜘蛛舞物眞似と指定してある點から  
 見ると、それ／＼専門の技藝を賣りものとしたらしく思は  
 れる。

### 最古の劇場

さて七つの櫓のうち、四條通南側の三座中西端部に位する  
 劇場が今日の南座で、この座は先にも云つたやうに元和以來  
 儼然と同じ位置に在つて、日本最古の劇場たる誇を有してゐ  
 る譯である。

南座が始めて元和に建設された時、その名代を都萬大夫と  
 名乗つたか、早雲長太夫と呼んだかは不明だが、文化以後明  
 治初期までは「南側の芝居」と呼び、都萬太夫と布袋屋梅之  
 巫の二つの名代を名乗つてゐた、一座が二つの名代を有して  
 ゐるのは、櫓の減少から起つたことで、都萬太夫の名代は南  
 座とは最も關係が深かつたと見へて、古番附に據ると元祿、  
 寶永時代にはこの名代を名乗つてゐる、だが延享には都萬太  
 夫も一寸北側西角の座へ移轉してゐるのである、この名代の  
 移動は時代によつて七つの名代が悉く行つてゐる京都にのみ  
 見る不思議な現象だが、これは要するに京には名代即ち櫓主  
 座主、即ち芝居の所有主、座本即ち直接の興行主の三つがあ  
 つて、各々別人であつた關係からであらう。

## 極盛時代

寛文から延寶までは僅かに數年に過ぎないが、延寶になると大和大路の一座が何時しか廢止となつて六つの櫓となつてゐる、この六つの櫓は元祿から享保へかけて持續されて來たが、興行としては歌舞伎と操が例年二三座づつ、同時に打つづけて來たらしい、先づ延寶の名代、座本を擧げると、四條北側に東から村山又兵衛、薩摩淨瑠璃、南側に東から日暮小太夫、嵐三右衛門、虎屋喜太夫、大和大路に布袋屋梅之丞があり、櫓紋による推定だから村山座、布袋屋座の外は座本の名稱になつてゐる。

このうち虎屋喜太夫座は南座で、當時は操座らしく思はれるが、元祿になると先にも云つたやうに都萬太夫座を名乗り近松門左衛門が未だ竹本義太夫と提携しない以前、三十篇に餘る名脚本を上場したのはこの都萬太夫座と早雲長太夫座で名優坂田藤十郎は貞享から元祿へかけてこの座の座本であり近松の傑作は萬太夫座の舞臺で藤十郎の神技によつて、愈々その光輝を放つたのである。

次に正徳の名代を見ると村山又兵衛、布袋屋梅之丞、夷屋松太夫、都萬太夫、松本庄太夫、藤田孫十郎といふ名稱が記録されてゐるが、延寶から享保へかけては賀茂川の納涼の最も熾盛を極めた時代で、例年六月七日から川開きがあり、月



(藏氏屋來本堂) 圖伎舞歌山東



(筆 學 應 山 圓) 居 芝 の 側 南 條 四 の 頃 歴 實

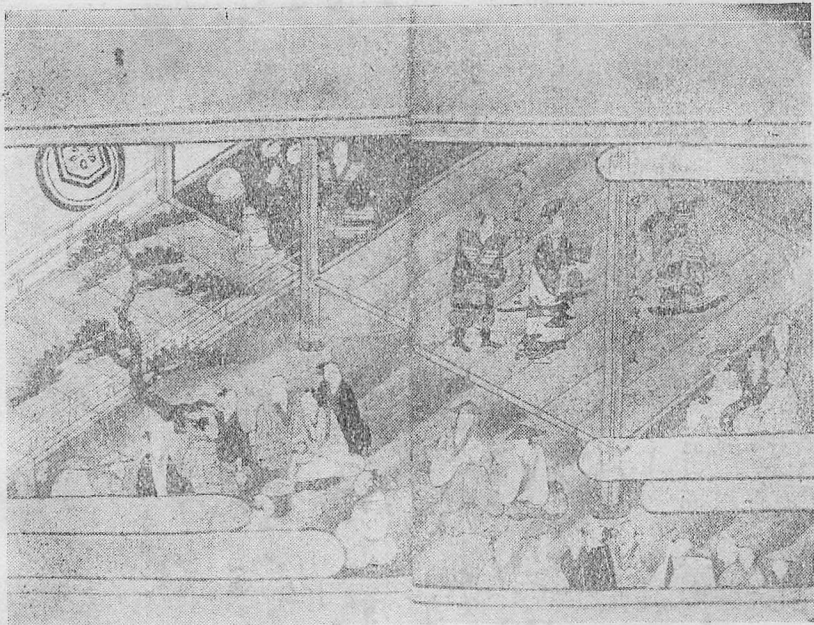
の十八日までは四條河原を中心として三條松原間は見世物や水茶屋で素晴らしい盛観を呈したのである。そして當時四條河原には主として歌舞伎、物真似盡し、舞、からくり、淨瑠璃、説經その他の見世物が流行したとある。

### 三 度 の 大 火

享保から寛保へかけて四條河原は引續いて三度大火に見舞はれ大打撃を蒙つた、最初は享保九年五月十日五ツ頃、北側の芝居から發火して芝居六座が悉く焼失した、然し顔見世に間もないことであり、當時の建物が未だ板葺屋根であつたら、十一月には復興して顔見世の蓋を開けたが、六年後の享保十五年二月十五日の夜五ツ過に、今度は大和大路の水茶屋から火を發したのが大火となり、近接してゐた宇治嘉大夫の芝居へ飛火し又復六座を焼失した、これから板葺屋根が瓦葺の本建築と變つたのであるが、十年を経た寛保元年十一月の大火のため、三度災みたびわざひされるとそれ以來大和大路の芝居は廢絶して了つたのである。

### 三 座 から 一 座 へ

かくして寶曆、明和を迎へると淨瑠璃おやどりや操芝居あやどりが漸やく廢れ、歌舞伎のみが獨り繁盛し、従つて操や淨瑠璃専門の



(藏氏助福村中) 圖 伎 舞 歌 國 阿

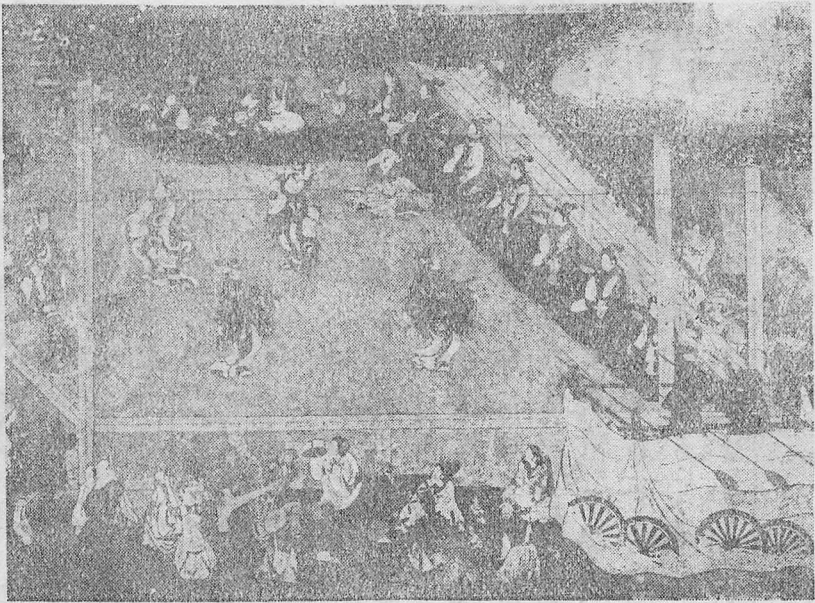
芝居が自然に淘汰されし櫓の數も次第に激減し、南側に「南の芝居」北側に「東の芝居」「西の芝居」が鼎立する状態となつた。

然し一方この時代には芝居茶屋が新たに生れて、廢絶した芝居の迹へ軒を連ねたから、四條河原の繁華の程度は寛文の昔に比し決して遜色を見なかつた、當時の芝居茶屋としては榊半、石わ、はりまや、さかいや、扇市、かいや、中上、錦屋、角わ、舛五、菱屋、松屋、島屋がその主なるものである。寛政六年には又た大火があつて三つの櫓を燒失した、そして文化文政になるといつしか「西の芝居」が廢滅して「南の芝居」と「東の芝居」が残つて、所謂「京の四季」の櫓の差向ひといふことになつたが、文久三年の祇園大火に又復類燒したのであつた。

### 明治大正期

文久の火災後新築した二座は、明治を迎へると「南側の芝居」(名代都萬太夫、布袋屋梅之丞)「北側の芝居」(名代龜谷衆之丞、早雲長太夫)を名乗つたが、明治三年六月四條河原の大火で燒失し、十月下旬新築竣成、十一月には南側の芝居は實川延若(先代)、中村宗十郎、尾上多見藏(先々代)一座北側の芝居は實川延三郎、市川右團次(齋入)、三樹大五郎一座で記念顔見世を興行した、當時芝居茶屋には伊勢市、堺屋





(藏氏象印本堂) 圖 伎 舞 歌 女

輪五、都、江戸屋、柳屋、志満屋、一源、枳屋、矢倉などがあつたが、明治廿年七月に南側の芝居、十一月に北側の芝居が又た改築を施し、南が中村宗十郎、嵐璃寛、嵐吉三郎（先々代）一座、北が中村雀右衛門、嵐吉三郎、中村鷹治郎一座で落成記念興行を開催して間もなく、北側の芝居は同廿六年五月、佐々木巳代藏、島谷重助の座本時代に遂に廢止となり「南の芝居」のみが唯一つ最後の櫓として殘留することゝなつた。

この「南側の芝居」が明治卅九年安田彦三郎の座本時代に當時の松竹合名社白井松次郎、大谷竹次郎兩氏の手に入り、新たに南座と呼んで、中村鷹治郎、市川右團治（齋入）、中村福助（梅玉）一座で、其の十一月松竹へ移つて最初の顔見世興業を開き、大正二年又復大規模の改築成つて十二月一日から中村鷹治郎、中村梅玉一座へ東京から市川段四郎父子と中村明石を迎へ東西合同の顔見世を興行し、今秋松竹土地建物興業株式會社の手によつて、鐵骨鐵筋混凝土作りの日本風計樣式の建築成るまでのことは、普く人の知る處であるが、江戸で始めて櫓を許された寛永元年、大坂の承應元年に比して、京都の櫓は尙數年以前に溯り、三都を通じて一番古く、七つの櫓が順次淘汰されて六つまで廢絶したなかに、唯一つ南座のみが三百十有餘年を、昔のまゝの位置に傳へられて來たことは誠に京都の誇とすべきであらう。



# 京都南座改築記念出版

堂本寒星氏著 藤井紫影博士・伊原青々園氏序  
堂本印象畫伯裝幀

木版數度刷金泥帛表紙・天金函入頗美本  
三色版、コロタイプ、寫眞版四十數枚、挿圖數十面

## 京都の發舞伎

四版全 五百餘頁  
定價 金四圓  
送料 金八十錢

### 現代出版界の最高峰

### 芝居愛好家の必讀書

歌舞伎に關する文獻がこれまで殆んど江戸歌舞伎の研究に限られ、上方歌舞伎を無視してゐた偏狹な見方に對して、上方——特に歌舞伎の發生地である京都の歌舞伎芝居の爲めに萬丈の氣を吐いたもの、即ち本書であつて、前人未到の境地である四條河原に於ける七つの櫓の盛衰變遷を文章と繪畫によつて詳細に記述し、近代の明治大正期は今秋新裝成つた日本最古の劇場たる南座を中心に京都に於ける大劇場と對照した年代記風の年表、劇壇の逸事、名優の傳記等を收録したから、慶長元和以來三百年に亘る京都の劇場史として、古今唯一の多趣多彩な讀物であらう。

藤井紫影博士の序文の一節に曰ふ……京都芝居に關する文獻は甚だ乏しく從來まだ一個の成書もなかつたのを今回堂本君が南座の改築を機とし、零細なる記録を摺摺拾集して新たに此書を作成されたのは誠に賀すべきである……伊原青々園氏の序文の一節に曰ふ……わが歌舞伎劇は最初京都に發生して後に江戸と大阪さに移殖せられたるなり即ち日本演劇の源流を探らんとするものは、先づ京都に於けるその歴史を知らざるべからず、堂本君の編述は此の点に於て最も貴重なる文獻たりさいふべきなり……

發行所

東京市神田區錦町一ノ一  
京都市上京區下長者町油小路

文獻書院

# 一南

## 温泉料理

御宴會には

### 百疊敷大廣間

御芝居の

お歸りには

皆様お揃ひにて情趣

深いおつな温泉料理

文樂座

### 南一食堂

### 洋食部

### 和食部

### 大宴會場

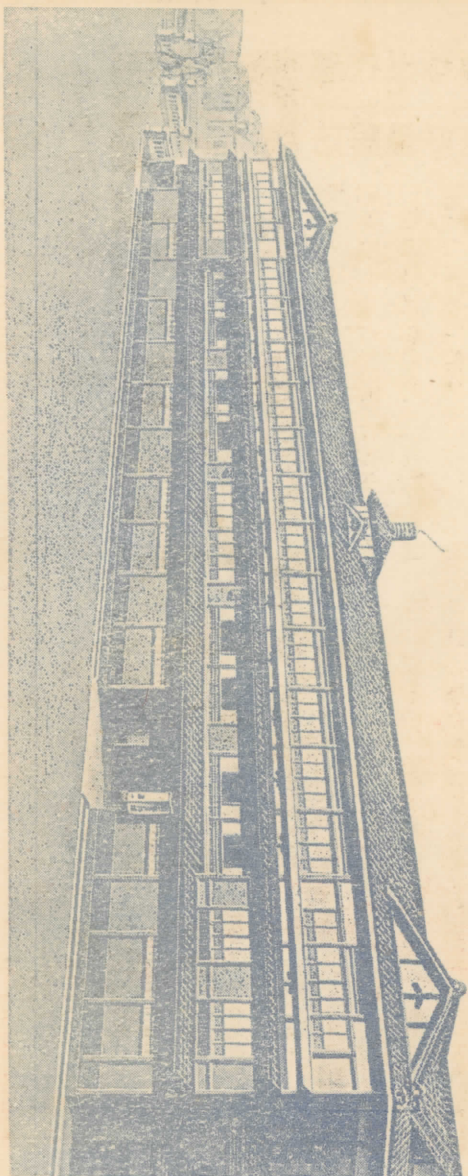
御婚禮

### 御披露宴

四ツ橋

# 山 南一温泉旅館

電話南 五七七〇  
二九一〇  
番





昭和四年十一月三十日  
昭和四年十二月一日  
發行  
昭和三十五年三月  
郵便物認可

若く明る顔  
なるに  
ト

粉  
東京  
平尾  
平  
商  
店



道頓堀第四年十二月號

第三十九輯

本號に限り  
特價金參拾五錢

郵  
一錢五厘稅